Reverse cross

江端　真樹沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒｅｖｅｒｓｅ　ｃｒｏｓｓ

【Ｎコード】
Ｎ５３６６Ｏ

【作者名】
江端　真樹沙

【あらすじ】
「こんな姿に、好きで生まれてきた訳じゃない…」
赤い瞳と赤い髪、そして細く長い耳を持つ男の叫びは誰にも届かない。
長い間、愛されていると信じて疑わなかった両親の愛は、この姿ゆえに崩壊した。
ある日起こった事件を切っ掛けに彼の運命は更なる悲劇を呼び、家を失い、両親には見放され、果ては国さえも追われて天涯孤独の身に陥る。

一人で生きる事を強いられた彼は、信じられるものなど何もなくただ密かにその胸に復讐を誓った。

序章

「いやあぁぁぁあぁぁぁぁぁぁ――っ！！」

断末魔の悲鳴と共に血飛沫が舞い上がった。
冷たく見下ろす真っ赤な眼光。足元にまで伸びた瞳と同じ色の赤い髪。そして横に長く伸びた耳…。
紅き魔物と呼ばれ、長年恐れられている男…。
目の前で殺した女の返り血を浴び、フン、と鼻を鳴らす。
頬に飛んだ血を親指で乱暴に拭い去ると、おもむろにそれをペロリと舐め取った。
「他愛も無い…」
くっと短く笑い、その口元は不気味にほくそえむ。
男は踵を返し小さく呪文を詠唱すると大きく風がうねり、彼を包み込むように取り巻く。そしてふわりと体が宙に舞い上がると、そのまま闇の中に姿を消した…。
冷たい風の吹き荒れる、紅い月夜の出来事だった。

レグリアナ大陸の遙か西方。港町リグレッタが一夜にして消失した事は、瞬く間に世界に知れ渡る。
人々は紅き魔物の仕業と恐怖し、怯えの色を濃くした。

――　紅き魔物…

彼の真実を知らない人々は、ただ彼を恐怖の対象でしか見る事がない。
全ての真実は彼の胸の中に…。
天涯孤独の、冷酷で恐ろしくも悲しき男、リガルナ。
全ての真実と彼の素性が明かされる時、道は開かれる…。

第一章：愛情

『あなたは誰なの…』
暗がりに浮かび上がった女の顔は、恐怖に青ざめている。ややや つれているかのような、暗い表情の女性の顔にはまるで生気を感じられない。ただあるのは、恐怖に怯えた瞳が、此方に向けられていると言う事。
『あなたを産んだ覚えはないわ…』
震える声音で、呟くように女性はそう言った。一番信頼していたはずの人間から発せられたその言葉は、深く傷つく要素を十分に含んでいる。
『寄らないで…触らないで！　いやぁっ！！』
悲鳴にも似た声で女性はそう言い放った。顔を背け、体を縮み上がらせながら怯えの色を濃くする。
いつからだったか、繋いでいたはずの手は振り払われた。激しく、まるでケダモノを振り払うかのように…。

『お前はあいつと魔物の間に生まれた、魔物と人間のハーフだ』
暗がりに浮かび上がった男の顔は、軽蔑と憎悪、そして恐怖から鬼のごとき顔を見せていた。突如として投げつけられた言葉は、衝撃的で愕然とさせる。
『この化け物め！　そんな目で俺を見るんじゃない！』
体中を打ち震わせ、入り混じる感情に力任せに振り上げられた手は、体がよろめくほどに強く頬を打ち抜いた。
『お前達は俺を裏切ったんだ。だからこの仕打ちは当然の報いなんだよっ！』
大きく見開かれた瞳。口元には薄ら笑いすら浮かべ、気が触れたように大きく振り上げた足は激しく体を蹴り上げる。例え血を吐いても、休む事無く延々と…。

必要とされて生まれてきたはずなのに、そうじゃなかった。
愛されていると思っていたのは、勘違いだった…。

――　俺は…こんな姿に好きで産まれた訳じゃない！

冷たい風が吹き抜け、その風の冷たさと不気味に鳴り響く風笛の音にふと目が覚めた。
ゆっくりと瞼を開くと視界にはゴツゴツとした岩肌、入り口付近に左右に灯された緑色に揺らめく松明の灯りが目に入る。
いつの間にか眠っていた…。体を石の上に横たえる事も無く、じっとその石に座ったままで。
「……不愉快だ」
目覚めた男は、憮然とした表情を露にその場にゆっくりと立ち上がる。緑色の松明の元に、血を塗り込めたかのように紅く鋭い眼光が揺れた。
真っ赤な瞳と、その瞳と同じ色の足元にまで長く伸びた髪、そしてその髪から突き出た細長い耳が緑の松明に不気味に浮きあがった。
赤…。
この世界では赤と細長い耳は魔を象徴する色であり形である。
もう何千年も遠く昔の人間が、今でこそほとんど見なくなった魔物の姿を見、その姿が驚くほどに赤かった事から伝承のように言われ続け、今に至る。赤はよほどの事が無い限り取り扱う事が無い。
それら全てを兼ね備えたこの男の名はリガルナ。
リガルナは忌まわしい過去の夢を、このところ良く見ていた。
忘れたくても、自分の中の無意識な意識がそれをさせてはくれない。体に残った数々の傷が消えないのと同様に…。
腹いせに、つい先日港町を一つ消してきたばかりだ。
またこんな夢を見ては、不愉快以外の何ものでもない。このまま

ではゆっくり休む事も出来ず、リガルナはジャリ…と地面を踏み鳴らし、洞窟の出口を目指して歩き出した。
詰襟の黒い服。大きなスリットが両端に入った異国の衣服を身にまとい、その服の下には白いズボンを履いている。
それらは全て、まるで己の赤をわざと強調させるかのようなものだった。
外に出れば、空には満天の星空。今夜は新月の為月は見えない。その代わりに無数に散りばめられた星々がチカチカと力強く瞬いている。
「……」
リガルナはそっと目を伏せ両手を腰の辺りで大きく広げる。
穏やかに流れていた風が、リガルナの呼応に応えるかのように入り乱れ周りに集まり始めた。
スゥッと目を開くと、真っ暗な夜の闇を鋭く見据える。
「今宵もまた、人間達を冥府へ送ってやろう…」
クックッと不気味に笑い、リガルナの体は空中に舞い上がり夜の闇に溶け込むように消え去った…。

第一章：愛情

聖殿暦２４６８年、初冬。
この世で一番大きく、また美しいと称えられている巨大国家、レグリアナ。
その大地にもレグリアナと言う名が使われるほどにこの国は大きく、また権力をも握っていた。
全てを見渡すような先見力、そして神の声を聞く事が出来る王女であり巫女である女性の存在…。それらがこの国の誇りと名誉を保ち続けている。
この国は先祖代々女性が権力を握り続け、王として君臨する事が当然のように続いていた。
「また一つ、消えたか…」
謁見の間で、遠征に出ていた兵士からの報告を聞き、目を細めるエレニア。彼女が現在のレグリアナ王国の女王である。
手にした扇をパチンと勢い良く閉じ、深く溜息を吐き出す。
「このところ、続いておるようじゃな」
その問いかけに答えたのは、傍に控えていた大臣、グルータスだった。
「誠に…。かつての赤き魔物の仕業であることは、日の目を見るより明らかだと…」
「またあやつか…。全く、あの時わざわざ見逃してやった恩を仇で返してきおった…。のう、マリア」
エレニアは憮然とした表情のまま、後方の座席に座り視線を手元に落していた我が子を振り返る。
視線を向けられ、どこか悲しそうな表情をして俄かに顔を上げた彼女は、この国の王女でありまた巫女として崇められているマーナリアと呼ばれる女性だった。
マーナリアはかち合ったエレニアの視線から逃れるように、再び

視線を手元に落す。
「マリア。そなたがどれだけ甘かったか、これで分かったであろう」
「……」
エレニアの問いかけにマーナリアは答える事無く、ただ静かにそっと目を閉じた。その様子に対し、エレニアは短く溜息を吐くと前方を振り返り、エレニア達の座っている場所からへりくだった場所に跪いている兵士を見やる。
「わざわざご苦労であった。もう下がって良い」
兵士は更に腰を折り深く礼をすると謁見の間から立ち去った。
「あれをここへ」
兵士が立ち去ったのを確認し、エレニアはある人物を呼び寄せた。
グルータスは一度腰を折ってその場を離れると、すぐにエレニアが呼んだ人物を連れて現れる。
長身の、細身ながらその体つきはしっかりとした精悍な顔立ちの男。薄紫色の短い髪に緑色の瞳をしたこの男は、この国の騎士長としての地位を任されているセトンヌと呼ばれる男だった。
セトンヌはエレニアとマーナリアの前に跪くと頭を垂れる。
「お呼びでしょうか。エレニア様」
「うむ。セトンヌ。そなたの仇名す者がその姿を現しおった」
「……赤き魔物が…？」
険しい表情を見せ目の前のエレニアを見上げるセトンヌの眼差しは、緊張と動揺に揺れている。そんなセトンヌを見やり、エレニアはニッとほくそえんだ。
「先ほどの兵士の話ではおそらく間違いはないだろう。奴は一夜にして町を消滅させるほどの実力をつけておるようだ。あの日、あやつを逃した事をそなたも悔いておるのだろう？」
エレニアの問いかけに、セトンヌの表情は更に険しく憎悪を露にした。
きつく握り締め、床に拳を着いていた手が激しい憎悪と怒りに俄かに振るえている様が窺える。

その姿を、マーナリアは思いつめたように見つめていた。
「もちろんでございます。あの男の事は、１２年経った今でも忘れた事はございません」
「うむ。１２年もの間、そなたを苦しめてきた赤き魔物…。そろそろそなたもその肩の荷を降ろしたくは無いか？」
「…はい」
その言葉に、エレニアは満足そうに微笑み、玉座の背もたれに背を預けながら深く椅子に座り直す。
「では、そなたに申し付けよう。赤き魔物の討伐をな」
「お母様！」
エレニアの言葉に反応をしたのは、これまで固く口を閉ざしていたマーナリアだった。
マーナリアは勢い良く椅子から立ち上がると、悲壮な表情を浮かべエレニアに詰め寄る。
「あの方は、何もしてはおりません！」
「…マリア。まだそなたはそのような事を申すのか」
「万物の神は仰います。あの者の真実を。その神のお告げに背く事があってはならないのではないですか！？」
その言葉に、エレニアは苦虫を噛み潰したような顔を見せる。
この国では女王の発言力よりも力があるのは巫女である王女の発言。だが、この時ばかりはエレニアも引き下がる様子はなかった。
「…もう良い」
「お母様」
「マリア。いくら神がそう仰せでも、あの者はこれまで多くの人間を手にかけてきておる。現に昨日も港町を一つ消失したと言うではないか。このまま野放しにしておってはならぬ。それに、あの日あやつを逃した事の付が今になって返って来た。しかも悪い方向でな…。このまま無力な一般市民たちの死を、指を咥えて見ておれとそう申すのか？」
エレニアの言葉に、今度はマーナリアが苦虫を噛み潰したような

表情を浮かべ、口をつぐんだ。両手を体の前に組んでいるその手が、きつく握り締めている姿をセトンヌは冷静な眼差しで見つめていた。
「……しかし、彼をここまで追い詰めたのは私達のせいです。彼をきちんと理解していれば、彼は大勢の人間に手を出す事はなかったはずです」
エレニアは呆れたかのように深い溜息を吐いた。そして手にしていた閉じられた扇を、パンっと反対側の掌に叩きつけて打ち鳴らす。
「その事はもう過ぎた事だ。今更どうこう言っても仕方があるまい。過去に回した付の回収を今行わずしていつ行う。もうこれ以上手をこまねいてはおれぬ」
「お母様…」
エレニアはすくっと椅子から立ち上がると、意地でも食い下がろうとするマーナリアを他所に目の前で頭を垂れているセトンヌに対して、手にした扇を突きつけた。
「セトンヌよ。ただちに討伐に向かうのだ。そなたが見事奴を討ち取った暁には、すぐにでもマリアとの祝賀を挙げようぞ」
「はい。ありがたき幸せにございます」
セトンヌは深く頭を下げ、エレニアの命を受諾した。

第一章：愛情

「セトンヌ」

謁見の間を離れ、リガルナ討伐の支度をすべく移動していたセトンヌを追って、同じく謁見の間を抜けてきたマーナリアが声をかけた。

セトンヌは後ろから追いかけてきたマーナリアを振り返ると、目の前に走り込んだマーナリアは肩で荒く呼吸を繰り返しセトンヌを見上げている。

「マーナリア様…」

息を整え、ようやく落ち着いた頃になってマーナリアは口を開く。

「…本当に討伐に向かうのですか？」

「……」

マーナリアの言葉に、セトンヌは口をつぐんだ。

騎士長としての地位を獲得してから、様々な功績を認められ現在セトンヌはマーナリアと婚約者同士となっている。その婚約者を前にセトンヌは瞬間的に面食らったような顔を浮かべた。が、一呼吸置いて口を開く。

「もちろんです。あの男は私にとって仇以外の何ものでもありませんから」

「セトンヌ…。彼は、本当にあの日何もしていないのです…」

マーナリアは思いつめたような顔でセトンヌを見上げるも、セトンヌもエレニア同様にマーナリアの意見にはこの時ばかりは首を横に振った。

「マーナリア様。申し訳ありませんが、今回ばかりは私もそれには同意しかねます」

「セトンヌ…」

悲しげに揺れるマーナリアの瞳から逃れるように視線を外したセトンヌは、等間隔に並んだ円柱に手を付き、そこから見える中庭を

見ながら小さく溜息をつく。
「もう１２年。１２年ですよ。私があの忌々しい魔物に全てを奪われて１２年も経ちました。私はもうさすがにこれ以上は待てません。それに、以前も申し上げましたが…」
セトンヌは眉間に皺を寄せ、深い執念に満ちた瞳をマーナリアに向けた。マーナリアはその瞳に何も言えず、ただ黙り込んでしまう。
「私はあの日、あなたが下した判断に対して未だに理解しかねるものがあります」
「……」
「あの時あのまま奴を処刑していれば、今こうして多くの人間が死なずに済み、また私も長い間あの男への憎悪を胸に溜める事もなく穏やかな毎日を過ごせていたに違いありません」
マーナリアはセトンヌのその瞳を見ていられず、思わず顔を俯けた。
「あなたが、とても辛い思いをしてきた事は分かっています。でも、きっと彼はそれ以上に…」
「マーナリア様」
マーナリアの言葉を遮るように、セトンヌは口を挟んだ。本来なら、こんな状況は有り得ず恐れ多い事だが、これも婚約者と言う立場から成せる事でもある。
セトンヌの表情は非常に固く、憮然とした表情を浮かべている。
「あの男は犯罪者です。多くの人間を手にかけてきた犯罪者であり魔物なのです。あなた様もよくご存知でしょう？　日々の奴の仕出かす罪の大きさを。あの男は、もうあなたの知る者ではありません」
「……」
「災いの芽は早い段階で摘んでおかなければ…。これ以上の被害はおろか、この国にまでいつか必ず危害が及びます。マーナリア様は罪も無い人間がこれ以上あの男に殺されるのは仕方がないと、そう仰るおつもりですか」
セトンヌの言葉に、マーナリアは返す言葉も無くただ黙り込んで

しまった。
セトンヌ自身もいささか言い過ぎたと思ったのか、それ以上の言葉を言う事はなく気まずそうに視線を逸らした。
「…申し訳ありません…。少し出過ぎた真似をしました…」
「…いいえ。大丈夫です…」
セトンヌは一言謝るとその場は離れた。
その場に残されたマーナリアは、傍の円柱に手をかけ寂しげに視線を足元に落した。
あの時、自分達が彼を攻め立てるような事をしなければこんな事にはならなかった。今更言ってもどうする事も出来ないのは十分に分かっている。
それでも、マーナリアの胸中はあの時の事が未だに罪の意識として燻り続けている。
「…リガルナ」
マーナリアは悲しそうな瞳を浮かべ、そっと月のない空を見上げた…。

第一章：愛情

――――２８年前…。

肌に感じる風が、身を切るかと思われるほどに冷たく鋭さを秘めた冬の夜。

一人の女性が吐く息も白く、肩にかけた茶色のケープをしっかりと胸元で握り締め家路を急いでいた。

その足取りはやや小走り気味にもなり、また時折早足で歩いたりと忙しなく歩を進めている。頬と鼻は寒さに赤らみ、ケープを握る手が小刻みに震えている様を見れば、この日どれだけ寒いのか分かるほどだ。

しかし女性の顔は嬉しさにほころび、この寒さを物ともしていないように見える。目をキラキラと輝かせ幸せに染まった顔からはこの寒さをも吹き飛ばす笑みが浮かんでいた。

レグリアナ王国で一番広いとされる、東西南北に伸びた南側の大通りを忙しなく歩き、一本右の路地に入ると彼女の家はすぐだった。

小さなオルゴール工房。ここには彼女とその夫が夫婦二人で仲むつまじく暮らしている家だ。

「トーマス！」

玄関のドアを開くと、ドアベルがカランカランと音を立てる。

待ち兼ねていたかのように、二階の自宅へと上がっていたトーマスは明かりを灯して階段を下りてくる。その表情は期待に満ちた顔だった。

「フローラ！　寒かっただろう？　さ、早くこっちにおいで」

ケープを取り外したフローラの肩を優しく抱きしめ、トーマスは二階へと共に上がっていく。そしてキッチンへ入ると暖かなミルクを注ぎフローラの前に差し出す。しかしフローラはミルクの注がれたカップを取らずにトーマスの方を振り返り、その手をしっかりと

握り締めた。
自らもやや興奮状態を落ち着かせるように数回深呼吸を繰り返す。
「トーマス…、落ち着いて聞いてね」
「あ、あぁ」
「あのね…。……赤ちゃんが出来たの！」
「やっぱり！」
トーマスとフローラはその場で力強く抱きしめ合い、子供が出来た事への歓喜に沸いた。
結婚をして１０年。これまで一度も子供に恵まれなかった二人の間に、念願の子供が授かった。その喜びは言葉ではとても言い表せない。
しばらくの間二人は共に抱きしめ合い、笑い合い、そしてトーマスはまだ膨らんでもいないフローラの腹に話しかける。
「おーい、パパだぞー。早く出ておいで」
「やだ、トーマスったら。赤ちゃんに会えるのはまだまだ先よ」
クスクスと笑うフローラに、トーマスもまた同様に「そうだよな」と言いながら笑った。
何事もなく無事に育ちますように…。そう願いを込めフローラとトーマスはお腹の我が子を慎重に、大切に育てていた。
月日は流れ、フローラのお腹も順調に大きくなり何事もなく臨月を迎え、出産の時期を迎えた。フローラは我が子の為に全てをかけて出産に臨み、無事、玉のような男の子を産む事に成功する。
「おいで。私の可愛い赤ちゃん…」
生まれたばかりの我が子を愛おしく胸に抱きしめ、涙を滲ませながらその顔を覗き見る。
茶色の髪をした小さな我が子…掌は大人の掌のおよそ１／３ほどしかない。指を差し出せば力強く握り返し、暖かく息づいている事が分かる。
「見て。あなたにそっくりよ」
「いや、君に似てる。特に目元なんかそっくりだ」

「…可愛い子。きっと何があっても守ってあげるからね」
フローラとトーマスは、交互に我が子にキスを贈った。そして、数日後には名前も決まりこの赤子の名はリガルナと命名された。
リガルナはその後病気をほとんどする事もなく順調にすくすくと育ち、フローラとトーマスにとってかけがえの無い一人息子として育っていた。
何もかもが順調。これ以上の幸せなど、どこにもあるはずがない。…そう思っていた。
その異変に気が付いたのは、始終共にあるフローラだった。特別気にしなければ気にはならないであろう事だったのだが、この時のフローラには異様に気になるものだった。
工房の裏にある庭で、元気に駆け回る１０歳のリガルナ。そのリガルナの髪と瞳の色が以前と違って見えたのだ。

第一章：愛情

「トーマス…」
隣に座っていたトーマスにフローラが声をかけると、トーマスは不思議そうに振り返った。
「どうしたんだい？」
「リガルナの髪と目の色、何だか少し変じゃない？」
「ん？」
フローラの言葉にトーマスは目の前を駆け回るリガルナに視線を送り、じっと見つめる。
リガルナはその視線に気付きニコニコと笑いながら手を振ってみせた。トーマスもそれに答えるようににこやかに手を振り返し、フローラを振り返る。
「そうかな。太陽の光のせいじゃないのか？　リガルナの髪色は生まれた時から僕達よりも明るい茶色をしていたし」
「……そう、ね。そうよね」
フローラはこの時、自分の目よりもトーマスの言葉を信用した。しかし、それは日を追うごとに変わり、果ては丸かったはずの耳までもが微かに鋭さを帯びてくるようになる。不安を感じながらもフローラは気のせいだと自分に言い聞かせ、それを見過ごしてきた。
ところがリガルナが１２歳の誕生日を迎えた日には、明らかに豹変した髪と瞳と耳の形…。茶色だったはずの髪と目の色は赤みが強く、見ようによっては茶色に見えないことも無い、と言うほどにまで変わっていた。丸かった耳は以前よりも先端が尖り、並みの人間には見られないような形に変わっている。
このリガルナの変貌振りには、さすがのトーマスも気が付かない訳ではなかった。
「ねぇ…。あの子…」
「……あぁ…」

トーマスとフローラはリガルナが寝静まった夜、キッチンで暖かなハーブティーを飲みながら向かい合って座り、そんなリガルナの事について話をしていた。
突如として変貌し始めたリガルナ。しかもその変わり方は、この地に古くから言われている魔物が持っていると言う赤と尖った耳へと変わって行っている。
あれだけ愛おしく大切に育てて来た我が子が、まさか魔物に変貌するなどとは考えたくも無い。現に魔物自体の存在がほとんどこの時の世界ではないに等しいのだ。
不安が積もる。トーマスとフローラは日毎会話が減っていき、我が子の変貌に言葉を失うばかりだった。
ある日、フローラは城下町の外れにいると言う良く当たると定評の付いた有名な占い師の話を聞きつけ、家へと帰って来た。
工房で注文の入っていたオルゴールの制作をしていたトーマスに、フローラはその話を持ちかけた。
「トーマス。さっきご近所の方から聞いたのだけど東地区に良く当たる占い師の方がいらっしゃるんですって」
フローラのその話に、トーマスは手を止め彼女を振り返る。
「占い師？　何でまた占い師なんて…」
「リガルナの事を占って貰ったらどうかしらって、そう思ったの」
「……」
暗い表情を浮かべ、フローラがそう呟く。
最近は特に赤みを帯び始めたリガルナの髪と瞳。日を追うごとにそれはハッキリと変わっていき、今ではとても茶色には見えないほどにまでなっている。
余りの事に近頃はリガルナに対し外出を控えるように言い聞かせ、ほぼ毎日を家の中で過ごさせていた。
世間の目がリガルナを傷つけ、果ては自分たちにもその危害が及ぶ事になるかもしれない…。その思いからリガルナの外出を控えさせていたが、このままずっと部屋に押し込んでおくのも可哀想だと、

フローラは考えていた。
もし、占い師に判断してもらい何事もなく何かクスリで治るのであればそうしてあげたい。そう思うのは親として当然の事だと思っていた。
「あの子の身に一体何が起きているのか、私には分からないわ。でも、きっと計り知れない何かが起きているような気がするの。だから一度占い師の方に見てもらったらいいんじゃないかと思って…」
フローラのこの提案が家庭が崩壊する道を辿る事になるとは、この時誰も予想する事が出来なかった。
始めは乗り気ではなかったトーマスだったが、リガルナの変貌の事が気にならないわけではない。フローラの話に深く頷くと、翌日になり店を臨時休業にしたトーマスはその占い師の元へと出向いた。

第一章：愛情

東地区の東大通を大きく逸れ、誰も寄り付かないような薄暗い裏路地。その路地の一番奥に占い師の家はあった。

“マルールの館”とでかでかと書かれた崩れかけの看板、今にも落ちてきそうな外壁。所々に蜘蛛の巣が張り、とても人が住んでいるようには見えないボロ屋。あまりの小汚さに、トーマスは入る事を躊躇った。

「ほ、本当にここで大丈夫なんだろうか…」

しばらく家の前をうろついていたトーマスだったが、このまま入らずに帰る訳にもいかないと心を決め、屋敷に足を踏み込んだ。

中は薄暗く、埃っぽい湿った空気に包まれていた。一歩踏み出すとミシリと音が鳴り、下手をすれば床を踏み抜いてしまうのではないかと思われるほどだった。

「あの…。すみません…」

トーマスがそう声をかけてみるが、人の気配もなく、物音すらしない。

「どなたかいらっしゃいませんか…？」

再びトーマスが声をかけると、のそりと動く影があった。

ビクリと体を震わせ、トーマスがそちらを見ると暗い物陰から長いローブを身にまとった一人の老婆が姿を現した。

老婆はトーマスの目の前まで歩み寄ると、食い入るようにじっと彼の顔を見つめる。

「客か…」

短くそう呟くと、くるりと向きを変え、トーマスに奥の部屋へ来るよう手招きをして呼び寄せる。

トーマスは息を呑み、恐る恐る老婆の後を追いかけて奥の部屋へ入っていった。

中は表とはまるで違う世界だった。部屋全体を紫色の布で覆い、

天井からは無数の煌びやかなイミテーションがぶら下がっている。部屋中には部屋と同色のカバーがかけられた無数のクッションが敷き詰められ、同じく煌びやかな置物が所狭しと置かれていた。
そんな部屋の中央に、透明度の高い大きな水晶が丁重に台の上に置かれ、その前に老婆が座り込んでいる。
「そこへ座るがいい」
老婆は自分と向かい合うように、水晶の反対側へ座るようトーマスを促した。
トーマスは言われるがままにそこへ座り、落ち着かない様子で辺りを見回していた。
「……。おぬし、何か不安を抱えているね？」
突如としてそう声をかけられ、トーマスは驚いたように目を見開いた。
「え…」
「ここに見えている。そう、何か大きな不安だ…。それは…子供の事だろう？」
こちらが何も言っていないのに、ズバリ言い当てられた。
トーマスはただただ驚くばかりで、老婆の言葉に何も言えないまま首を縦に振った。
「……」
それ以降老婆は言葉を発する事無く、じっと水晶を見つめている。そして突如としてハッと顔を上げると、老婆は残酷な言葉をトーマスに投げかけた。
「その子を生かしておいてはならぬ」
「え…？」
突然の言葉に、トーマスは言葉が出てこない。困惑した顔を向け立ち上がった老婆を見上げていた。

第一章：愛情

「すぐに殺すのだ。その子は災いを呼ぶぞ。おぬしらだけではない、この世界全てを飲み込む災いだ」
「ど、どう言う事ですか…」
「おぬしらの子供は魔物だ。赤き魔物だ。１６の誕生日の夜にその子が人を殺す事件が起きる。それは災いの序章でしかなく、その災いは必ず起こる。そうなる前にその子を殺すのだ！」
老婆は恐怖に怯えたかのように目を見開き、戦慄いて見せた。
当のトーマスは理解しがたいその言葉に、憤りと共に呆れたような笑いすら起きる。
「ちょ、ちょっと待って下さい。そんな、自分の子供を殺す事なんて出来るわけ無いでしょう？！」
「ならぬ！　必ず息の根を止めろ！　そうしなければおぬしら諸共全て闇に飲まれ消失する事になるぞ。今の内に災いの芽を摘まなければ、取り返しの付かない事になるのだ」
「ふざけた事を言わないで下さいっ！」
トーマスは怒りを露にその場に立ち上がった。目の前で自分を睨み上げる老婆に対し、トーマスもまた睨み返した。
「あの子は、リガルナはやっと僕達の間に生まれた大切な子供なんです！　ずっと子供が出来なかった僕達にやっと授かった子供なんですよ！　その子をどうして殺せると言うんですか！！」
「殺せ！　殺すのだ！　さもなくば世界は闇に飲まれる」
「いい加減にして下さいっ！」
憤りを露にし、トーマスの声が自然と大きくなっていた。握り締めた両方の拳が微かに震えるほどに、普段あまり怒る事が無いトーマスの、初めて見せる怒りだった。
そんなトーマスを見上げていた老婆の目が、突如としてキュッと細くなる。そして知らないはずの情報がその口から出た。

「では聞くが、おぬしらの子供はなぜ髪と目が赤いのだ？　なぜ、耳が尖っておるのだ？」
「……っ！」
「古くから言われている魔物そのものを表す赤は、今の時代をもってしても忌み嫌われる不吉な色。鋭く尖った耳は魔物を表す一つの象徴。おぬしもそれを知らぬ訳ではないだろう？」
何もかもを言い当てられ、トーマスに返す言葉がなかった。そんなトーマスを睨むように見上げていた老婆は、今一度同じ事を繰り返した。
「良いか。必ず始末するのだ。１６の誕生日を迎える前に、必ずだ。それがおぬしに出来るおぬしの子供への愛情だと思え」
老婆は念を押すかのようにそうトーマスに言い聞かせた。
トーマスはその帰り道、重い足を引き摺るようにして歩き朦朧とする頭の中で葛藤を繰り返していた。
リガルナを殺すか…殺さないか…。災いなど本当に起きるのか、起きないのか…。先の見えない自問自答を繰り返しトーマスは呆然としていた。

第一章：愛情

知らぬ間に、空からポツリ、と雨粒が落ちてきた。
ぼんやりとする頭で空を仰ぎ見ると、徐々にその雨粒は数を増し、そして勢いも増してくる。
通り雨だ。辺りを歩いている人々は急いで店や家の軒下に逃げ込み、雨が通り過ぎるのを待っていたがトーマスはその場から動く事はせず、空を仰ぎ見たままその雨を体全体に受け止めた。そしてゆっくりと顔を下げると、再び重い足を踏み出し、家路へと向かう。
一歩一歩、家が近づくにつれてトーマスの心がざわめきたった。
あの子は悪魔の子供なんかじゃない。少し他とは違うだけだ。そうだ、ほんの少し、ほんの少しだけ…。
ゆっくりと玄関のドアノブに手を掛けて開くと、目の前にはリガルナの姿があった。
「あ、お父さん。どうしたの？　全身びしょ濡れじゃないか！　今丁度傘を持って探しに行こうと思って…」

ホンノ…少シダケ…。

トーマスはその場に凍りつき、目の前のリガルナをまるで食い入るように目を見開いて見下ろした。
「お父さん…？」
次の瞬間、トーマスは不思議そうに見上げてくるリガルナの胸倉を掴み上げ、椅子の並べたてられている工房内へ思い切り投げ飛ばした。
投げ飛ばされたリガルナの体は椅子を弾き飛ばし、壁に思い切り体を打ちつけた。
突然何が起こったのか理解できず、背中に感じる鈍痛に顔を歪めながら今自分を投げ飛ばしたトーマスを見上げる。

「お、父さ、ん…」
「トーマス！」
物凄い音に、二階にいたフローラが慌てふためいた様子で階段から下りてくる。
トーマスはそんなフローラには目もくれず、リガルナの前にゆっくりと歩み寄ってきた。
いつもとはまるで様子が違う父の姿に、知らず知らずリガルナも恐怖を感じ取り、体を小刻みに震え上がらせながら青ざめた顔で父を見上げている。
「……お前は悪魔の子だ」
突如として呟いたトーマスの低く唸るような声音。その目は相変わらず食い入るように大きく見開きリガルナを見下ろしている。
「…え」
トーマスの言葉に、リガルナは困惑の色を見せた。
「お前は魔物と人間との間に産まれたハーフなんだよ！」
そう言うなり、足を振り上げてリガルナの体を思い切り蹴り上げた。
「トーマス！　トーマスやめて！」
力いっぱい蹴り上げられ、リガルナは咄嗟に両手で頭を庇い体を小さく丸めて防御体勢を取っている。それでもお構いなくトーマスはリガルナを蹴り上げ、踏みつけ、激しくなじる。
フローラはそんなリガルナとトーマスとの間に割り込み、リガルナの体を抱きかかえるようにしてトーマスの蹴りを背中に受ける。
突如として割り込んできたフローラに対し、一瞬トーマスの攻撃が止まる。
フローラは恐る恐る背後を振り返り、その場に立っていトーマスを見上げた。が、今まで一度として見た事がないような形相でこちらを睨み下ろしているトーマスの姿に、フローラは凍りついた。
「……そうか。お前もそうなんだな…」
「な、何を言っているの…。トーマス、何があったと言うの？」

「うるさいっ！」
そう言うなり、トーマスは渾身の力でフローラの頬を激しく打ち抜いた。
「きゃあっ！！」
「お母さん！」
激しく打ち抜かれた衝撃に、フローラは横倒しに倒れ込んでしまう。咄嗟にリガルナが丸め込んでいた体を起こし、フローラの傍に駆けつける。
「…お前が、僕に隠れてこそこそと魔物と契りを交わしたんだろ。だからこんな子供が産まれたんだ…」
「トーマス！　何を言っているの！　そんな事有り得ないわ！」
赤く腫れ上がった頬を押さえ、涙を流しながらそう訴えるフローラに対してもトーマスの暴力は働いた。
トーマスはフローラの腹部を狙い思い切り蹴り上げる。
「やめ…やめてよ！　お父さんやめて！　お母さんが死んじゃうよ！」
「うるさい！　お前のような魔物にそんな事を言われる筋合いはないっ！」
トーマスは腕を振り上げ、リガルナの頬も思いっきり打ち抜いた。

第一章：愛情

「お前ら二人とも俺を裏切ったんだ。これは当然の報いなんだよっ！！」

トーマスは大きく目を見開き、口元には薄ら笑いすら浮かべて執拗なまでにフローラとリガルナを殴りつけた。

それは来る日も来る日も続いていく。フローラは完全に憔悴しきり、家を出ようとするがトーマスがそれを許さなかった。一度家を出ようとすればこれ以上ないほどに激しく暴行を加えられる。死ぬ覚悟でキッチンに立てば、それすらも許されず、また暴行…。

リガルナも例外なく激しく打ちのめされ、フローラを守るために必死にトーマスと対峙するがいつも散々に打ちのめされてしまう。その度に「悪魔」だ「魔物」だと激しく罵られ、心にも体にも深い傷を負っていく。

トーマスは完全に自我を手放し、気が触れてしまっていた。

そんな毎日が長年に渡り続けられ、気が付けばリガルナは１６歳の誕生日を迎えていた。

部屋からは一歩も出られない監禁状態が続き、あれほど快活に元気一杯だったリガルナの体はやせ衰え肌色も色白になっていた。髪色はもう誰が見ても間違える事のないほどに真っ赤になり、悲しく憔悴した瞳の色も赤かった。耳は鋭く尖り、もはや常人の形のそれとは違う物になっている。

そんな自分の姿を、鏡で見るのが嫌だった。部屋にあった鏡という鏡は全て割られ排除されている。

自分がこんな姿でなければ、フローラやトーマスはあんな風にはならなかった。自分のせいで家庭が崩壊した…。

深く自分を責め立て、リガルナは毎日のように涙を流す。

その時ふと、部屋のドアがノックされゆっくりと押し開かれる。リガルナがビクリと体を震わせてそちらを見やれば、生気の感じら

れない虚ろな瞳のフローラが、質素なご飯の盛られたトレーを手に立っている。
「母さん…」
今のリガルナにとって、唯一の心のよりどころはこのフローラだけ。トーマスに何度も殺されそうになったが、それを引き止めてきたのはこのフローラだった。フローラがいたからこそ、ここまで生きてこられたのだ。だから、このフローラの前だけでは明るくいたい。リガルナはそう思っていた。
無理やりにも作った笑みを浮かべフローラの傍に歩み寄る。
「ありがとう母さん。いつもごめん」
「……」
どこを見ているともなく呆然と立っていたフローラの前にリガルナが歩み寄ると、フローラはゆっくりとした動作でリガルナを見上げる。
「どうしたの？　母さん」
「……」
不思議そうに見てくるリガルナの姿を視界に捉えた瞬間、トレーを握っていたフローラの手が小さくカタカタと震え始めた。そしてその表情は驚愕したような顔をし、一歩後方へ退く。
「あなたは誰なの…」
「母さん…？」
「誰…？」
完全に怯えている。リガルナは目の前のフローラを見てそう感じた。
リガルナは努めて笑みを浮かべてフローラの肩に手を置くと、フローラの手からトレーが落ち足元に食べ物が四散する。
「何言ってるの母さん。俺は母さんの子供のリガルナだろ？」
「ち、違う…違う…」
まるで痴呆症のような発言に、リガルナの心がざわめいた。
フローラは肩に置かれたリガルナの手を激しく振り払い、怯えた

瞳をリガルナに向けている。
「あなたを産んだ覚えは無いわ…」
「母さん。何言って…」
リガルナが困惑した表情で手を差し出すと、フローラはそれは思い切り弾き飛ばした。
「やめて…寄らないで…」
「母さん」
「来ないで…いや…」
「母さん！」
「いやぁーっ！！」
フローラは悲鳴をあげ、自分の頭を両手で抱えるように押さえるとリガルナを振り切り階段を駆け下りて行った。
その場に残されたリガルナは、所在をなくした手をゆっくりと下ろし頭を垂れる。
母にも見放された…。
言いようのない絶望感に突き落とされ、リガルナはその場に立ち尽くした…。

第一章：愛情

その晩…。

親に見離され、どん底にまで叩き落されたリガルナは家にいる事すら煩わしくなり、半ば自暴自棄になって一階にいる両親の目を盗み、自分の部屋の窓から屋外へと抜け出した。

シーツを裂き、着なくなった衣服とそれを繋ぎ合わせた一本の紐。それをベッドの足に括り付け窓から外へ垂らす。それを伝い外へ出てみたが、真夜中と言う事もあり辺りには野良猫が悠々と歩き回りゴミ箱を漁っている他誰もいなかった。

自分に異常が見られ始め、トーマスの気が触れてからは一度も外へ出してもらえずに既に5年近い。窓から見える範囲内の街並みの変化は知っていたが、それ以外の場所もここ数年の間に随分と様変わりしたように見える。

久し振りの屋外に、リガルナは日頃の憂さを晴らすつもりで色々と歩き回ってみる事にした。

家の目の前に伸びる南大通り。それを北に向かって歩き、ふとした気まぐれで近くの路地を左に折れてみた。何があると言うわけではない。何となく曲がってみたかった、そんな感じだった。

その気まぐれが、リガルナ自身に更なる悲劇をもたらす羽目になろうなどとはおよそ想像すらつかなかった事だろう。

路地を曲がり、入り組んだ細道を気の向くままに好きな方向へ向かって歩を進める。しばらく歩くと、どこかで火の爆ぜるような音が聞こえてきた。

「……何だ…？」

リガルナがその音のする方へ足を向けた時だった。数メートル先の左に折れる路地から突如として誰かが凄まじい速さで飛び出し、こちらへ向かって走りこんでくる。

リガルナは咄嗟の事に身動きが取れず、道を塞いだままの状態と

なっていた。が、飛び出してきたその人物はリガルナの脇にある僅かな隙間からすり抜けられると思ったのか、その隙間を割りいるように飛び込んでくる。しかし当然のようにすり抜ける事などできず、リガルナの肩とその人物の肩が激しくぶつかり合い、勢いに押されてリガルナの方がその場に尻餅を着く羽目になった。

「いたっ！」

思わずそう声をあげると、ぶつかった人物は一瞬足を止めチラリとリガルナを見やり、そしてまたすぐにその場から走り去った。

リガルナがその人物を半ば睨み付け、尻を擦りながら起き上がると、今自分が行こうとしていた方向と見た。ふと、ユラユラと蠢く何かがある。決してそれは小さくは無い。むしろリガルナの身の丈など裕に越えるであろう何か。

リガルナがふとそれを見上げると、左の路地を曲がった先の民家に火の手が上がっている。

「家事…！？」

リガルナは咄嗟にその場から走り出し、火の手の上がっている家の前まで駆け込んできた。

轟々と燃え盛る炎の柱が行く筋も立っている。すぐ隣の家にも燃え移らん勢いに、リガルナはその場に立ち竦んでしまった。

パチン、パチン、と家の柱を焼く音が響く中で、ふと人の声が聞こえた。

「え…？」

リガルナは眉間に皺を寄せ、もう一度確認するべく耳をそばだてる。

「……て…」

「人が…、人がいる？！」

この時のリガルナは、ほぼ無意識だった。これだけ激しく燃え盛る炎の中に誰か取り残されている。このままでは死んでしまう、そう思うと体が自然と動いていた。

その体に水をかける事もせず家に入り込んだリガルナは、あまりの熱風に思わず顔を顰めた。腕で口元を覆い隠し目を細めながら臆する事無く部屋の奥へと向かった。
バキバキと音を立て、あちらこちらから壁や天井が崩れ落ちてくる。
リガルナは音のする方を目線だけで見やりながらも、奥にいる人を助ける事だけを頭に置いて歩を進めた。
長い廊下を抜け、突き当りの部屋を右へ。その更に奥にはキッチンらしき部屋があり、そこに人の足が覗き見える。
「だ、大丈夫ですか？！」
リガルナは咄嗟にその人に駆け寄ると、煙を吸い意識が朦朧としているその女性を抱え起こした。
「すぐ、外に連れて行きますから！」
そう言いながらリガルナが女性の体を横抱きに抱え上げようとすると、女性の視界に入ったリガルナの異形の姿に我に返り暴れ出す。
「い、い、いや！　いやぁぁぁぁぁっ！」
抱え起こされる事に猛烈な反発を繰り返し、体全体を使ってリガルナの手から逃れようとするその女性を、リガルナは必死に押さえて外に連れ出そうと試みる。しかし、女性は残された力を振り絞るかのようにその手を激しく払い除け全身を打ち震わせて恐怖におののいている。
「何で！　早く外に出ないと死んでしまうよ！」
「いや！　寄らないで！　あんたみたいな魔物に助けられても、その先にあるのは地獄だけよ！」
「…そんな。俺は何も…」
「いやぁぁぁぁぁっ！！」
伸ばした手を、女性は激しく叩きのけた。そしてリガルナにとって心の傷を深める一言を投げかける。
「あんたのような化け物に助けられるくらいなら、焼け死んだ方がマシだわ！」

「……」

リガルナはその一言で、女性に伸ばしていた手がゆるゆると下に下りた。

激しく怯えられ、魔物と罵られ、リガルナの心は首の皮一枚程度残し折れそうになっていた。

呆然とその場に立ち尽くしていたリガルナの傍の柱が大きく軋みを上げ、バキンッ！　と音を上げへし折れる。その瞬間、柱の折れた燃え盛る木片がリガルナに向かって飛んでくる。

第一章：愛情

「……っ！」

瞬間的に顔を背けたリガルナの右目の上を、その木片は激しくぶつかる。バチン！　と言う音を立てカラカラと地面に転がり落ちた木片は、その場で引き連れてきた炎に巻かれている。

それを見ていたリガルナの足元にビタタ…と音を立てて生暖かい液体が零れ落ち視界を濁らせた。

無意識に液体の流れ落ちる場所に手を当て、それを見つめると炎の赤さにも勝る大量の出血。木片が右目の上を打ち抜きパックリと大きな切り傷を作った。皮膚の薄い部分だけに容易に傷口が大きく開き、血管の集中している場所もあり出血量は通常の比にならない。

ここから出なければ…。

リガルナがそう思った瞬間、先程へし折れた柱がゆっくりとミシミシ音を立てて傾いてくる。

「い、いや、いやあああああああああっ！！」

悲痛な悲鳴を上げる目の前の女性の上に、傾いた燃え盛る柱が崩れ落ちた。

目の前で悲鳴をあげ火だるまになっている女性は、何度も暴れ回るが次第に動かなくなってしまった。

リガルナは助けようと手を差し出したがそれ以上動けなかった。

また別の場所でミシミシと軋む音が響いてくる。今度は家自体が傾き始めていた。

リガルナは額の傷を押さえると炎の間を掻い潜り、押し潰される前にこの家からの脱出を試みる。本当なら、このままこの家とともに崩れてもいい。そう思ってしまう節もあったが、本能的に危険から逃げなくてはならないと動いていた。

傾きかけた家の玄関からリガルナが飛び出ると同時に家は大きな轟音を立てて崩れ落ちる。

リガルナはその燃え盛る家を呆然とその場に立ち尽くし見つめていた。すると丁度そこへこの家の家人であろうと思われる夫婦が、数人の人間を引き連れてきた。
「そ、そんな…」
手には消化用の水の入ったバケツが握られていたが、崩壊してしまった我が家を見つめ愕然とした顔を浮かべている。
ふと、その夫婦が傍に立っているリガルナの姿を見つけると、手にした水の入ったバケツをひっくり返し怯えの色を濃くした。
「ひっ…！？」
引きつったような悲鳴を上げたその夫婦に、リガルナはゆっくりとそちらに視線を巡らした。
その姿は異様だった。額から溢れ出る多量の血。そして目の前で燃え盛る炎の赤さも手伝い、リガルナの髪と瞳の色を一層真っ赤な色味を帯びている。細く伸びた耳をも、その炎の赤さが照らし出していた。
「ま、ま、魔物！　魔物だっ！」
夫婦がそう声を上げると、その場にいた全員が悲鳴を上げた。
その悲鳴を合図にリガルナは我に返ると、悲痛に顔を歪め顔を覆い隠すようにしながらその場を走り去った。

溢れ出そうな涙を堪えながら、リガルナは家に舞い戻った。
自室の窓から垂らされた紐を伝い登るほどの体力は無い。むしろ出血量が酷く眩暈すら感じ力が入らないのだ。
何をされるか分からないが、リガルナは玄関のドアを開く。そしてその玄関先に酷い貧血を伴いぐしゃりと崩れ落ちた。
暗闇からゆっくりと現れたのは、こちらを鋭く睨み下ろすトーマスだった。
「……」
言葉も無く冷たく見下ろしているトーマスに気付いたリガルナは、

霞む意識の向こうで僅かな望みをかけ手を伸ばした。
「た…すけ…」
「フン、クズが。そこで死ね。その方が皆の為だ」
伸ばされた手を乱暴に蹴り付けて払い退けると、トーマスは傍に置いてあった手荷物を拾い上げリガルナの横をすり抜けて家を出て行こうとする。
「さっさとしろ！」
声を荒立てるトーマスに、青白い顔のフローラもまた手に荷物を握り締め暗がりから現れた。
「か…ぁ…さん…」
「……」
微かな声を上げるリガルナを見下ろしていたフローラは、ふっと顔を逸らすと今や逆らえないトーマスの後を追いかけ家を出て行った。
僅かな一縷の望みも断たれ、リガルナは差し出した手をパタリと落しその場で意識を失った。

第一章：愛情

リガルナが目を覚ましたのは、どれだけの時間が経ったか分からないほどの時間を有に要していた。

うっすらと開いた視界の先に、自分が良く知っている玄関マットが移りそれがおぼろげに数回かすんで見える。

「……」

数回瞬きを繰り返し、肘を立てて体を引き起こそうとした瞬間、頬と床をまるで糊のように貼り付けていた乾いた血のバリバリと剥げる音で思わず動きが止まってしまう。そして恐る恐る額に手を当てると血は止まっているものの痺れるような激痛が全身を走り抜けた。

「うっ…！」

リガルナは顔を顰め、きつく瞳を閉じた。流したくなくとも涙が目尻に滲み出てきてしまう。

ゆっくりと体を起こし立ち上がると眩暈がおき、フラフラとよろめいて近くの壁にもたれ掛かると再びズルズルと地面に崩れ落ち顔をうつ伏せる。

絶望的だ…。この家にはもう自分以外誰もいない。両親から見放され孤独に落ちた…。

リガルナは呆然と暗い部屋を見つめていたが、やがて肩を小刻みに揺らし嗚咽を漏らしながら涙を零した。

一体自分が何をしたというのだろう。見てくれが人のそれと違う、ただそれだけの事なのになぜ周りの人は自分の事を気味悪がるのだろう…。

本当はリガルナも知っている。自分の持つ赤と細長く尖った耳が魔物を象徴し、人々が古くから恐れている物だと言う事を。

実際人々は本物の魔物を見たことが無い。それでも古くから残る文献には魔物の姿を描いた物が沢山残されていた。遠い昔、魔物は

この世界にもはびこっていたのだと言う事を…。
しかし、そんな事は本当はどうでも良かった。今ここにいる自分を見てくれる、普通の人として扱ってくれる、そんな人が一人でもいいから居て欲しかった。
どれだけの時間その場で泣き崩れていただろう。突如として締められていた玄関のドアが荒々しく叩かれた。
「！」
その音にリガルナは体が飛び上がらんばかりに撥ね上がり、思わず声が出そうになりつつも喉の奥のほうへ押し込んだ。
ドアを叩くこの音は、とても友好的な叩き方ではない。何か敵意のような物を感じる…。
「おい、本当にここなのか？」
「間違いない。見ろ、この血の跡。あの家からずっと続いて来ているじゃないか」
「っち。と言う事は居留守してやがるのか？」
ハッキリと男二人の声が扉一枚隔てた向こう側で聞こえてくる。
リガルナはハッとした。額に受けた傷の血を止める間もなくここまで必死になって逃げてきた。その間も血が止まる事無く垂れたままで、自分の動いた道を残してきたのだ。
「おい、開けろ！　あの魔物の小僧をかくまってるのは分かってるんだぞ！」
「大人しくあの小僧をこちらに引き渡せ！　そうでなければ魔物を庇った罪でこの家ごと焼き払うぞっ！」
「女王陛下にはもう既に許可を頂いているんだ！　魔物を駆除せよとのお達しもある！　痛い目に遭いたくなければ早くここをあけて小僧を出せ！」
ゾクリとした。まさかそんな事が…。
しかし外にいる男達の声はとても冗談を言っているような感じではなかった。ここでじっと佇んでいる限り、彼らは本当にこの家に火を放つだろう。

女王陛下からの命でもある魔物の駆除…。それは自分の死を意味している事は分かる。
ここにいてはいけない。ここに居ては、どの道殺される事になってしまう。そう思ったリガルナはその場から立ち上がったが、血が足りず貧血状態になってまともに歩けずその場にグシャリと崩れ落ちた。その瞬間にガタンと近くの椅子に体をぶつけてしまう。
「おい。音がしたぞ」
「やっぱり隠れてやがったのかっ！　おい！　開けろっ！！」
ドアを叩く音が更に激しさを増し、そのままドアが壊れてしまうのではないかと思うほどだ。しかし、リガルナはそんな事に気を巡らせている場合ではなかった。床にへばりつき、それでも何とか上の階を目指し行動を起こす。
まだ死にたくは無い…。こんな風に絶望的な死に方は、したくない…。
無我夢中で階段に手をかけて這い登り、大きく肩で息を吐いた。
「おい。炙り出したほうが早い。火を放とうぜ」
「そうだな。意地でも出てこないのならそれしかないだろう」
階段の中腹まで這い登った辺りで、そんな言葉が聞こえてきた。ふとドアに視線を巡らせると、ドアの上部にあるガラス部分に赤々と照る、それが明らかな炎だと言う事を示す揺れが見えた。
リガルナはぐっと歯を食い縛ると半ば意地で立ち上がり階段を上まで上り詰めた。
パチ…。
何かの爆ぜる音が聞こえてくる。リガルナは息を呑んだ。
間違いなく、今この家に火を放たれたのだ、と。そう思った瞬間思い出すことがあった。自室の窓から垂れ下げていたシーツの紐。もしもあれに引火する事があれば逃げ場は完全になくなってしまう。
リガルナは自室の扉を開き窓の方へ顔を向けると、開けっ放しにしてあった窓はピッタリと閉じられ。垂れ下げていたシーツの紐は乱雑に部屋の中に転がっている。

何故…？

そう思った矢先、自分が家を脱走した事をトーマスかフローラが気付き全て引き込んだのではないかと思った。

固く閉じられている窓は、外から戻ってきた自分を家に入れる事を拒んでいた事を意味している。リガルナが戻った時玄関が開いていたのは偶然で、二人はリガルナがいない間に家を出ようとしていたのではないか。すべて計算済みだったのではないかと…　。

そう思うと辻褄があった。辻褄が合った途端、リガルナは更なる絶望の中に落ちた。

第一章：愛情

もういっそ、このままこの家諸共死んでしまった方がこれ以上の悲しみも、絶望もなく全てから解き放たれるのかもしれない。

リガルナはこの瞬間そう思った。だが、パチパチと音を立て登り来る火の手と煙がリガルナを死への恐怖を掻き立ててくる。

一度ぐっと拳を握り締めると、リガルナは俯かせていた顔を上げた。

そしてぐらつく体に鞭を入れ自室の窓へと飛びつく。固く施錠された窓を無理やりこじ開け、そこから辺りを見回した。

外は、夜。リガルナが家へ戻ってきてからほぼ丸一日玄関先に倒れていたのだとこの時分かった。

下を覗き込んでみたがたまたまなのか誰もそこにはいない事を確認すると、急いでシーツの紐を抱えて窓から垂らしそこを伝い下りた。

「あっ！」

リガルナが地面に下りるか下りないか、その瞬間に玄関先にいたはずの男のうちの一人が彼の存在に気付き声を上げた。

「いたぞ！　窓から逃げ出しやがった！」

そしてもう一人の男に声をかけると、その男も路地の角から飛び出してきた。

「待てっ！　小僧っ！」

リガルナは今にも倒れそうになりながらも、必死に自分の体を突き動かし懸命にその場から走り逃げ出す。

走りながらチラリと背後を振り返れば、男達の身形は一般の市民達のものではなかった。レグリアナ宮殿に仕える兵士とそして魔術師…。その魔術師の方の男が手を体の前に組み呪文の詠唱をしていた。みるみる内にその手の内には炎の渦が起こりボッと一際大きく燃え上がる。

ゆらりと揺れるその炎を浮かべた手を前に突き出し、詠唱と続ける顔の前で立てていた2本指をスッと横にスライドさせると、魔術師の前に掲げられていた炎が自らの意思を持っているかのように一度大きくうねり、刃のような鋭さを持ちながら勢いよくリガルナに襲い掛かってくる。

「！」

リガルナはその炎の刃に打ち抜かれまいと必死に走り逃げる。

ヒョウヒョウと音を上げ執拗にリガルナの後を付いて回る炎の刃に、リガルナは何度もやられそうになった。

どこをどう逃げたかなど覚えてもいない。ただ必死に思いつく限りのルートで走り逃げると、突如目の前を覆う大きな草が出現する。リガルナは咄嗟に顔の前で両手をクロスさせ勢いよくその中に飛び込んだ。

バサッ！　と派手な音を上げ地面の上を転がり込む。そしてすぐさま顔を上げるが炎の刃は消え去っていた。

「……た、助かっ…」

満足な食事を摂らず多量の出血の後で血が足らない中、全速力で逃げたリガルナはその場で再び意識を失った。

暗い。目の前は何もなくただ心に積もるのは空虚と孤独の寂しさだけ…。人から満たされる愛情と言う名の暖かな光は、もう自分の傍にはない。この手の中には、ない…。

「……」

自分は生きている意味などあるのか…。

「……し」

何の為に生まれてきたのだろう…。

「……し？」

何の為に、こんなに必死に生きようとしているのだろう…。

「…もし？」

失った意識の先で、自問自答を繰り返していたリガルナは突如全く別次元の場所から聞こえた声に目を覚ました。
薄っすらと開いた視線はぼやけ、ただ目の前にあるのは夜の闇とそこにある明るく丸いものの存在だけを認識できた。
「あ」
短い声がかかり、次第にハッキリしてくる視界の中に見慣れない少女の姿が映りこんだ。
「大丈夫ですか？　酷い怪我…」
戸惑っているかのようなその表情にハッとなったリガルナは、大きく目を見開いた。
今自分はどこにいて、どんな状況に置かれているのか。それを認識すべく辺りを見回そうとし、体を起こそうとするが思うように動かない。
「まだ動かない方がいいですわ」
「……君は…？」
「私はマリアと申します。少し散歩に来たらあなたが倒れていたので…。あの、大丈夫ですか？」

第一章：愛情

マリアと名乗った少女は心配そうに顔を覗き込み、手にしていた柔らかな布でリガルナの顔の汚れを拭い去っている。
優しく手当てするその感覚が、リガルナには酷く懐かしくて遠い。無意識にもその目には涙が伝い落ちていた。
「ご、ごめんなさい。痛かったでしょうか？」
「……ううん…。違う…」
開いていた瞼を閉じ少しでも長くこの感触を感じていたい。リガルナはそう思っていた。
しかし、次の瞬間ハッとなり目を見開いて勢いよく体を起き上がらせると、ぐらつく頭を抱え地面に手を付いて俯いた。
「そんな急に動いたら…」
「…君は…。俺が怖くないの…？」
顔を押さえ俯いたまま、マリアの顔を見る事もなく呟くようにそう言うと、マリアはキョトンとした顔を浮かべてリガルナを見つめた。その視線はまるでリガルナの言う意味が分からないと、そう言っているようだ。
「怖い？　なぜ？」
「え…」
思いがけないその言葉に、リガルナは驚いた表情でこの時初めてマリアを見た。
月明かりの下に煌く絹のようにしなやかな金髪。こちらを覗きこむように見つめ返してくる青い瞳は純粋で、何の穢れも知らなさそうだった。ほっそりとした面持ちで小首を傾げる彼女の姿は、思わず言葉を飲み込むほどに綺麗だった。
「だって…、俺…」
「綺麗な赤い髪ですね。まるで夕日のようですわ」
本心でそんな事を言っているのだろうか。

マリアはにこやかに微笑みながら、周りの人間達が毛嫌いする自分の欠点を褒めた事がリガルナには信じられなかった。それと同時に、求めていた物がここにあった。そう思う気持ちが湧き上がってくるのは否めない。

まだマリアの言葉が半信半疑に感じられるリガルナは視線を逸らし、力なく呟く。

「そんな事…言われたのは初めてだ…」

「え？」

「マリア。君だって知ってるだろう？　細長い耳と赤が指す意味を…」

困惑と、どこか泣き出しそうな表情を浮かべてリガルナがもう一度マリアを振り返ると、マリアは柔らかな笑みを浮かべたままゆっくりと頷いた。

「知っています。それらは魔を指すのですよね」

「じゃあ…」

「でも、私はそうは思いません。だって、赤は暖かいでしょう？炎の色もそう。暖炉の中で燃える炎は赤だわ。松明やランプの中で燃える炎だって赤。よく晴れた日の夕日もとても綺麗な赤色をしている…。今では緑や青い炎が良く使われているけれど、炎の色は赤であってこそだと私は思うんです。でも、多くの人は赤を気味悪がったりする。それでも私には暖かくて優しい色だと思えるんです」

「……」

その言葉に、嘘も偽りもないように思えた。いや、そう思いたかった。長い間、今この瞬間に至るまで散々酷い目に遭って来たリガルナには、マリアの存在が自分の存在を唯一認めてくれる求めていた人だったからだ。

「あの…」

リガルナがマリアにそう言い掛けた時、リガルナの腹がキュウッ…と鳴いた。思わず言葉を飲み込んだリガルナは昨日から何も口にしていない事を思い出した。

マリアはくすくすと笑い、ゆっくりとその場に立ち上がる。
「お腹が空いているんですね。今何か持ってきますわ」
「え…」
「でも、内緒ですよ。ここで待ってて下さい」
ニコリと微笑みマリアはパタパタとその場から小走り気味に走り去った。
残されたリガルナは、立ち去って行ったマリアをしばらく見つめていたが、一度小さく溜息を吐くと改めて辺りを見回す。
目前には広大な草原が広がり、数メートル先には小さな泉が湧いている。その向こうに夜の闇よりも黒い横一列の何かが見えるが、おそらくはレグリアナ国を守る為の防壁か何かに違いない。
ぐるりと視線を右へずらすと、だいぶ離れた場所に建物が見えた。周りが暗くそれが何の建物であるのかは分からなかったが、リガルナは民家の一つだと思った。
更に視線を横へずらすと茂みの向こうに壁が見える。それは高く上へと伸び、追いかけるようにリガルナの視線は上を向いた。そしてそこでハッとなる。
ここは、まさかレグリアナ宮殿…？
リガルナの表情は愕然としたまま凍りついた。

第一章：愛情

その現実に気が付いたリガルナは迂闊にこの場から動く事もできず、どうしてよいか分からないまま茂みの影に身を潜め、息を潜めた。

知らず知らずの内にこんな場所に逃げ込んでいたなど、気付きもしなかった。一体、自分はどうやってここへ入ってきたのだろう…。

リガルナは背後を振り返り、自分が飛び込んだ場所の茂みをそっと掻き分けてみた。

そこには、今でこそ警備の人間が一人こちらに背を向けて立っているが、宮殿へ入る事の出来る入り口があった。

無我夢中で走りこんできた時、たまたま運良くその場に警備に当たっている人間が他を見て回っていた為に、リガルナはここへ入ることが出来たのだ。

しかし、命からがらここへ逃げ込んでみたものの、実際は更なる恐怖のどん底に自ら飛び込んでいた。

リガルナは言葉も無くその場で思い悩んでいると、マリアが食事の乗った皿を手に戻ってきた。

「…どうしたのですか？」

ピクリとも動かないリガルナの背に、マリアは恐る恐る声をかけてみた。そのマリアの声に飛び上がらんばかりの勢いで体を撥ね上げると、リガルナはパッとマリアを振り返る。

「？」

青ざめた顔でこちらを振り返ったリガルナを、マリアは不思議そうに小首を傾げ見つめ返した。

「あの、これ…。お夕飯の残り物になってしまうんですけれど、料理長に無理を言って貰ってきました。良かったら食べて下さい」

マリアは手にした皿をリガルナの前に差し出す。

皿の上には、リガルナがまず食べた事もないような食べ物がいく

つか並んでいる。
一口大のサンドイッチが4つ、ローストチキンが2枚、キャロットグラッセが数個に、チーズとスモークサーモンが乗せられたカナッペが3つ…。
食べ盛りのリガルナには決して足りるとは言えない量だったが、空腹のリガルナにしてみればまさに喉から手が出るほどに欲しいもの。しかし、リガルナがそれに手を伸ばす事はしなかった。
心配したマリアが困惑したような表情でリガルナを見つめ返すと、リガルナはその視線から逃れるように顔を背ける。
「どうしたんですか…？」
「……」
リガルナはぐっと拳を握り締めると、一度大きく息を吸い込んで意を決したようにマリアを見た。
「マリア…もしかして君は、レグリアナ宮殿の人間なんじゃ…」
リガルナのその言葉に、マリアは2、3度瞬きを繰り返すとニコリと微笑んだ。そして包み隠す事もなく一度頷いた。
「はい」
「…それじゃ、僕に対してこんな事したら…」
「何も心配いりませんわ。目の前で困っている人がいたら、助けるのは当然でしょう？　違うかしら」
「…そんな事…」
マリアはずいっとリガルナの前に皿を突き出すと、ニコリと微笑みかける。
「食べて下さい。そうじゃないと、私の行動が怪しまれてしまいますわ」
「……」
リガルナはあまりの空腹に、目の前の食べ物の誘惑に勝てず手を伸ばした。
みっともないとは分かっていても、一度食べ物を頬張ると食欲に火がつき、ついガッついてしまう。驚くほど素早く、差し出された

皿は何もなくなってしまった。
　その食べっぷりに目を丸くしたマリアは、少々困惑したような顔を浮かべる。
「た、足りなかったですね。男の方がどれくらい食べるのか分からなくて…。もう少し頂いてきた方が…」
「……ううん。ありがとう」
　リガルナは少しでも胃の中に食べ物が入った事で、多少の気の緩みが出来たのか久し振りにその顔に小さく笑みを浮かべた。
　その表情にマリアの胸がドキリと小さく反応を示した。
「マーナリア様ー？　どちらにおいでですか？」
　ふとその時、マリアを呼ぶ別の声が聞こえてくる。マリアはハッとなると手にした皿を自分の胸に抱きそちらを振り返る。
「は、はい！　今そちらに行きますわ！」
　声をあげ一言そう言うと、再びリガルナを振り返る。
「あの、名前を…」
「え？」
　突然の事に、今度はリガルナの方が目を丸くした。
「せっかくこうして逢う事が出来たのも何かの縁ですもの」
「……」
　リガルナは躊躇ったが、ここまでしてくれたマリアに対し名前も名乗らないのはあまりに失礼だと思ったリガルナは、呟くように名乗った。
「…リ、リガルナ…」
　マリアは名前を聞くと満足そうに微笑みを浮かべる。
「リガルナ。あなたがこれからどうやってここを切り抜けられるか考えてみます。だからそれまでここにいて動き回らない方が良いですわ。私、もう行かなくてはいけませんけど、また来ますから」
「…あ、ありが…とう」
　マリアはそう言い置くとさっとその場から離れ、名を呼ぶ人物のもとへ小走りに戻っていった。

残されたリガルナは再び茂みに身を潜め膝を抱えると、目の前に広がる広大な土地と泉に浮かぶ煌く月を眺めた。

第一章：愛情

「マリア。どこへ行っておったのだ」
宮殿へ戻ってきたマリアを、母エレニアは目を細め咎めるかのような眼差しをマリアに向けた。
マリアは手にしていた皿を後ろ手に隠しながら、ぎこちなく嘘の言い訳をする。
「きょ、今日は月がとても綺麗ですし、お夕食が少し足らなくて泉の傍で軽食を頂いていました」
「……ほう。珍しい。小食のお前が夕食が足らなかったと？」
「え…えぇ…」
苦し紛れの言い訳と知りながら、マリアがそう言うとエレニアはその嘘を見破っているかのような見透かした眼差しを向けるも、それ以上の追求をする事はなかった。
「まぁ良い。しかしこう夜遅い時間に出歩くのはいくら宮殿内の敷地とはいえ危ない。軽食ならば部屋で摂ればいいのだから、あまり外へ出歩くでないぞ」
「…は、はい。ごめんなさい」
申し訳なさそうにそう呟いたマリアを、エレニアはふっと目尻を緩め優しく微笑みマリアの頭を撫でる。
「もう今日はゆっくり休め。明日は皆に報告する事がある。お前も同席するようにな」
「はい。お休みなさい。お母様」
マリアはその後自室へ戻ると、ベッドに潜り込み外に一人暖かな布団も無い中で寒い夜を過ごすリガルナの事を気にしながら一夜を過ごした…。
翌朝。エレニアと共に謁見の間で同席していたマリアは、目の前に跪く男を見つめていた。
薄い紫色の綺麗な短い髪を垂らし、頭を垂れている男を見やりな

がらエレニアは後方の椅子に座っているマリアに声をかけた。
「マリア。この者は先日家を焼かれ家族を失った者だ」
「……」
マリアはその言葉を耳に受けながら、視線はじっと男を見つめていた。
家を焼かれた…。その報告はマリアも聞いて知っていた。何者かによって2日前真夜中に南地区の家の一軒から火の手が上がり放火されたと。その家事で一人の人間が焼死体で見つかり、近隣数棟の壁などを焼き被害が大きかったという。
その後の証言で消火にあたったその家人である夫婦と消火を手伝った人間達が口を揃え、その放火は赤い髪と目、そして細い耳をした魔物の存在である。そう言っている事が分かった。
（…リガルナ…）
そのどれもがリガルナの特徴そのまま。皆が口をそろえる魔物は、間違いなくリガルナの事だ。
「面を上げよ」
エレニアがそう声をかけると、頭を垂れていた目の前の男がゆっくりとその顔を上げた。
その表情に、マリアは思わず息を呑んだ。憎悪に満ちた何者も突き刺しそうな鋭い眼光…。握り締められた拳はワナワナと振るえ、相当な怒りを胸に秘めているのだと言う事が分かる。
「名を申せ」
「…セトンヌと申します」
「セトンヌ。今日はどんな用件で来たのだ？」
「私の家族を殺した者の仇を討つためです」
間髪を入れずそう切り出したセトンヌの言葉に、エレニアは眉の片方を引き上げ興味深そうにセトンヌを見た。
「ほう…仇とな。それは魔物の事か？」
「はい。先日、父も母もショックのあまり他界しました。それもこれも、あの日火事を引き起こしたあの魔物の仕業だと思っています」

エレニアはくっと笑い、口の端を引上げる。そしてしばし沈黙を守り、ふと傍に立っているグルータスに目を向けた。
「グルータス。どうだ？　私としてはこの者を軍に招いてみようと思うのだが…」
その突然の言葉に、グルータスは面食らったような顔を浮かべエレニアを見る。
「何と、エレニア様。何の基礎も身についていない一般市民のこの者を軍に招くなど…正気でございますか？」
「無論正気だ。見よ、この者の目を。闘志が剥き出しで、何とも荒削りなまでの感情。しかしこの者はおそらく、我が国の軍にはなくてはならない男になる」
「し、しかし、エレニア様…」
「…跡目が欲しいと嘆いておったのは、そなたであろう？」
大臣でありながら軍を総指揮しているグルータスは、自分の年を考えそろそろ跡継ぎになる人間を探していた。その跡継ぎに、目の前のド素人である一般人を宛がうなどと、グルータスは気が気ではなかった。
「そ、それはそうでございますが…」
「良いではないか。この者はきっと良い働きをするはずだ。のう？　マリアよ」
「……」
話を振られたマリアは、セトンヌを見つめていた瞼を静かに閉じるとしばし押し黙った。だが、少しすると再び目を開き、その視線はエレニアに向けられた。
「…はい。お母様。この方はこの国の軍事の最高クラスまで上り詰めるでしょう」

第一章：愛情

マリアのその言葉に、ニッと口の端を引上げて笑うエレニアはグルータスを見やった。
グルータスはマリアのその言葉に、小難しい顔を浮かべながら小さく唸った。
「うぬぬ…。マーナリア様がそう仰るのであれば、真そうなのでありましょうな」
「どの道、この国では無駄な殺生は禁じておる。魔物とは言え相手は人のそれと同じ姿をしていると言うではないか。一般人がそれを殺したとあっては重罪として同じ痛みを持って処罰される。だが、軍に入ればそれは罪には問わぬ。存分に仇打ちが出来るのだ」
エレニアはグルータスからセトンヌへ視線を戻すと、口の端を引上げて一度大きく頷いた。
「良かろう。セトンヌよ。今日からそなたはこの国の軍の一兵士として努めるが良い。そしてゆくゆくはこのグルータスの跡目を継ぐよう大いに励め」
エレニアの言葉に、セトンヌは深々と頭を下げた。
「ありがたき幸せにございます。このセトンヌ、必ずやエレニア様のご期待に応えて見せます」
その時だった。謁見の間の入り口がざわめき出し、一人の兵士が慌てふためいて駆け込んできた。
「どうしたのだ！　今は謁見中であるぞ！」
エレニアが激怒を飛ばすと、兵士はビクリと体を震わせるもその場に姿勢を正し敬礼をした。
「ま、真に申し訳ございません！　実は宮殿の敷地内で不審人物を捕らえましたものですから…！」
「では、その者はひとまず牢へでもぶちこんでおけ。あとで私が直々に会う」

「いえ、それが、その者がどうやら先日の火事に関係する魔物なのです」
兵士のその言葉に、その場にいた全員の空気が凍りついた。特にマリアはその場に立ち上がり、青ざめた顔で固まった。
「そうか。そやつは今どこにおる？」
「はっ。現在宮殿の門の傍に捕らえております」
「分かった。では参ろう」
エレニアはその場からスクッと立ち上がると、愕然とした表情をしているマリアと、そして険しい表情を浮かべているセトンヌ、グルータスを引きつれ兵と共にその場所まで足を向けた。
エレニア達が門の前に来ると、二人の兵士に腕を掴まれ頭を押さえつけられてその場に膝を着かされているリガルナの姿があった。
マリアは思わず口元に手を当て悲しそうな表情を浮かべる。
「ほう、この小僧があの魔物か…」
エレニアはリガルナの前まで歩み寄ると、下げている顔の顎に手にしていた扇を宛がうと無理やりその顔を上へ向かせる。
強制的に顔を晒す羽目になったリガルナは困惑と恐怖に顔を歪めている。
「なるほど。まさに魔物のそれを全て兼ね備えているのだな。しかし、よくもこの宮殿にのこのことやってこれたものだ」
「……」
リガルナは言葉を発する事もなくエレニアを見上げる形にされていたが、その視線だけを動かすと視界の端にマリアを捕らえた。
悲壮な顔を浮かべているマリアを見、リガルナは打ちのめされたような思いと怒りが湧き上がってくる。
優しい言葉は全て嘘。こんな見せしめをさせる為にワザと優しく近づいて、自分がここにいる事を漏らしたに違いない…。
人を信用できなくなっていたリガルナには、当然こんな感情が湧き上がってくる。目の前で哀れみの眼を向けるその眼差しも、笑いものにしたいが為にこう仕向けたんだろう…。

リガルナはギッと歯を食い縛ると顎下に添えられた扇を顔で乱暴に払い除け、後ろ手に組み締め上げられている腕をもろともせずにマリアに向かい食って掛かった。
「騙したなっ！！」
マリアに向かって投げつけられたその言葉で、皆の視線がマリアに集中する。
「騙した？　どう言う事だ…？」
エレニアが不可解な表情をしてマリアを見つめると、マリアは首を激しく横に振った。
「だ、騙してなどいませんっ！」
「嘘だっ！　本当は俺をこうやって拘束する事が目的で近づいたんだろうっ！」
「違う！　違うわっ！　私、そんな事…」
「どう言う事だ？　説明せよ」
エレニアの表情が険しくなる。マリアはそんなエレニアに向かって懇願するかのように顔を上げる。

第一章：愛情

「お母様！　彼は、リガルナは魔物でも何でもありません！　今回のこの事件に関しても一切無関係なのです！」
「私は説明せよと申しておるのだ」
きつく視線を投げかけるエレニアに、マリアはただ首を横に振るばかりだった。
「お母様！　信じて下さい！　神もまた、彼が無実である事を仰っておいでですっ！」
「君はそうやって俺の味方ぶっているけど、本当は違うんだろ。俺に餌を与えて油断したところを捕縛する、それが目的だったんだろっ！！　そうならそうだって言えよっ！」
「リガルナ！　それは誤解よ！　誤解だわ！　あなたがお腹を空かせていたから、だから私、あなたに食べ物を与えたの。それに、あの時言った事も…」
「哀れみだったら最初からいらないっ！　これが目的なら、最初から俺を捕らえて殺せばいいんだっ！！」
「リガルナ…」
いきり立ち、マリアを睨みつけながら声を荒げてそう叫んだリガルナはゆるゆると体の力を抜くと、顔を伏せポタポタと涙を流し始めた。地面には涙の染みが点々と落ち模様を描き出している。
「少しでも気を許してしまった俺が馬鹿だったんだ…。全部、全部嘘だったんだろ…そう言えよ…」
一連の流れを目視していたエレニアは、ようやく二人の接点を見つけ出すとクッとその顔に笑みを浮かべる。そして自分の意思とは違う方向へ転がっていく目の前の現実に愕然としたマリアをみやると、エレニアはその肩に手を置いた。
「そうか…。良くやったな、マリア。…計画通りだ」
「！」

「お母様…！」
その言葉にさらに驚愕したマリアはエレニアを見上げた。エレニアの顔はほくそえんだままリガルナを見やっている。
「この者を捕らえよ。翌朝には亡くなった人間と同じ苦しみを以って、火あぶりの処刑とする」
兵士に連行されようとするリガルナを、マリアはリガルナの前に躍り出てそれを体を張って止めた。
「お母様！　待って下さい！　彼は本当に何も…」
「もう演じる必要などないぞ。全ては計画通りなのだからな」
冷たくそう言い放つエレニアに、マリアは必死に食い下がり激しく首を左右に振った。
「違う！　違う違う！　お母様！　万物の神が彼の無実を訴えておいでなのですよ！　なのに、そのお言葉を無視するおつもりなのですかっ！」
必死になってリガルナを庇おうとするマリアの目には、いつしか悔しさからくる涙が流れ落ちていた。
どんな誤解をされても、自分がこの国の王女である以上それはどう弁解しても理解してもらうのに相当な時間を要してしまう。ならば、今はもうそこにこだわっていられない。せめて、リガルナの命だけは救わなければ…。そう思ったマリアは体を張ってでもこの場からリガルナを逃がす事を優先した。
「……マリア。そなた本気でそんな事を申しておるのか？　この罪人を目の前にして…」
「彼は罪人ではありません！　お願いお母様！　彼を、彼をこのまま逃がしてあげて下さい！」
予想もしなかったマリアのその言葉に、その場にいた全員が言葉をなくした。
魔物であるリガルナを、処刑する事もなくこのまま野に放てと、いくらマリアの訴えであってもそんな言い分がまさか通るはずも無い。そう確信していた一同はエレニアに視線を向けた。

エレニアは眉間に皺を寄せ、長い沈黙を守ると静かに口を開く。
「この者を野に放てば、これ以上の災厄が降りかかる事になるやもしれん。それを分かって申しておるのか」
その問いかけに、マリアはぐっと唇を噛み締め一度大きく頷いた。
「彼は何もしません。私は、そう信じます」
一寸の迷いもなくそう言いきったマリアの言葉に、エレニアは苦々しい顔を浮かべつつもリガルナを捕らえている兵士達を見やった。
「その者を離せ」
「なっ！？」
「エレニア様！？」
思いがけないその言葉に、グルータスもセトンヌも、そして兵士達も皆愕然とした表情を浮かべエレニアを見た。
「ほ、本気でそう仰っておられるのですか？！　今この者を解き放てば更なる災厄が…」
「…構わぬ。所詮この国は女王たる私の言葉など無に等しい。全ての言葉の権限は巫女であるマリアの発言にある」
「そんな、しかしそれでは…」
エレニアは憮然とした表情を浮かべたまま、冷たくリガルナを見下ろし吐き捨てるように呟いた。
「命拾いしたな。赤き魔物よ。今回殺されずに済んだのはマリアのおかげだ。せいぜい感謝するがいい」
そう投げかけたエレニアの言葉が終わるが早いか、エレニアの脇をすり抜けリガルナの胸倉を掴み上げると勢い良く頬を殴りつけたセトンヌの姿があった。
「人を殺したお前が、なぜ命拾いをする！？　このまま死ねばいいものをっ！」
「セトンヌ！」
マリアが止めるのも聞かず、セトンヌは首を締め上げるかのようにきつくリガルナの胸倉を締め上げ、凄まじい形相でリガルナを睨み付けた。

「言っておくが、俺はお前が死に絶えるまでお前を恨み命を狙う。地の果てまでも追い詰めて、その息の根をこの俺が止めてやるからな！」

口の端からポタポタと血を流しながら、真っ向から投げかけられる言葉の数々。それらはリガルナの心を冷たく凝固させる最後の言葉だった。

もう誰も、いや、最初から味方なんていなかった。一縷の望みなど求めるだけ無駄だった。この目に届くはずも無い希望と言う名の光など、最初から自分に差してなどいなかった…。見えないのにただそれだけを求めて抗っていた自分が馬鹿らしい…。

「やめよ、セトンヌ。今のそなたには何も出来まい。早くこやつを国の外に捨て置けっ！」

エレニアがそう声を荒げると、兵士たちはリガルナを連れレグリアナ王国から追い出した。

乱暴に放り捨てるようにしてリガルナの体を門の外に投げると、リガルナは砂煙を巻き上げながら地面に転がった。

「さっさと消えろ。小僧。もう二度と戻ってくるんじゃねぇぜ」

「……」

小馬鹿にされたかのようなその言葉を受けて、リガルナは兵士とレグリアナ王国に背を向け歩き出した。

絶対的な復讐をその胸に誓って…。

第二章：安息

日が高く上り、チチチ…と小鳥が数羽楽しげに青空の下を旋回しながら翼をはためかせ地上に降りてくる。
バサバサと羽毛を散らしながら羽を大きく羽ばたかせて止まったのは、音も無く差し出された人の指の上。そして肩と木にもたれ掛かるようにして座っている膝の上。
口には木の実を咥え、それをポトリと地面に落とした。
ひょいとそれを拾い上げると、まるで分かっているかのように鳥がチチチ、と鳴いた。
「……」
リガルナは無表情ながら、その表情はどこか穏やかで自分の体の上を跳ねるように移動する鳥たちに視線を注いでいる。
太陽の日の下で光を受けて地面に無造作に流された真っ赤な髪は艶やかに光っている。
リガルナは、昨日また一つ村を消してきた。
村はとても長閑で村民達は自給自足を行いながらも幸せに暮らしている、そんな村だった。
夜の帳が下りてからは起きている人間などほとんどなく、虫の声と時折吹く風の音が村を包み込み静寂を守っている。
その光景をリガルナは暗い夜空の上から冷たく見下ろしていた。これからこの村が一瞬にして消失する事など知るはずもない村民達の平和な寝息。それを想像するだけでもリガルナにとって見れば憎しいとしか言いようが無い。
ズキリと痛む頭痛に顔を顰めながらも、リガルナは風を呼んだ。
静かだった風が大きくうねりを上げ、リガルナの翳した手の前で大きな塊となる。
「……散れ」
リガルナの言葉を皮切りに、大きな塊となって力を溜めていた風

は爆発する。
ドォン！　と言う凄まじい音を上げ、弾け飛んだ風はかまいたちのような鋭さを持ったまま村に襲い掛かる。
バキバキバキッ！　と家々の壁や屋根を削ぎ取り、突然の事に身動きの取れない村民や外に逃げ出した村民達を容赦なく切り捨てていく。
メキメキと音と共に家は地面から引き剥がされ、粉々に散りながら人々の悲鳴と共に空高く様々なものを巻き上げた。
これは、ほんの一瞬の事。気付けばもうそこには家や人間達すらも一掃され、跡形もなくなっていた。
「……」
リガルナは満足そうにほくそえむ。その直後、強い頭痛に頭を抱えた。
「……っく…」
顔を顰めたまま、振り切るように月の無い天を仰ぐとフッと暗闇の中に消えた…。
日中は大抵棲家としている死山と呼ばれる山の中腹にある洞窟の周りでこうしてぼんやりと過ごす事が多いリガルナは、このところ頻繁に起こる頭痛に疑問を抱いていた。
フイッと自分の手を頭に当てる。
こんな事など、今まで一度も無かった。一体いつからこんな風に頭痛を感じるようになったのだろう…。それも村や町を一つ消そうとする直前と直後にいつも起こる。
今は特別何も感じない。ただ、リガルナが人を殺めようとする時にだけ起こるものだった。
「……」
リガルナはしばらく考えてみたが、思い当たる節がある訳でもなく、結局は考えても無駄だと分かるとそこで気持ちを切り替えた。
ゆっくりと立ち上がると、リガルナの体に止まり羽を休めていた鳥達が一斉に空に舞い上がった。

バタバタと言う羽音を聞きながらそれを見送るリガルナは、踵を返しその場から立ち去った。

第二章：安息

リガルナの住む死山の麓に、一軒の民家があった。
人里からかなり離れた場所に存在するその民家には一組の夫婦と娘が住んでいる。
「あたしは買出しに行ってくるからね。部屋の掃除と、夕飯の支度、それから薪を割っておくんだよっ！」
荒々しく声をあげ、その家から一人の初老の女が扉を開き部屋の中にいる人間にそう声をかけた。その声に箒を握り締めて近づいてきた齢１５歳ほどの少女が虚ろな眼差しのまま小さく返事を返す。
「…はい…。あの、おばさん…すぐに帰ってきますか？」
小さな声でそう呟くように言った少女の言葉は女の耳に届かない。
「はぁ？　何言ってるのかサッパリ分からないよ！　ったく、お前はほんとにダメな娘だね！　言いたい事があるならハッキリお言い！？」
「……い、いえ…」
女のあまりの気迫に、少女は何も言えず怯えた様子で首を横に振った。
女はフン、と鼻を鳴らすと目の前の少女を憎憎しげに睨み下ろすと、これまで何度と無く吐いた言葉を再び零した。
「全く、なんでこんな軟弱でしかも目の見えない小娘をうちが引き取らなきゃならないんだろうねっ！　姉さんがいたら文句の一つでも言いたいところだよ！！」
そう言い放つと勢い良く扉を閉め、女は家を後にした。
ドアの前で箒を握り締めたまま床に視線を落とし、下唇を噛み締めていた少女は込み上げる涙を必死に堪えていた。
「おぉい、アレア。さっさと掃除を済ませてくれないか」
肩を落とし、細い体を小刻みに震わせながらドアの前に立っていたアレアに、背後から気だるそうな野太い声が掛かる。

アレアはビクリと体を動かすと、そちらを振り返る。
アレアの目には何も映らないが、こちらを睨むように見ている叔父の姿が良く分かった。
睨むだけでなく絡み付くようなネットリとした視線。気配だけで分かるが、頭の先から足の先までくまなく見られている、そう感じさせる嫌な視線だった。
「あちこち埃が溜まってるんだ。さっさと終わらせてくれよ」
恰幅がよく、昼間だと言うのにテーブルの上には酒瓶が何本も転がり、それだけでは足らずテーブルの足元にも数本ワインの瓶を転がしている叔父は、体全体が赤く染まるほどに完全に泥酔していた。
「……は、はい。すぐに…」
「さっさとしろっ！　小娘がっ！」
返事を返した声を遮るように、叔父の言葉が投げかけられる。ドンッ！　と強くテーブルを叩き付けると、酒のつまみにと皿に置かれていたオリーブが撥ね上がり、コロコロとテーブルを転がって床の上に零れ落ちる。
アレアは体をビクッと強張らせると、手にした箒を握り締め掃除に取り掛かった。
手探りに部屋の隅を探し当て、そこから箒で床に散らばったゴミを掃きだす。壁を辿りながら埃を一通り掃きだすと、キッチンの方へと足を踏み出す。
アレアが掃除をしている間も、叔父はキッチンのテーブル前にどっかりと腰を据えたまま酒の瓶を煽っていた。
カツン、と音を立てアレアの伸ばした手がテーブルの上の酒瓶にぶつかると、まるでドミノ倒しのように次々と倒れ、床の上に無数に瓶の割れる音が響き渡った。
「おい！　何してやがるんだ！」
いきり立ったようにそう声を荒らげながら、椅子を蹴倒し立ち上がる叔父を、完全にアレアは恐怖の眼差しで振り返った。
伸ばされた腕がアレアの手首を掴むと、問答無用で引き寄せられ

る。
「い、嫌っ！」
アレアは滅多に出さないようなひきつったような声を上げ、近くの棚にしがみつく。
「嫌じゃねぇんだよっ！　余計なことばっかりしやがって、仕置されるのは当然だろうがっ！！」
力で敵うはずもない叔父の前に、アレアは必死に棚にしがみついて離れようとしない。
アレアはこの後何が待っているのか分かっていた。叔母が留守にしている間だけいつも仕置と言いながら叔父にされていることを…。
死に物狂いでしがみつき、その場から動かないアレアを叔父は力任せに無理矢理棚から引き剥がすと、体を抱え上げて寝室へ行きベッドの上に放り込む。
「たっぷり仕置してやるからな…」
そう言いながら、ズボンのベルトに手をかける音がアレアの耳に聞こえ恐怖を煽った。
「い、や…。嫌あぁぁっ！！」
アレアは体全体をバタつかせるが、上にのしかかって来る大きな体の叔父を跳ね除けることも出来ず、叔父のいいようにされてしまう。乱暴に身ぐるみを剥がされあられもない姿を晒された。
しかし、この日は以前とは違っていた。街まで買い物に出かけていた叔母が、財布を忘れたのに気がつき家へ舞い戻ってきたのだ。
「まったくあたしとした事が、財布を忘れちまったよ」
ブツブツと一人ごちながら家に戻った叔母の耳に、聞き慣れない奇妙な声が飛び込んでくる。
叔母は眉間にシワを寄せながらその声のする方へ足を向けると、そこに夫とアレアの姿が目に飛び込んできた。
「な、何やってんだいっ！！」
目の前の現実が信じられず、叔母は金切声のようにひきつった声を上げた。その声に気づき振り返った叔父は赤い顔を一瞬でサッと

青くさせるとアレアの上から飛び退き、明らかに見え透いた嘘と分かるような見苦しい言い訳をし始める。
「ち、違う、俺じゃないぞ！　この小娘が誘ったんだっ！！」
「そんな事どっちだって同じだよっ！　この下衆がっ！」
叔母は近くに落ちていた箒を拾い上げるとそれを振り回し、力一杯叔父を叩きつける。
その間にも体をベッドから引き上げ、手繰り寄せるようにしながら洋服を正しているアレアにも、当然のように叔母の攻撃が降り注いだ。
問答無用で叩きつけられ、叔父と共に家から叩き出されてしまう。
「二度とその面を見せるんじゃないよ！　野犬にでも食われて死んじまえばいいのさっ！」
「ま、待ってくれ！　お願いだ！　許してくれよ！」
「いつまでもウダウダと無駄口叩いていると容赦しないよ！　あんた達二人ともさっさと消えとくれっ！！」
勢い良く扉を閉められ、一糸まとわぬ淫らな格好で閉め出された叔父は巨体を揺らしながらその場に泣き崩れた。アレアはこのチャンスを逃す手はないと、きつく拳を握り締め街に下りる覚悟を決めた。

第二章：安息

何も見えない状態でここから何時間もかかるような街まで行くのは相当な労力も気力もいる。だが、アレアは街にでれば何とかなるとそう信じていた。

手探りながら一歩足を踏み出したアレアは必死になって今自分の足元に続く道を踏みしめる。

時折坂道を上り、また平坦な道を行き、そしてまた急な坂道を辿る…。

アレアはふとその時街とは違う方向に向かって歩いているのではないかと気がついた。

街に行くのにこんなに坂道が続いているはずはない。もしかしたら自分は全然違う場所に向かって歩いているのではないだろうか…。

アレアはこの時、街とは真逆の死山に向かって足を進めていた。

鬱蒼と茂る木々がアレアの頭上を覆い尽くし、蔦の絡まる木の枝があちらこちらで不気味さをかもしだしている。昼間でもまるで光の届かない死山の裾野に広がる森…。

時折ギャアギャアと泣き叫ぶ得体の知れない鳥の声とその羽ばたく羽音が響き、不気味に鳴く虫の声が無数に辺りに響いていた。

「ど、どうしよう…。私、違う方向に来ちゃったんだ…」

今更引き返すことなど出来ない。風の冷たさでもう時期夜が訪れる事をアレアは悟っていた。

しばらくその場に立ち止まっていたアレアだったが、ぐっと唇を噛みしめると意を決したように前方を向き、再び地面を踏んで山道を登り始めた。

やや自暴自棄になっていると言った方が、この時のアレアには合っているかもしれない。

今更街に降りたところでどうなるわけでもない。精神的にも肉体的にもかなりの苦渋を今まで嘗め続けてきたアレアは、絶望感と共

に死すら望むようになっていたのだ。今更、怖気付いても仕方がない。
　黙々と山を上り、体がにわかに汗ばむほど長い時間上を目指して歩いていたアレアは山の中腹で力尽き、朽ちた巨木を背に座り込んだ。辺りはもうすっかり夜になっている。
　荒々しい呼吸を繰り返し、虚ろになった目をどこを見ているともなく宙にさ迷わせる。そうこうしている間にも体を抱きすくめる程に寒い風が吹付け、アレアの体温を容赦なく下げてきた。
「寒い…」
　体を縮みこませ、アレアは吐く息も白い中で一人夜の森に佇んだ。
「……！」
　急激な体温の変化と登ったこともない山に登り、突如アレアの心臓がギューッと痛み出した。
　アレアの持つ持病の発作だった。
　アレアは胸元を鷲掴みにし、涙目の目を見開いて地面にしがみつくように前のめりに倒れこむ。
　荒々しく、苦しい呼吸を繰り返し顔は青ざめていた。ガクガクと震える体もそのままに、迫り来る死の予感を感じずにはいられない。
「はっ…はっ…、く、うぅぅ…」
　ギュウっと目を閉じると地面の枯れ草を土ごときつく握り締め、胸を押さえていた手すらそのまま引きちぎる勢いできつく握りこむ。
　この瞬間、アレアは咄嗟に頭の中で呟いた。死にたくない、と。
　起き上がっている事も出来ず、横倒れにドサリと倒れこむと体全体を丸め込み苦しい呼吸を必死になって繰り返していた。
　その時、ガサリ…と朽葉を踏む音がアレアの耳に飛び込んでくる。
　アレアは無意識にそちらに手を伸ばし助けを求めた。
「た…たす…て…」
　そこに立っているのが誰でどんな人物なのか、はたまた人間なのかどうかさえも分からないがアレアは無我夢中で助けを求める。
　しかし、そこにいるはずの者は一歩も動かない。視線だけは自分

に注がれている事は分かっていたアレアは震える手を必死に伸ばした。
「お願い…たす…け…」
アレアが掠れた声でそう訴えるが早いか、そこにいた者は無慈悲にもその場から歩き去った。
バサリ、と音を立て伸ばした手が地面に落とされる。アレアは涙を流したままその場で意識を無くした。

第二章：安息

気の迷いか、否か…。

満点の星空が広がる天然プラネタリウムと言ってもいいほどの絶景を見上げ、住処である洞窟の外でリガルナは座っていた。

昼過ぎ、食料の調達にこの場を離れ長い時間山中を歩き回っていたリガルナは、夜になって洞窟へ戻ろうとした矢先に一人の少女と出くわした。

朽ちて根元から折れ曲がり、根元の部分しか残っていない巨木の影にうずくまっていた少女は、苦しげに息をつぎながら体を丸め込んでいた。そしてか細いその腕を自分に向けて伸ばし、助けを乞う。

涙を流し青ざめた顔で、か細い声を喉の奥から搾り出すようにしながら助けを求めるその姿。リガルナはその場に凍りついた。

思い出したくもない昔の自分の姿がそのままそこに反映されているかのような、そんな気持ちだった。

リガルナは目を見開き、食い入るようにその少女を見つめている間にも、少女は必死になってこちらに助けを求めてくる。

ズキリ、と再びリガルナの頭が痛む。

リガルナはその場にいるのが耐えられず、ふいにその場から通り過ぎ去ろうと歩を進めた。

死に間際の人間だ。このまま放置しておいても、今の自分には関係もない。後々に麓の人間が運良く見つけたとしても、遭難に合ってそのまま死に絶えたと思うのが自然だろう。だったらそのままくたばっても問題はない…。

そう思っていた。

ザクザクと地面を踏みしめて少女から離れるリガルナだったが、背後でバサリ、と音が聞こえると反射的に振り返った。

先程まで動いていた少女が、力尽きたようにその場に倒れ込んでいる。

リガルナは死んだと判断し、そのまま再び前方を振り返って歩を進めた。いや、実際には勧めようとした。だが、数歩いったところでまるで足に鉛がついたかのように身動きが取れなくなってしまう。

「……」

何故だろう。なぜ、このまま立ち去れない？　数多くの人間をこの手にかけてきた自分だと言うのに、今この瞬間、背後の人間を見捨てられずに動けない自分がいる。

偽善だ。こんなものは、偽善でしかない…。何を今更迷う事がある…？

そう分かっていながら、リガルナは背後を再び振り返った。

冷たい風の吹き付ける山中に捨て置かれた少女。必死になって助けを求め結局見放されたその姿は、まるっきり幼い頃の自分と同じ…。

そう思いながらリガルナは無意識にも足が少女の方に向かって歩き出していた。

第二章：安息

「……」

寒空の下リガルナは自分の手を見つめた。

もう１２年もの間自分以外の人間に触れた事がない。少女を抱え上げた時の妙な感触がまだ、手のひらに残っている…。

リガルナは見つめていた自分の手をギュッと、きつく握り締める。

「…くだらん」

ふっと瞼を閉じ、自嘲するかのようにそう呟く。

一時的な気の迷いでしかない。少女の目が覚めたら自分の前から消えてもらおう。

リガルナはそう考えていた。

その頃、洞窟内ではアレアが意識を取り戻していた。

ゆっくりと押し上げた瞼。だがやはりその目には闇以外のものは何も見えない。分かっていてもついため息をついてしまうのはいつもの事だった。

しばらくぼんやりとしていたアレアだったが、ふと自分が今先程までの朽葉の落ちた土の匂いのする地面ではなく、固く冷たい石の上に寝かされている事に気がつき体を引き起こした。

「ここは…」

ヒュウウ…と鳴る風笛の音が耳を過ぎる。その風笛の中にボボボっと揺らめく炎の音を聞きつけた。

ひんやりとした空気に無機質な空間をアレアは肌に感じると、倒れる前に自分の側で見下ろしていた誰かが助けてくれたのだと思った。

アレアが寝かされていた石の上から起き上がろうとした瞬間、人の気配を感じそちらに顔を向ける。

「……」

「……」
リガルナはこちらに顔を向けたアレアの顔を見ると訝しげな顔を浮かべ、冷たくその顔を見た。
所詮、この女も他の人間と変わりはない。自分を恐れない訳がないのだ。
アレアはこちらを見つめる視線に酷い冷たさを感じ、言葉を無くす。
そしてそこにいるのが男性であると認識した。アレアには性別がなんとなくだが匂いと雰囲気で分かる。
男性だと分かると、途端に恐怖を感じた。目が見えない事がバレたら何をされるか分からない…。
双方が相手を信用出来ない状況に置かれ、言葉に詰まった。しかし、先にその沈黙を破ったのはアレアの方だった。
「あ、の…」
「……」
「…た、助けて頂いて、あ、ありがとうございます」
努めてさも目は見えているのだと言うようにリガルナを見ながらそう呟くと、リガルナの表情が更に険しくなった。
リガルナはジロリとアレアを鋭く睨みつけると、吐き捨てるように言葉を吐いた。
「…消えろ」
「え…」
「目が覚めたなら、俺の前から消えろ」
「……」
突然のその言葉に、アレアの表情がとたんに曇った。

第二章：安息

酷く冷たく、そして突き刺さるような言葉。叔母の言葉も同様に冷たく、いつも自分を打ちのめすような言葉ばかりを投げかけてくる…。

アレアは急速に悲しくなり、こみ上げる涙を堪えるまもなくその頬にポロポロと涙をこぼした。

それに驚いたのはリガルナの方だった。

なぜ泣く必要がある？　自分の姿を見て臆さない人間などいるはずはない。もしや、この涙にも裏があるんじゃないだろうか？

「…すみません…」

「……」

アレアは顔を伏せ、こぼれ落ちる涙を拭った。

リガルナの前から消える。それは、この山を強制的に降りろと言っているのだと理解すると、アレアは下唇を噛んだ。

一人で下山は無理だ。どこかで足を滑らせて、今度こそ命を落とす恐れの方が大きい。

「一人で下山は、出来ません…」

「……」

リガルナの表情がピクリと動いた。

まさか、自分と一緒に下りてくれと言うのではないだろうか。やはり、この女は俺をハメようとしている…。

リガルナはギロリと睨みを利かせると、腕を伸ばし勢い良くアレアの首を手で掴むと背後の岩にその体を叩きつけるように押し付ける。

「やっ……！！」

突然の事にアレアは顔を背け身を固くするが、強かに背を岩にぶつけ喉元を軽く締め上げるリガルナの手に息苦しさを覚えた。

「生かした状態で逃がしてやると言っているんだ。くだらない事を

言っている暇があるなら、とっとと俺の前から消えろ」
「……う…」
ギュウっときつく締め上げるリガルナの手に、アレアはきつく目を閉じ恐怖から冷や汗を流しながら身動きが取れない。
「それとも、死にたいなら望み通りにしてやろうか…？」
アレアはその言葉にきつく目を閉じたまま首を左右に振った。
死ぬ気はない。いや、むしろ死にたくなどない。たとえ何があっても死にたくない…。
アレアの反応を見たリガルナはアレアの首から手を離すと、アレアは大きくむせこみ石の上にへたり込む。
「だったら消えろ。すぐにだ」
喉元を押さえ、ポロポロとこぼれ落ちる涙を拭うこともせずにアレアは何度もむせ込んだ。そして悲痛な顔を浮かべたままリガルナを振り返ると、叫びにも似た声で訴えた。
「…一人じゃ下りられないんですっ！」
「……消えろ」
「下りられないんです…！」
「目障りだ」
「…下りられないのっ！！」
最後は悲鳴に近い声でそう言い切った。ボロボロと零れ落ちる涙を止められず、酷く悲しくなり嗚咽を漏らしながらアレアはその場に泣き崩れた。
リガルナはそんなアレアを見やり、冷たく言葉を投げかけた。
「お前たち人間など信用するに足らない。そう言って俺を人里に連れて下り、殺すつもりだろう」
「……！」
アレアには想像もしていなかったそのリガルナの言葉に、目を見開いた。
そして目の前のリガルナに顔を向けるが、その表情はアレアに見ることは出来ない。

「いいだろう。日の出までここにいてもいい。だが、日の出と共に俺の前から去れ」
「……」
リガルナはそう言い捨てると踵を返しその場から立ち去った。
遠のく足音に、アレアは言葉をなくしたまま呆然とその方角を見つめたまま動けなかった。

第二章：安息

翌朝。
リガルナは外で眠り、日が昇る前に目覚めた。
特別、アレアがいるからと言うわけではない。いつもの通りの目覚めだ。
朽木に背中を預けたまま眠っていたリガルナはゆっくりと起き上がると、遠く彼方に登る朝日を目を細めて見つめた。
人間など、信用ならない…。
きつく拳を握り締め、アレアをここへ連れてきた自分に酷く後悔をしていた。
完全に日が登り、空一面に青が広がる頃になってアレアが起きてきた。洞窟の壁を辿り入り口付近に辿り着くと同時に声がかけられる。
「まだいたのか。俺は日の出と共に去れと言ったはずだが…」
「……」
「……」
アレアは昨日のリガルナの言葉が引っかかっていたのもあるが、あれからしばらく考えてみたもののやはりどう考えても一人で山を下りることが出来ず、まして相手が共に下りてくれる訳ではないことを知ったアレアは、覚悟を決めざるを得なかった。
昨日のような冷たい仕打ちを受けることを覚悟で、震えるこぶしを握り締める。
「あの…。私…ここにいては駄目ですか…？」
「……何だと？」
不安ばかりが胸を占め、この場に留まると言う選択肢を選んだ事自体相当勇気のいることだった。が、今のアレアにはこの選択肢以外選べない状況に置かれているのも事実。
素性が知れず、ただ冷たく当たるだけのリガルナとここで共存す

ることを自ら提案するなど、ただ命知らずだとしか思えなかった。
アレアのその言葉に憮然としたリガルナは、怪訝そうにアレアを睨みつける。
自分の前から一刻も早くいなくなって欲しいと思っている相手が、ここに留まるなどと言い出したのだから無理もない。
にわかに苛立った様子で、リガルナは口を開く。
「俺の言っている意味がわからないのか？　俺はここを出て行けと言っている」
「…分かります。分かってます。でも、私…一人じゃどうしても下りることが出来ないんです…。だから…」
「だから何なんだ？　そんな事は俺の知ったことじゃない。さっさと消えろ」
畳み掛けるかのようなリガルナの言葉に、アレアは再び泣き出しそうなのを我慢して頭を下げた。
「お願いします。何でもしますから、ここにいさせて下さい」
「必要ない。邪魔なだけだ」
リガルナは苛立った様子でそう言うが、アレアは食い下がった。
「だったら、私を麓まで下ろして下さい」
リガルナはそんなアレアの前に立ちはだかると、アレアの胸ぐらを掴み上げた。
足が地面につかないほどの高さまで持ち上げると鋭く睨み下ろしたまま苛立った口調で言葉を放つ。
「理解出来ていないようだな…。それとも、そんなに死にたいか！？」
「ち、ちが…」
リガルナは口の端を引き上げ、意地悪くほくそ笑む。
アレアの胸ぐらを掴んでいる手とは逆の手を振りかざし風を呼ぶと、ヒュウヒュウと音を立てその手のひらに人間の体を容易に切り刻む鋭さを秘めた風が生まれた。
その瞬間、ズキリ、といつもの頭痛がリガルナを襲った。

「…っく！」
思わず顔を顰めるが、それを振り切るようにアレアを睨みつける。
その気配にアレアは胸元のリガルナの腕を掴んだまま涙をこぼしきつく瞳を閉じたまま叫んだ。
「私、目が見えないんですっ！」
アレアのその言葉に、リガルナの手が止まった。
「それに私を生かして下山させて、あなたの言うようにもし私があなたの事を誰かに言ったとしたら、それこそあなたの不利になるんじゃないんですか！？」
必死になってそう言い放つアレアの言葉に、リガルナはアレアを地面に下ろすと胸元から手を離した。そしてリガルナは目の前のアレアを見下ろした。
アレアにすれば、捨て身の発言だった。目が見えない事を相手に知られては、自分の身が叔父の時のような危険に晒される恐れもある。もうここまできて引き下がる事もできず、アレアは自分の知られたくない情報を自ら漏らしたのだ。
きつく拳を握り締め、顔を伏せた状態でボロボロと涙をこぼすアレアは、今後どんなふうな身の振りになっても仕方がないと腹をくくっていた。
リガルナはしばらく言葉を無くして目の前のアレアを見ていた。
確かに、アレアの言う事には一理ある。だったら、このまま囲ってしまった方がどちらかと言えば自分に振りかかる危険は減るんじゃないだろうか…。そう考えたリガルナはフン、と鼻を鳴らすとアレアに背を向ける。
「……好きにしろ」
「え…？」
目が見えないなら好都合だった。自分が世の中を恐怖に陥れている赤き魔物だとは知らずにいるなら、あの恐怖に歪んだ眼差しを向けられ蔑まれる恐れはない。そんな眼差しはうんざりだった。そもそも信用出来ないのだから、このままここに留まる事を望むままに

しておいた方がいいとそう考えた。
「ただし、俺に近づくな」
そう言い放ったリガルナは踵を返し食料を探しに出かける。
道なき道を歩き、ほとんどが枯れた樹木が生え揃う山の中から食料を見付け出すのは至難の業だったが、リガルナは長い間この山に暮らす内に野生の動物がそうするように、暖かい間にわずかに実った木の実などを涼しい場所に隠して食料を確保していた。
その場所まで歩きながら、リガルナは小さく舌打ちをする。
殺してしまえば面倒事もなくなりいつもの自分に戻れる。だが、なぜか殺せなかった。
威嚇めいたように魔法を発動させたが、自分の中でアレアを殺すと言う概念がなかった。なぜ…？
リガルナはこの時、自分で気づかないところで小さな安息に期待を寄せていた。
１０年以上人と関わらずに暮らしてきた。そして死に際のアレアに出会い、人間に触れた。その暖かな感覚が忘れたはずの思いをわずかに思い出させ、触れた感触を忘れられなくなっている。
蔑む目や怯える目を向けられるのは、もううんざりだ。恐怖におののかれ、再び自分をなじるような言葉を聞くのも耐えられない。だが、アレアは違った。目が見えないと言う事は、リガルナには相手が近くにいる事を許すという隙を作らせるのに十分な要素を含む。
ただ、どこか納得が行かない。出会ったばかりのアレアにうっかり心を許してしまいそうになってしまう自分に対してでもあり、殺せなかった事実に対してでもある。
リガルナは自分の中のがんじがらめになりかけている考えに、深く眉間に皺を寄せた。

第二章：安息

「俺は何をしているんだ…」
その場に立ち止まり、リガルナはきつく拳を握りしめた。
冷たく言い放たれ、その場に取り残されたアレアはその場に泣き崩れていた。
絶望的だとも、虚無感だとも言えるなんとも言えない感覚、それにいい知れない恐怖に包まれ溢れでる涙が止まらない。
自分は何て馬鹿な事を言ってしまったのだろう。そう、自分を責めたてもした。
今後自分の身の振りがどうなってくるのか、何も分からない。
「…お母さん…」
無意識に口をついて出たのは、今はもういない母親だった。
手の甲で涙を拭い、それでも零れ落ちる涙を更に拭い去るもやはり涙はとめどなく零れ落ちる。
どれくらいそうしていたか自分でも分からない。ただ、リガルナがここへ戻るまでの間そうしていたことは確実だった。
リガルナは洞窟の入口で座り込み憔悴しきっているアレアの姿をちらりと一瞥するが、特別声をかけようとはしなかった。
ただ、手にしていた食べ物の一つをアレアの前に投げよこす。
ボスン、と言う重たい音が鳴りコロコロと地面を転がってアレアの手に当たると、そこでアレアは初めてリガルナが戻ってきていた事に気が付きハッと顔を上げる。
「喰え。どうせ腹が減ってるんだろ」
冷たいながらもそう言い放つリガルナの言葉に、手に当たった物をアレアはそっと手に取った。
ひょうたん状の形の何か。触ると実は固く絞まっておりひんやりとして冷たい。表面には少しのうぶ毛が生えているのかフワフワと

した感触もあった。
「あの…これは…」
「……」
リガルナはアレアの問い掛けには一切答えない。
自分が動揺していた事もあるが、これ以上近づかない為にあえて自分から壁を作っていた。
心を許すようなことはあってはならない。もし心を許して、またいつかのように裏切られた時の衝撃はリガルナにとってボロボロの心に更に大きな傷を作ることになる。
怯えている…。そう言った方が正しい。だから信用できない。
自分以外の人間に殺されそうになる事も、恐怖の眼差しを向けられる事にもリガルナは恐怖していた。
とんだお笑いぐさだ。世界を恐怖に陥れ無差別に殺人を繰り返している大の男が、単に怯えた子供と何ら変わらないのだから。
その弱い心に、今目の前にいる一回り以上も年の離れた少女が気付き、そして包みこんでくれるようになるとは、この時のリガルナには知る由もなかった。
「……」
アレアは投げ寄こされたその手元の実をしばらくの間撫で回していたが、触っているうちに昔食べた事のあるクレフと言う実だと気付くとようやくそれを口にした。
皮ごと食べられる、食感は洋梨と同じく果汁がたっぷりのシャリシャリした甘い果実。ただ、投げ寄こされたこのクレフはまだ熟していない為に固く、歯ざわりが悪い上に酸っぱい。
アレアは思わず眉間に皺を寄せてしまうが、文句など言える立場ではない。何も言わずただ黙々とクレフに口をつけた。
日頃からまともな食事すらあまり摂れていた方ではなかったアレアには、このクレフ一つで久し振りにお腹が膨れた。
先程まで涙に暮れていたアレアは、多少なりとも元気が出たのかその場から立ち上がるとリガルナの気配のする方へ顔を向ける。

「あの…」
「……」
「私、アレアと言います…。あなたは…？」
自己紹介をしていなかった。そう気づいたアレアは自ら先に名前を名乗る。もちろん、相手に対する警戒心はビリビリするほどに張り詰めていたが、自分から共存を望んだ以上相手の名前くらいは知っておきたい。そう、アレアは考えていた。
しかしリガルナはその言葉にも一切返事を返そうとはしなかった。名前などどうでもいい。リガルナはアレアとは違い別段そこに気を取られる事などなかった。
「あの…」
「……」
「名前、教えて下さい…。名前も知らないのは、何だか嫌です…」
「…だったら消えろ」
「……」
相変わらず口からついて出る言葉は冷たく言い放つその一言だけ。アレアは思わず口をつぐんで、思いがけず泣きそうになるのをグッと我慢した。
泣いた所でどうなる訳ではない。それは十二分に分かっていた。
「…ごめんなさい…」
しょんぼり肩を落とし、アレアは小さく詫びの言葉を零す。
これから先もこんな風にずっと共存して行くことになるのだと言う事に、アレアはショックとも安堵とも付かない思いに包まれていた。

第二章：安息

アレアがリガルナのいる場所に来て一ヶ月が経った。
その間、二人のやりとりは最初と何ら変わりがなかった。言葉一つろくに交わすことなく、必要以上に近づく事もなく、並行的な関係。
今後も今のこの状況と変わらず、ただ黙々とした生活が続くものだとばかり思っていた。
だが、この日は少し状況が変わっていた。
いつも通り、アレアが目覚めた頃にはリガルナは既にその場におらず、食料か何かを調達しに出かけている。
残されたアレアはリガルナの気配がない事を確認すると小さく溜息をつき、いつものように洞窟の外にある小さな岩の上に座り込んでぼんやりと外を眺めていた。
リガルナはいつも通り食料を調達しに山を歩き、そして山道を歩いて戻っていた。
「……」
ふと、リガルナが山道の途中で足を止めた。これまで一度として気がつかなかったが、視界の端に普段山ではまず見かけない物が落ちている事に気がついたのだ。
リガルナはそちらを見ると、朽木の傍に落ちているのは小さな金色のボタンだった。
いかにも高価な、それこそ貴族衣服に付いていたのであろうそのボタンは、朽葉の中に埋もれ、土にまみれていたがその輝きは健在だった。
リガルナはそれを手に一度周りを見回した。
もしや、誰か人間がいるのではないだろうか…。そう思ったリガルナは注意深く辺りを見回すも、それらしい痕跡も気配も感じられない。

ふと、その時気づいたのは、ここは以前アレアが倒れていた場所だった。
「……あの娘のか」
リガルナはじっとそのボタンを見つめていたが、確証も持てないままそれを手に洞窟への道を辿り出した。
山道の朽葉を踏みしめながら、リガルナは考えていた。
そう言えば、この所不快な夢を見なくなった。あれだけ頻繁に見ていた過去の忌々しい夢…。その夢を見る度に憤りを感じ、人々を手にかけてきていたと言うのに、それすらもしていない。
そして当然のように、人を殺める直前直後の謎な頭痛も起きていない…。
それもこれも、あの少女が自分の傍にいるようになってからだ。なぜ、突然そうなった？　むしろこの所どこか穏やかに過ごしている自分に違和感さえ感じる…。

第二章：安息

リガルナはギュッとこぶしを握り締め一歩一歩、洞窟へと足を進める。やがて目前にそれが見えてくると、思わずリガルナは足を止めてしまった。

アレアは、呆然とした表情のまま、見えるはずもない空を見上げて過ごしている。

その目は、これまで生きてきた人生の中で何の喜びも知らず、辛い事ばかり背負ってきたであろう色をしていた。絶望にも似たその色は消え去ることはない。そして何よりその目は、あまりにも自分に似すぎている。リガルナはこの時初めてそう感じた。

似るはずもないものが、アレアとリガルナの間には存在している。

リガルナはぐっと地面を踏みしめると、この時初めてアレアの傍に歩み寄った。

リガルナの気配を察したアレアはビクリと体を強ばらせ、怯えた様子で振り返る。

「……」

「……」

互いにどう声をかければ良いのかと、そんな沈黙が過ぎった。だが、リガルナの方からこの時沈黙が破られた。

「これはお前のか？」

ぶっきらぼうにそう言いながらボタンを握っていた手を差し出すと、アレアは不思議そうな表情を浮かべたまま恐る恐る手を差し出した。

ポトリ、と差し出されたアレアの手の中に先程拾ったボタンを落とすと、アレアはそれを指先でなぞりながら感触を確かめた。

「…これは…ボタン？」

しっかりと指でそれを確認しながらポツリと呟いたアレアは、ハッとなって慌てて自分のポケットを探り始めた。そしてそこに探し

ている物がないと分かると、手にしていたボタンをギュッと両手で握り締める。
「これは、私のです。でも、どこで…」
「お前が倒れていた場所だ」
アレアはそれを聞き、ホッとしたような表情を浮かべるとここに来て初めて微笑んだ。
ふんわりと、優しさの込められた愛くるしい微笑み。手にしたボタンを大切そうに握り締めたまま、嬉しそうにリガルナの方へ顔を向けると小さく頭を下げた。
「ありがとうございます。これは形見なんです。無くした事にも気づかないままだったなんて、私、バチあたりです…」
「……」
リガルナはこの時、動けなかった。
アレアが心底嬉しそうにして微笑んだ、これまでのように作られたものでもなく、緊張感も不安感も何も感じられないその微笑み。どうしてなのか、目が離せなくなっていた。言葉はもともと多くないが、それでも少ない言葉数が更に減ってしまう。
何も言わずただ自分を見下ろしてくるだけのリガルナに、心を一瞬許したアレアはいつものような固い表情に戻ると、怯えたようにリガルナを見る。
「……あ、あの…。ご、ごめんなさい…」
「……」
何に対して謝罪の言葉を述べたのか、アレア自身もよく分かっていなかった。ただ、無意識に謝らなければと言う思いが働き、何でもないことに対しても謝罪してしまう。
これまでの環境が、彼女をそうさせてしまったのだろう。
リガルナは目の前のアレアからふぃっと視線を外し、そして手にしていた食べ物を手渡した。
「え…？」
突如として手渡された事に、アレアは驚きを隠しきれない表情の

まま再びリガルナを見上げる。
もう普通になってしまっていた事だが、リガルナはいつもアレアの傍に来て食べ物を手渡すのでなく投げ寄こしてくる。自分から距離を保つようにしていたはずなのに、今日は違った。
かけてくる言葉はないが、しっかりと手に食べ物を握らせて傍を離れたリガルナの行動に、驚かないはずがない。
「あの…」
「……」
おずおずと声をかけてくるアレアに対し、リガルナは何も言葉を返さなかった。ただ、先程初めて見た彼女の笑顔が頭に残って仕方がない。
小さく礼を述べ、こちらに背を向けて手渡された食べ物に口をつけ始めるアレアを、いつものように朽木に背を預けて座り込んだリガルナは目線で追いかけた。
アレアがここに来てから、彼女の行動にこうして視線を投げかけたことは殆ど無いに等しかった。だが、急に目線だけでも追いかけたくなる。
取ってきた食べ物に口をつけることもなく、ただ黙々と食事を摂るアレアの後ろ姿を眺めた。
なぜだろう。何か気になる…。
リガルナは心の中に芽生えようとしているこれまで感じた事のない感情に戸惑いを感じていた。

第二章：安息

それから更に数日が過ぎ、その間も二人の関係はこれまでと変わることはなかった。だが、リガルナにとっては大きな違いがあった。

あの日以来、アレアの一挙一動が全て気になる。気がつけば目線だけが彼女を追いかけている事が多くなった。

声を聞きたい。そう思うようにもなったが、長年人と触れ合ってこず、まして人々からは忌み嫌われてきた者として話しかける術も忘れ、そしてそうすることが躊躇われた。

しかし、日を追うごとにアレアの事を知りたい衝動が強くなってくる。が、その反面、自分の中の臆病風も強く吹く。

もし、自分の正体が分かったら、きっと彼女は自分の傍からいなくなるに違いない。いや、そうではない。いなくなれない分、怯えられた状態で共存する事で、また自分自身をまた酷く傷付けることになるに違いない。そうなると、おのずとこれまでそうしてきたように彼女をこの手で…。

どこかで鳴く虫の声を聞きながら、リガルナは自分の中にある感情が「愛情」と言う名のものである事を気付きもせずに、一人思い悩んでいた。

あの笑顔が見たい…。もっと、アレアを知りたい…。

満点の星空を眺めながら、無意識にもそう考えていた。

彼女と共にある内は、ずっと求めた安息を感じることが出来る。人を殺すと言う衝動を抑えることが出来る…。

「……」

その時、ザリ、と地面を踏む足音を聞き、我に返ったリガルナがその音の方向へ視線を投げかけた。

そこには眠っているはずのアレアの姿があり、虚ろな眼差しのまま洞窟から出て崖の方へ足を進めていた。

「……？」

リガルナは不信に思い、アレアのその行動を見つめる。
アレアは僅かに顔を上げ、宙を眺めるような状態のままゆっくりとした歩調で崖の方へ歩いていく。
様子がおかしい。そう感じたリガルナは気配を殺し、足音を立てないようアレアの傍に近づいていった。
アレアはあと一歩踏み出せば、真っ逆さまに下に落ちるギリギリの場所でようやく立ち止まると、ぼんやりと宙を見上げている。
「……お母さん…お父さん…」
その目からはハラハラと涙が伝い落ちていた。胸元には両手で包むようにしっかりとあのボタンが握り締められている。
「…ごめんなさい…。私、もう、ダメ…」
アレアはこの日、久し振りに夢を見ていた。両親共に幸せに暮らしていた頃の、幼い自分の夢。目は見えなくとも、夢の中での両親の姿は、アレアにしっかりと見えている。
とても幸せで、笑顔が耐えなくて、そして全身全霊で愛されていた幼い頃の自分…。
両親が事故で死んでしまってからの人生は、まるで泥沼だった。生きているのに生きている実感もなく、毎日が操り人形のようで生きている意味がない。そんな人生だっただけに、この日見た夢は余りにも暖かく、優しかった。
その温かさと優しさが恋しくて、今の人生に絶望していて、頼る人もいない。見ず知らずのリガルナに対し、瀕死状態の中で死にたくないと切願したと言うのに、今は全てを投げ出したい気持ちでいっぱいだった。

第二章：安息

悲しむ人もいない。友人もいない…。誰も自分を必要としていないなら、いっそ…。

アレアは胸に抱きしめたボタンを、ギュッと更にきつく握りこんだ。そしてそっと瞳を閉じる。

「私を、二人のところに導いて…」

小さく呟くようにそう言うと、アレアはゆっくりとした動作で足を踏み出した。

足場がなくなり、体がガクンと下に沈む。が、パシッと右腕を掴まれた強い衝撃を受け、手にしていたボタンを取り落としてしまった。ボタンは暗闇の中に落ちて消えた。

「……え…？」

死ぬ為に踏み出した一歩が意味をなさず、アレアは右手首をしっかりと掴まれたまま宙にぶら下がっている。

一瞬何が起きたのか分からず、自分の腕を掴んでいるものの方へ顔を向けた。

「…何をしている」

「……っ」

ふいにかかった言葉に、アレアは顔を強ばらせた。

リガルナは飛び降りようとしたアレアを間一髪で助け、軽々と崖の上へ引きずり上げた。

踏み抜いてそのまま死ぬ覚悟だったアレアは再び地面の上に舞い戻り、両手両足を着いた状態で嗚咽を漏らしながら涙を流していた。

「どうして助けたりしたんですか…」

「……」

震える声でそう言ったアレアは、地面に着いていた手をきつく土を握りこむようにして拳を作った。その地面にはポタポタと涙が滴り落ち、濡らしている。

「もう、あなたにとっても、私はただ邪魔にしかならないならいっそこのまま死なせてくれればいいのに！」
悲痛な叫びにも似た声でそう言うと、アレアは全身を震わせて激しく泣きじゃくりだす。
「もう嫌なの！　全部、全部イヤ！　誰も私を必要としてくれない。誰も私を愛してくれない！　誰も、悲しんだり気に掛けたりしてくれない…。こんな人生、何だって言うの…！　何だって言うのよ…っ！」
アレアはこれまで堪えてきた物を突如としてぶちまけ、地面に伏して激しく泣き出した。
それを見ていたリガルナは、まるで自分の本当の姿を見ているような気分で彼女を見下ろしていた。
そんなアレアを見つめていると、ずっと隠し、心の奥底に押し込めてきた本来の自分が顔を覗かせる。
「俺は…必要とされるどころか、皆から消えて欲しいと望まれている…」
突然そう言ったリガルナのその言葉に、アレアは一瞬動きを止めた。そしてゆっくりと顔を上げ、涙に濡れた顔をリガルナの方へ向ける。
「この世に生きる全ての人々に、消えて欲しいと…」
「……え…？」
アレアの涙は止まっていた。
初めて自分のことを話し始めたリガルナに驚いた事もさながら、そのリガルナの発言にも言葉を無くす。
リガルナはアレアを見やりながら目を細め、そしてどこか寂しげな色をちらつかせた。
「お前は俺と違って、まだ…望まれている」
「……」
「知らないだろうが、お前は俺に安息を与えているんだ。俺が、お前を必要としている…」

思いがけないその言葉に、アレアはただ言葉をなくし驚いたような表情でリガルナを見ていた。

第二章：安息

「…え…待って…それって、どういう事…？」
アレアはリガルナの言った“皆から消えて欲しいと望まれている”と言う言葉に引っかかりを感じ問いかけた。
リガルナはその場から立ち上がりアレアに背を向けると、遠くを見ていた瞳を伏せた。
「お前は知らなくていい…」
「…ま、待って！　待って下さい！」
リガルナは呼び止めるアレアを振り返ることもなくその場から立ち去った。
知らなくていい…。いや、そうじゃない。知られたくないのだ。もし自分の正体が分かれば、きっとアレアも他の人間たちと同じように恐怖し、罵声を浴びせてくるに違いないのだ。
リガルナは洞窟からだいぶ離れた場所で足を止め、何の気なく空を見上げる。
こんな風に恐怖と隣り合わせに生きる事を遠ざけていたのに、なぜまた今になってこんな気持ちになるのだろう。なぜ、そうなると分かっていながら、彼女に安息を求めたりしたのだろう…。もう二度と、裏切られるのは嫌だと思っていたのに…。
リガルナの零した溜息は、吹抜けて行く風に流されて行った。
洞窟に残され、自ら死を望みながらも生かされたアレアは、一人その場に座り込んだまま動けずにいた。
何だろう。あの人が今見せた酷く哀しい雰囲気は…。でも、あれは、自分も知っているもの。つい先程まで自分が感じていた孤独感と似ている。いや、それ以上の…。
アレアはぐっと拳を握り締めるとゆっくり立ち上がり、リガルナが歩いていったであろう形跡を辿りながら後を追いかけ始めた。
互いの傷を舐めあう為に動くのじゃない。リガルナがそうである

ように、自分もどこかで助けてくれたリガルナにすがっていた所がある。冷たく突き放されても、言葉を交わすわけでもなく、ただ近くにいるその存在にすがっていた。ならばそれは、自分にとっても安息を与えてもらっていたのと同じではないのかと。

両手を一杯に広げ探るようにしながら、崖から足を滑らせないように細心の注意を払い一歩一歩後を追いかけた。

「待って、待って下さい。お願い、待って…」

おぼつかない足取りで後を追いかけてきたアレアの声が、その場から動けず一人考え込んでいたりガルナの耳に届く。

まさか追いかけてくるなどと思いもしなかったリガルナは、僅かに驚いた顔を見せアレアを振り返る。

アレアは目の前に人がいて、それがリガルナである事を雰囲気で察知していた。ようやくリガルナの前まで歩いてくると、乱れた呼吸を整えようやく口を開く。

「私…。きっと、あなたと同じだったんだと思います…」

「……」

「あなたがそうだったように、私も、安息を感じてあなたにすがってた所がある…。どんなに冷たく突き離されても、話をしてくれなくても、ただ近くにいるあなたに、どこかですがってた…」

「……」

リガルナが見下ろす前で、アレアはポロポロと涙が零れおちた。

「自暴自棄になっていたけど、本当は助けてもらえて…嬉しかった…」

「……」

第二章：安息

どんな言葉をかけて良いのかも、どんな風に行動すればいいのかも、今のリガルナには分からなかった。人と関わらなくなってだいぶ経つ。今自分がどうすればいいのか、そんな事も忘れてしまった。

何も言わずただ黙ってアレアを見下ろしていたリガルナだったが、ふと涙をぬぐい去ったアレアの方から手を伸ばしてきた。

探るようにゆっくりと伸ばされた手は、リガルナの腕を取り、なぞるようにしながら手を握りしめた。

「…名前、教えて下さい」

いつかのようにアレアはそう呟くように言うと、視線を上げてきた。その瞳に自分の姿が映り込んでいない事に安堵を感じながらも、リガルナは自分の名を明かすことに躊躇した。

赤き魔物と言われ続け、リガルナと言う名があまり世間に知られているとは思えなかったが、それでもその異名と共に広まっていないとも限らない。

名を明かしただけで自分の正体が分かってしまう可能性がある事が怖かったのだ。

いつかのように突き離すことも出来た。しかし、今のリガルナはそれすらも躊躇われる。

しっかりと握り締められた手のぬくもりが振り払えない。自分の中にあった弱さをまざまざと見せつけられているようだ。

「お前は…」

十分な間合いを取って、ようやくリガルナの口から出た言葉に、アレアはただ黙って頷いた。

「赤き魔物を、知ってるか…」

名を明かす前に、聞いておきたかった。もしかするとこの質問は、自分を落とす為の自虐行為なのかもしれない。だが、それでも聞いておきたかった。

リガルナはアレアの返答によっては名を明かしてもいい。そう思っていた。
赤き魔物と言う異名を聞き、アレアは一瞬ピクリと反応を示すが特別驚いた様子もなく静かに頷いた。
「私がまだ叔母と叔父の家にいた時に、二人が話していた会話を聞いて知っています。でも、ここではない隣の大陸で起きている事件だと、そう聞きました。私が知っているのはそれだけです」
「……」
「街に出ることも出来ず、ずっと家に閉じ込められたままで暮らしていましたから、多くの情報は知りません。叔母も叔父も、どうしてか人目を避けている事が多かったですし…」
「そうか…」
その答えに、リガルナは安堵した。これならば、名を明かしてもいいだろう。そう思えた。
「それが何か…？」
「いや…。俺は…リガルナだ…」
数ヶ月経ってようやく聞けたその名前に、アレアの顔は自然と緩んだ。
名前を知るだけで、どうしてこんなにも安堵出来るのだろう。名前も知らず、ただ近くにいた時よりもずっと近くに存在を感じる。
「ありがとうございます…リガルナさん」
アレアは緩やかな笑みを見せた。
リガルナはそのアレアの姿を見て、心がざわついた。
初めて見せた一瞬の微笑みが頭を離れず、そして今安心したように微笑みかけてくるアレアの笑顔。それが、リガルナにとって手放したくない物の一つだった事を、この時分からされた。
出来るなら、自分の全てを彼女が受け入れてくれたらいい…。そう、心の中で無意識にも願っていた。
「もう今日は戻るぞ…」
リガルナはフイッと顔を背けてそう言うと、アレアは笑みをその

顔に残したまま頷いた。
「…はい」
その後、二人の距離は歩むほどの速さで少しずつ縮まっていった。

第二章：安息

「ただいま戻りました」
リガルナ討伐の為、遠征に出掛けていたセトンヌがレグリアナ城に戻ってきた。
謁見の間にいたエレニアは目を細め朗報を待っているかのように、目の前のセトンヌをじっと見据えている。
「よう戻った。して、リガルナは仕留めたか？」
「いえ、それが、この所何の動きも見せず落ち着きを払っているせいか、手掛かりどころか拠点場所も何も分からない状態が続いており、今だ討伐に至っておりません」
「そうか…。やはりな…」
リガルナを仕留めて帰ってくる事を望んでいたエレニアはどこか残念そうに溜息を漏らすも、セトンヌが手も足も出せない事に対する咎めようとはしなかった。それどころか、納得したように頷いてさえ見せる。
エレニアは隣に立っていたグルータスを見上げ、溜息を一つ零した。
「一体奴はどうしたの言うのだろうな？　ここ数ヶ月なんの動きも見せないとは…」
「はっ。さようでございますね。ついこの間まで毎日のように街や村、人々を惨殺して回っていた者が、こうもパッタリと何もしなくなったと言うのは気味が悪うございます」
「そうであろう？　私もそう思っておった。何か良からぬ事が起きる前触れではないかと、勘ぐってしまうのだ」
「はい。誠に仰る通りで…」
エレニアは大きな溜息を吐くと再び目の前に跪いているセトンヌをみやった。
「セトンヌ。此度はご苦労であったな。しばらくは奴の僅かな情報

や対策の為体制を整えるが良い。またいつ奴が動き出すとも分からぬ」
「はい。エレニア様の仰せの通りに…」
セトンヌは深く頭を垂れるとその場から立ち去って行った。
エレニアはそんなセトンヌの背を見送り、そして再びグルータスを見上げる。
「そう言えばグルータス。東の大陸であったと言う暴動はどうなっておる？」
「は。レドリスの街での暴動でございますね。あれにはサルダンを向かわせましたが…」
その名を聞いたエレニアの眉がピクリと動く。
「ほう。サルダンか。遠征に出すには打ってつけな者を派遣したな」
サルダン・ボッシュメント。この国の一兵士でありながら王家や国に対する忠誠心がなく、ただ自分の感情のまま、やりたい放題やると言う軍切っての問題児であり、セトンヌだけではなくグルータスにとってみても頭の痛い人物だった。
「はい。ただ、遠征に向かわせたのは良いのですが、何せ暴挙を繰り返す問題児ですし暴動が大きくなりはしないかと…」
「その為の見張り役を何名か供につけたのであろう？　あまり滅多な事を仕出かすようであれば捨て置けば良い」
「はい。そのように供の者には申し付けてあります」
「なら良い。どのような結果を持ち帰るか、楽しみに待っていようではないか」
エレニアはくっくっと不敵に笑みを零していた。

第二章：安息

謁見の間を離れ、自室へと戻ってきたセトンヌは腰に下げていた剣を置き、やや苛立ったようにベッドの縁に腰を掛けた。そして膝の上に肘を着き、顔の前で両手を組むとじっと睨むように宙を見つめる。

「どういう事だ？　あれだけの事件を毎日のように起こしていたのに、なぜ急に何もしなくなった？　これでは何の足取りも掴めない…」

イライラした面持ちで、しかしどうする事も出来ないセトンヌの中に苛立ちだけが積もっていく。

そこへコンコン、とドアがノックされ誰かが入ってくると、苛立った表情のままセトンヌは立ち上がり振り返る。

「誰だ！」

「……っ！」

そこにいたのはマーナリアだった。声を上げ睨むようにして振り返ったセトンヌに心底驚いたような表情を見せ、その場に立ち竦んでしまった。

そんなマーナリアを見て、セトンヌはようやく肩から力が抜けた。

「ご、ごめんなさい…。あなたが帰ってきたと聞いたから…」

「申し訳ありませんでした。まさかマーナリア様とは思わず、御無礼を…」

「い、いえ。構いません」

そう言いながらセトンヌの前まで歩み寄ってきたマーナリアは、セトンヌを見上げた。

「その様子では、リガルナの討伐は出来なかったようですね？」

「はい。奴の足取りが、今の状態では全く掴むことができません」

セトンヌのその言葉に、マーナリアは心の中でホッとしていた。

まだどこか苛立った様子のセトンヌを見やりながら、マーナリア

は極力穏やかに声を掛ける。
「セトンヌ。焦っていては掴める情報も掴めず、見定めなければならない事が見えなくなってしまいます。落ち着いて下さい」
「マーナリア様…」
セトンヌは自分を気遣おうとするマーナリアの腕を掴むと、有無も言わさずベッドに押し倒した。
突然の事に驚きの色を隠せないマーナリアは自分の上にいるセトンヌを見上げた。
「セ、セトンヌ…？」
「あなたは、一体どちらの味方なんですか」
そう言うなり、セトンヌはマーナリアの首筋に唇を落とす。噛み付かれそうな勢いでキスをされ、マーナリアは無意識にも体を強ばらせた。
「ま、待って！　セトンヌ！」
しかし、セトンヌはマーナリアの首筋にキスを落とし続け、やがてそれはゆっくりと下降し始める。
首筋をなぞり、鎖骨にかけてまで何度も口づけされた。その間にも、セトンヌの手はマーナリアの衣服を紐解き、直接胸の膨らみに手を触れてくる。
「んんっ！」
「マリア…」
マーナリアのリガルナ討伐失敗の報告を聞き、安堵した色にセトンヌは気付いていた。それが、更に苛立を掻き立ててくる。
いつもならもっと余裕のある抱き方をしていたが、この時ばかりはまるで獣のようだった。
忙しなく動くセトンヌの手の動きに、次第にマーナリアの息も上がっていった。
性急な行為に翻弄されながらも、マーナリアはセトンヌを受入れる。
嘘はつけない。戦場でも先陣きって誰よりも先を読み相手の先手

を取るセトンヌだ。僅かなことでもすぐに察知してしまうのだろう。
乱暴ながらも激しく求められ、まるで浮かされているかのような時間が過ぎた…。

「マーナリア様…。すみません…」
マーナリアの肌に額を押し付け、セトンヌは一言詫びの言葉を述べる。
全ての行為が終わり、セトンヌに背を向けていたマーナリアはそんな彼を振り返った。そしてその顔を抱き寄せるとそっと目を閉じる。
「いいえ…」
悪いのは自分だと、心の中で呟いた。
こうして目の前に愛すべき人がいて、その人の愛する者達を奪った相手を同じように憎むのではなく、ただひたすら気にかけてしまっている自分が悪いのだと。
だが、あの時の事が拭い去れないのも事実だった。
マーナリアの胸にあるのはただ罪悪感。それを償いたいと言い続けることは単なる偽善者に過ぎないのかもしれないが、それでも罪の無い人間を罪人へと押しやったのは、他ならぬ自分たちなのだから…。
後悔と罪悪感に胸を痛めていたマーナリアを強く抱きよせ、その唇にキスを落としたセトンヌはベッドから起き上がった。
「セトンヌ…？」
「…そろそろ公務に戻ります」
苛立ちが収まったのだろう。穏やかな声音でそう言ったセトンヌは来ていた軍服に袖を通していた。
マーナリアはベッドから身を起こし、ベッドサイドで着替えているセトンヌの背に寄りそう。
「マーナリア様…？」
「ごめんなさい。セトンヌ…」

「何を…？」
「……」
不思議そうに振り返ったセトンヌを、マーナリアは小さく微笑んだままゆるゆると首を横に振った。
何を言いたいのか大体分かったセトンヌは、その口元にふっと笑みを零すとマーナリアの額にキスを落とし部屋を後にした。

第二章：安息

それから更に数ヶ月の月日が経った。
今日は空は雲一つ無い快晴。アレアはそっと洞窟を抜け出て、目に見えずともその爽やかさを肌身にしっかりと感じ取る。
以前までの落ち込みがまるで嘘のように、心の中もこの空と同じように晴れやかで清々しい気持ちに包まれていた。
ザリ、と地面を踏みしめる音を聞いたアレアがそちらに顔を向けると、ニコリと微笑みかける。
「お帰りなさい。リガルナさん」
「……あ、あぁ」
思いがけず明るく微笑みながら声を掛けられたリガルナは、若干驚いたようにその場に立ち止まってしまった。
あれだけぎこちない関係を保ったまま暮らしていたのがまるで嘘のように、アレアは屈託のない笑みを浮かべこちらを向いている。
やはり、この少女の笑顔を見ていると心がざわめく。
全てを解き明かすことを許されているような、受け入れてくれるような、そんな錯覚に陥りそうだった。
呆然と立ち止まったままそんな事を考えていたリガルナの傍に、アレアはゆっくりとした歩調で歩み寄ってくると、手探りにリガルナの腕を探し始める。
指先がリガルナの肌に触れると、アレアはそっとその手のひらを押し当てそれが腕かどうかを確かめるように何度も触れてくる。
「…何か持ってるんですか？」
「……いや…」
どういう訳か、上手く言葉を話すことが出来ない。
アレアにはリガルナに対するぎこちなさが取れたのだろうが、リガルナには反対にぎこちなさが生まれた。
人と接してこなかった事ももちろん原因の一つではあったのだが、

アレアの前では上手く話せない。以前のようにつっけんどんな言い方さえも出来なくなっていた。
歩み寄りたい。でも出来ない…。その葛藤にも似た思いがリガルナの中に渦巻いている。
アレアは黙り込んだリガルナに、思わずクスリと笑ってしまう。そしてリガルナが手にしていた物を手に取ると品物を定めるかのように何度も感触を確かめる。
「…あ。これ、クレフ…」
アレアが手にしていたのは、初めてここでリガルナに分けて貰った時に食べたクレフだった。
やはり実は固く締まっており、まだ熟すには早すぎるようだ。
「リガルナさん。クレフはまだ収穫には早いですよ」
「…そうか…」
「でも、早摘みしたクレフはオーリオールの葉で包んで置いておくと上手く熟してくれるんです」
食べ物に関する事には、やはり女性らしい知識を持っているアレアだった。
リガルナは例え渋くても固くても、口には入れば何でも構わないと思っていた為美味しく食べる知識など持ち合わせていない。
今日リガルナが持ち帰った果実のほとんどがクレフだった事もあり、アレアはそれを受け取ると手際よくそれらを仕分けし始めた。
洞窟の傍に生えていた、人の顔ほどもある大きな葉の一枚を摘みとると果実を綺麗に包みこんだ。
「オーリオールの葉はないけれど、代わりにこの大きな葉っぱで包んで置きました。たぶん、一週間位で食べごろになると思います。それから、こっちのマグリは今丁度食べごろなので、今日食べましょう」
マグリと呼ばれた大きく丸い、赤い果実を手にしたアレアはニッコリと微笑んだ。
甲斐甲斐しくもリガルナの食事の支度をするアレアの動きは、ま

るで目が見えているかのようだった。
テキパキと手際よく動くその動きに、リガルナは何度目が本当に見えていないのかと訊ねそうになるほどだ。
だが時折、何かを探すように宙の一点を向いたまま手探りしている姿を見て、やはり見えていないのだと確信する。
簡単な食事を終え、リガルナは岩場の上に腰を下ろしたまま夕闇の迫る空を黙って見上げていた。
「リガルナさん…」
そんなリガルナの傍に、木の実の殻で出来た器を持ったアレアが近づいてくる。
ところが少し違う方向へ進んでいる事に気づいたリガルナは、無意識にも手を伸ばしアレアの腕を掴む。
「……俺はここだ」
「あ、は、はい。私、ちょっと違う方向へ行ってましたね」
慌てたように笑うアレアは、リガルナの隣に歩み寄ってくると手にした器をリガルナに差し出した。
「あの、これ、さっき作ってみたんです。木の実のスープ。明日食べられるかなと思って…」
いつの間に作っていたのだろう。
リガルナはそれを受け取り、久し振りに人の手で作られたスープに口を付けると、ふと期待に満ちた顔でこちらを見上げてくるアレアに気がついた。
「何だ？」
「あの、美味しいですか？」
「……」
そう問われたのは、もうはるか昔。まだ幼かった時に、母親がそう聞いて来た時以来だった。
思わず胸がドキリと鳴り、見上げてくるアレアから視線をそらす。
「……あぁ、そうだな」
「良かった…」

安堵したように微笑み嬉しそうに前を向いたアレアに、リガルナは視線を戻した。

第二章：安息

何気ないこんな会話でも、久し振りに感じる安息感。そして穏やかな時間。懐かしいようで、その裏側ではこの時が崩れることに恐怖している自分の姿が、やけに滑稽に見える。

アレアはそんなリガルナに気付くことなく、真っ直ぐに前を向いたまま静かに口を開いた。

「空は、満点の星空…ですか？」

「……？」

「空気の温度で分かるんです。あぁ、今は夜なんだなって。でも、私にはこの空にあるという星を見ることは出来ないから、想像するんです。小さな灯りが沢山散りばめられていて、一つ一つが尊い光で、色んな色があって…。宝石みたいだって人は言うけれど、その宝石さえも、私にはどんなに綺麗なのか分からない」

「……」

アレアはくるりとリガルナの方へ顔を向けると、真剣な表情で問いかけてきた。

「だから教えて下さい。空は…満点の星空ですか？」

「…あぁ。鬱陶しいほど、沢山の星が散りばめられている…」

何度か躊躇したが、リガルナは思っていた言葉をそのまま口にした。するとアレアはリガルナの言い方に、クスクスと笑い出す。

「鬱陶しいだなんて…。でも、きっと綺麗なんですよね」

「……そうかもな」

アレアは空を見上げていた視線を下げると、小さく口元に笑みをこぼしたまま、どこか寂しそうに足で地面をいじり始める。それに気づいたリガルナが不思議そうな目を向けると、視線を感じたアレアはポツリと呟いた。

「…目が見えたら、どんなに素晴らしいんでしょうね…」

「……」

アレアは下げていた視線を上げ、何も映らない目で夜の闇をじっと見つめる。
その表情は先程までの元気が嘘のように影を落とし、暗く寂しい顔をしていた。
「…私、生れつき目が見えない上に心臓にも疾患があって、体が弱かったから…なんかこの今の人生半分以上損してるのかなって思う時があるんです」
「……」
何の言葉をかける事もなく、リガルナはそんなアレアから視線を逸らしふっと空を仰ぐ。
この山の遙か裾野の方にある小さな街の明かりがあるだけで、それ以外は真っ暗な闇同然。チカチカと瞬く星星の明かりを邪魔するものはなく、その存在をしっかりと空一面に表していた。
真っ暗な夜空に敷き詰められたタイルのように、無数に広がる満点の星空…。この空を、アレアに見せることが出来たら…。
ふとそう頭の片隅に思い浮かべたが、考え直すかのように視線を下げる。
「……！」
視線を下げた視界の端に映ったアレアに、リガルナは焦りの色を見せた。
先程まで普通に話していたはずのアレアが、苦しそうに胸元を押さえ青ざめた顔でその場にしゃがみこんでいた。
「どうした？」
岩の上から降りたリガルナがアレアの前にしゃがみこむと、アレアは青ざめた顔をしているのにも関わらず笑みを零しながら僅かに顔を上げた。
「…ここ…しばら、く、こんなこと…なかった、のに…」
胸元をきつく握り込み、荒々しくも苦しげに息を吐きながらきつく瞼を閉じ、起き上ていられないほどの突然の発作にその場に崩れ落ちる。前のめりに倒れこみ、アレアの体はリガルナの体に寄り沿

うような形になる。
「ふっ…く…うぅぅ…」
冷や汗が流れ落ち、指先から血の気が引いていくのが分かった。
「しっかりしろ」
リガルナがそう声をかけるが早いか、アレアはふっと意識を失くしてしまった…。

第二章：安息

ピタン、ピタン、と水の落ちる音が響く。
岩の上に寝かされていたアレアは、不意に意識を取り戻しゆっくりとその瞼を押し開いた。
意識が戻り、その耳に聞こえてくるのは水の落ちる音と、風の音。そして遠く入り口の辺りでは雨が降り出したのかサァサァと言う水の流れる音が微かに聞こえてきた。
アレアはゆっくりと体を起こすと、自分の傍に誰もいない事に気がついた。
「…リガルナさん…」
小さな声でリガルナの名を呼ぶが、返事はない。
発作を起こしたせいか、傍にリガルナがいない事で急に心細さを覚えたアレアは一瞬泣きそうな顔を浮かべる。
ふとアレアはリガルナがこんな雨の時でも洞窟の中に入らず、近くの巨木のウロで雨を凌いでいる事を思い出し慌てて起き上がり、洞窟の外へと向かって歩き出した。
外はやはり雨だった。にわか雨と言うレベルの雨ではなく、普通にビショビショになるほどの雨。まだ夜深く、辺りは真っ暗で、洞窟の入口近くにある崖がどこから始まっているのかも分からないほど暗い。
「リガルナさん…。リガルナさん！」
洞窟の入口でリガルナの名を呼ぶアレアだったが、雨脚は更に強まり雨の音でアレアの声は掻き消される。
満点の星空が広がっていたはずなのにこんな酷い雨が降るなんて…。
急激に寂しさを覚え、アレアの頬に涙が伝い落ちた。
これじゃあまるで、寝起きに母親の姿が見えずに泣き出す小さな子供と同じだと、そう思いながらも涙が止まらなかった。

「……お前…」
洞窟まで戻ってきたリガルナが泣いていたアレアを、驚いたように見た。
「リガルナさん！？」
「……！」
リガルナの声が聞こえた瞬間、アレアは弾かれたようにその場から駆け出しリガルナに抱きついた。
「良かった…」
全身ずぶ濡れになって戻ってきたリガルナにアレアは安堵した顔でしっかりと抱きつく。
リガルナはそんなアレアの肩を軽く押すと、アレアは困ったような表情を浮かべる。
「離れろ。濡れる…」
「いいんです。私、こうしていたい…」
「……」
リガルナの胸元に顔を埋めるようにしてしっかりと抱きついて離れないアレアに、リガルナは困惑していた。
手に持っていた明日の分の食料もそのままに、寄り添ってくるアレアをそれ以上突き離すことも出来ず、リガルナは静かに立っていた。
こんな時、どうしたら…。
戸惑っているリガルナをよそに、アレアはきつくリガルナの体にすがるようにして抱きついてくる。
「不安…なんです。私、凄く不安なんです…。一人が怖い…」
「……」
「一人で死ぬのは怖いんです…」
そう言いながら服を強く掴むアレアのその言葉に、リガルナは言葉を失った。
アレアは何かを予期している。誰にも分からない何か。それはきっと本人にしか分からないもの…。

視線を落とし、覗き込むようにしてアレアを見ればいつかのように顔色が悪い。眠っても、血色は悪いままだった。
「せめて、この温かさを感じる場所で逝けたら…」
思わずその体を抱き寄せようと無意識にも動いていた手だったが、抱き寄せられずにいた。
この手はもう多くの血に染め上がり、誰かを抱き寄せるためにある手ではない…。
「……」
ギュッとさ迷っていた手を握り締め、瞼を閉じる。
どんな言葉をかけていいのかも分からず、ただ外の雨音だけを耳に受けて立っていた。

第二章：安息

「おいおい、何なんだよこの雨は！」
苛立った口調で、濃い霧に包まれた道のりを歩く数人の男たちがいた。
「本当だったらもうとっくの昔に街に着いてるはずだろ。道を間違えやがって…」
文句を言わずにはおられないのだろう。3人の男たちもまた前を一人歩く男のその言葉に苛立った様子で睨んでいる。
「サルダン。仕方がないだろう。こんな雨が降るなんて、神でもなけりゃわかるはずがない」
「あぁあぁ、そうだろうよ。もうそんな台詞は聞き飽きたぜ。とにかく街はまだなのかよ！」
まるで人の話など聞き入れる様子もないかのように、サルダンと呼ばれた男は前を歩いていた。
その行動に、後をついて歩いていた男たちは俄に舌打ちを零す。しかしそれは雨の音に掻き消されサルダンの耳に届くことはない。
「あんなヤツ、さっさとくたばっちまえばいいのに…」
3人の内の一人がボソリと呟くがやはりそれもサルダンの耳には入らない。だが、隣を歩いていた男の耳には聞こえた。
「おい。この先は確か死山と呼ばれる山があったな？」
その問い掛けにもう一人の男がチラリと視線を合わせると、誰からともなくニヤリとほくそえむ。
3人の男たちは視線だけで一致したある提案を実行に移すことにした。
「おい、サルダン。この先に険しい山があるんだがな。その山を越えた先に街がある」
大きな声でサルダンにそう声を掛けると、サルダンはうんざりしたような顔で後ろを振り返った。

「あぁ？　山を越えるだ？　その前に街があるはずだっただろうが」
「悪い。道を見失っちまって…。もうだいぶ来ちまったみたいなんだ。今引き返すよりも山を越えた先の街に行った方が近いんだよ」
その言葉にサルダンは露骨に舌打ちをして男たちを睨みつけると、プイッと前を向いた。
「ったく、使えない奴らだぜ。わぁったよ！　山を越えりゃいいんだろ、山を。今度はしっかり歩けよな」
サルダンはブチブチと文句を言い、土砂降りの雨に冷えた体を抱きすくめている。
まんまと男たちの作戦にかかったサルダンはまるで疑う余地もなく真っ直ぐに死山目指し歩を進めた。
このまま死山に向かえば、この濃い霧に土砂降りの雨。遭難することは間違いが無い。男たちはサルダンを死山に追いやり、そのまま遭難させてしまおうと言う魂胆だった。
『あまり度が過ぎるようであれば捨て置け。あれはここへ戻っても文句ばかりで役に立たんからな』
そう言ったグルータスの言葉通り、男たちはサルダンを捨て置いていく作戦に出たのだ。
濃い霧の先に歩いて行き、姿がすっかり見えなくなってしまったサルダンを見送りながら男たちはほくそえんでいた。

第二章：安息

「目が見えたら、どんなにか素晴らしいんでしょうね…」
何度となく呟いていたアレアのその言葉がやたらとリガルナの耳について仕方がない。
チラリと横をみやれば、スヤスヤと寝息を立てて眠るアレアの顔が映る。顔色が悪いのは雨に打たれたからか、突発的に起こした発作のせいなのだろう。
アレアの傍にこうしてリガルナがいるのは、アレアがリガルナの服の裾を掴んだまま離さずにいるからだ。
振りほどく事も出来た。でも、リガルナはそれをしなかった。ただ隣で安心したように眠るアレアをじっと見つめていると、自分の心も穏やかでいられる。
ふと、リガルナは自分の手のひらを見つめると何事か考え込んでいた。
幼い頃から何も目に映らないと言うアレアの瞳…。先天性の物であって薬でどうにかなるものではない。手術をしても見える確率は皆無に等しい。だとすれば、魔法は…？
ぎゅっと手を握り、もう一度アレアに視線を向けた。
彼女に、自分の姿を見られるのが怖い。恐怖におののかれるその姿を見るのが、怖い…。
だが、もともと体が強い方ではないアレアは、しばらく標高の高いこの山に住むことで少しずつ体力を消耗している事にリガルナは気づいていた。
もしかすると、この先長くは持たないかも知れない…。そう考えると一生に一度、ほんの瞬間的にでも当たり前のように見える世界を見せてやれたら…。そう思う方が強かった。
リガルナはしばらくアレアを見つめていたが、覚悟を決めると一か八かの賭けに出てみる事にした。

ゆっくりと伸ばされたリガルナの大きな手がアレアの目元を覆い隠すようにかぶせられる。するとアレアはその気配に気がつき目を覚ました。
「…リガルナさん…？」
「……静かにしてろ」
何をしようとしているのか、理解できないままアレアはリガルナに言われるがまま静かにしていた。
やがて、アレアの目の周りにほんのりと熱が帯びそれはやがて熱く感じるほどにまでなる。そして目元を熱くしているその熱はやがて体全体を温め始め、アレアの顔色が俄に良くなって行った。
どれくらいの時間そうしていただろう。外で降り続く雨の音を耳に受けながら言葉もなく静かな時を過ごしていた二人の間に会話が戻ったのは、かなりの時間が経ってからだった。
アレアの目元にかぶせられていた手がすぅっと離れると同時に、リガルナが声を掛ける。
「これは一か八かの賭けだ。保証はない」
「え？」
意味が分からず閉じていた目を開こうとしたアレアを、リガルナはすかさず止めた。
「待て。…一つ、俺から言わせてもらう事がある」
「…何ですか？」
「もし、今から見えたものがあったとしたら、それは俺の真実の全てだ」
真剣な声で話すリガルナに、アレアは小さく笑い声をたてた。
「どうしたんですか？　私、目は見えませんよ？」
「もしもの話だ。たとえお前の目に何が映っても、驚かないで欲しい」
「……はい。分かりました」
「……ゆっくり、開けてみろ」
リガルナに促され、アレアはゆっくりと瞼を持ち上げる。ゆっく

り、慎重に瞼を押し開くがそこに広がるのは相変わらずの闇。瞬きを繰り返し、そしてアレアはリガルナの方を振り返りながらその体を起こして小さく微笑んだ。
「私の目には何も映りませんよ。でも、リガルナさんは何かを私にしてくれたんですね。ありがとうございます」
「……いや」
淡い期待もどこかに抱いていたが、やはり魔法が効くはずもない。
リガルナは小さく溜息を吐き、目の前のアレアからふっと顔をそらしたその瞬間だった。
「あっ…」
アレアは小さく声を上げ、リガルナの方を見たまま心底驚いたような顔を浮かべていた。
リガルナはアレアを振り返ると、アレアは自分の目元を微かに震える手で押さえていた。
「…な、に…？　これは…」
「……どうした？」
リガルナが声をかけると同時に、アレアの目がパッとリガルナの目を捉えていた。そして食い入るようにじっと見つめてくるアレアの瞳が微かに揺れ、ポロッと涙が伝い落ちる。
「嘘…でしょ？　こんなの…」
「……」
「見える…見えるの…目が、目が見えるの…」
アレアはポロポロと零れ落ちる涙もそのままになんの躊躇いもなくスゥっと両手を伸ばし、これまでリガルナに触れた時のように探るような動きを見せず迷うこともなくリガルナの頬に触れてきた。

第二章：安息

「リガルナさん…これが、リガルナさん…」
「……本当に、見えるの…か…？」
試していながら、まさか本当に見えるようになると思っていなかったリガルナは、俄に驚いた顔をしてそう聞き返すとアレアは嬉しそうにニッコリと微笑み、そして勢い良くリガルナに抱きついた。
「そう…そうだったんですね…」
「……？」
「あなたがどうしていつも寂しいオーラをまとっていたのか、やっと分かった。分かることが出来た…」
アレアはそう言いながらリガルナの胸に擦り寄るように頬を寄せ、抱きつく腕に力を込める。その目には涙が一筋伝い落ちていた。
「…お、俺は…」
何かを言おうと口を開くリガルナを、アレアはゆるゆると首を振りそれを制した。
胸元にしっかりと寄り添ってくるアレアをリガルナは静かに見下ろす。
「いいんです。言わなくてもいいんです。私、あなたを知ることが出来て本当に嬉しい。嬉しいの…」
「……ア…レア…」
リガルナが自分以外の人間の名を呟いたのは、この時が久し振りだった。
自分の名を呼ばれたアレアは閉じていた瞳を開き、寄りそう胸元から顔を上げてリガルナを真っ直ぐに見上げる。
「はい…」
心底嬉しそうに、その顔には満面の笑みを浮かべるその表情は、とても15歳の少女のものではなかった。辛い過去を背負い、生きてきた人間だけが見せることの出来る大人の表情そのものだった。

「俺が…怖くないのか…」
リガルナがそう聞き返せば、アレアはただ涙を流しながら微笑んだ。
「どうして？　皆がそう言うから？　私、あなたのこと怖いなんて思いません。だって、あなたはこんなに優しい…」
アレアは擦り寄るようにリガルナの胸に寄り添った。その体に腕を回し、しっかりと抱きつく。
胸にぴったりと寄りそうアレアの耳には、リガルナの鼓動が聞こえる。暖かな体温を感じることが出来た。
「本当に、嬉しいんです…。ありがとう、リガルナさん…」
「……アレア…」
「こんなに嬉しい事、今まで生きてきて一度だってなかった。いつも辛くて、苦しくて、眠ったらそのまま目覚めなければいいとさえ思ってた。でも、自分を捨てないで良かった…」
キュッとリガルナの衣服を握りこむアレアの手がなぜか頼りなくて切ない。
すがり付いてくるように抱きついてくるアレアを、リガルナはどうしていいか分からなかった。この手に人を抱き寄せた事は一度も無い。それ以前に、人を殺す為だけにあった武器とも言える血塗られたこの手で、人を抱き寄せてもいいのかと迷っていると言った方が正しいかもしれない…。
こんなにも優しい時間を過ごしたのは、もう薄れかけた記憶の遥か彼方にある程度だ。
それを察したのか、アレアは静かに口を開いた。
「抱きしめて下さい…」
「……」
「私を、抱きしめて下さい…」
抱きついたまま顔を上げたアレアの目は、涙に揺れている。懇願するかのようなその眼差しにリガルナは言葉を忘れた。
言われるままに動かしたリガルナのぎこちない手は、一度そっと

アレアの肩に触れ、肩を滑るように回された。そしてそのまま、触れているのかいないのか分からない程度にアレアの体をそっと抱いた。
アレアはそれに反応するかのようにリガルナに回した腕に力を込める。
「もっと強く抱きしめて…」
リガルナの胸元に顔を埋め、懇願するようにアレアは言葉を漏らす。
リガルナは言われるままにアレアを抱きしめる腕に力を込めた。折れそうなほどに細いその体を強く抱き寄せるとアレアは一瞬息を詰まらせたが、じっと瞳を閉じたままその腕の力強さを体全体に感じていた。
「……嬉しい…」
「……」
「私…、リガルナさんに何もしてあげられない。それが、悔しいんです…」
「……アレア」
「こんなに素敵な時間をくれたのに…。貰うばっかりで、何もあげられないのが悔しい…」
アレアは切ない声を漏らし、涙を零す。
リガルナは抱き寄せた腕に更に力がこもった。ふとその時、アレアは小さくむせこみやんわりとリガルナの体を押し返して体を離した。
「ごめんなさい…」
「……謝る必要なんてない」
アレアは首をゆるゆると横に振り、涙を零した。
「ごめんなさい…」
「……アレア…」
俯いていたアレアは、膝の上に置いていた手をゆっくりと持ち上げると自分の髪を縛っていた黒いリボンを振りほどいた。父と母に

対する自分にできる精一杯の弔いのつもりで、両親が死んだ日からずっと身につけていたそのリボンを手に、アレアはそれをリガルナの額に巻きつける。
「私にあげられるものは、これっぽっち…。だからせめてその傷を、隠して…」
リガルナの瞼の上にあった大きな傷は、あの日火事で受けた時の傷。その傷を隠す為にアレアはそのリボンをリガルナの額に巻きつけたのだ。
「愛されないのは、辛いから…」
「……っ」
傷を見て、アレアが小さく呟いたその一言が酷くリガルナの胸を貫いた。
この瞬間、それだけの事で全てを知ったかのようなアレアの言葉がリガルナの胸を震わせる。
リガルナの無意識に伸びた手がアレアの頬に触れた。アレアが閉じていた瞳をゆっくりと開き真っ直ぐにリガルナを見上げると同時に、リガルナはアレアに口づけていた。
付けられた傷を舐めあうのじゃない。だが、同じように愛された記憶が皆無に等しい者同士、どうしても惹かれずにはおれなかった。
アレアはリガルナのそのキスを素直に受け止める。アレアのそろそろと伸ばされた腕はリガルナの胸元の衣服を掴みとった。
「リガルナさん…。大好き…」
唇が離れて微かに漏れたアレアの言葉は、リガルナの耳と胸に残る。
リガルナはそれに応えるように、アレアの体を抱き寄せた。

第二章：安息

雨は止まない。より一層激しさを増し、歩くことさえままならないほどだ。

山を登っていたサルダンはズシャリと崩れるようにその場に座り込む。体全体に痛いほどの雨を受け、酷く凶暴な眼差しで霞む視界を睨みつけた。

「……っちくしょう…。あいつら、ふざけた真似しやがって…」

山を登り始めてから、サルダンは後ろを振り返って仲間がついてきている様子が無いことに気付き、そしてそこで初めて自分が騙されていた事も気がついた。

こんな雨では今更引き返すことも出来ない。どうしようもなくなったサルダンは酷く苛立っていた。

土砂降りにさっさと宿を取りたい事だけが頭にあり、仲間だった兵士たちの言葉もまともに受け止めてしまうくらい1つの事に捕らわれ、どう聞いてもおかしいこの状況に今まで気付かなかった自分に対しても腹立たしい。

ぬかるんだ道に腰を降ろしたまま、怒りに地面を思い切り叩きつけるように踏む。

「イラつく…。イラつくぜ…」

このままこの場にいても、雨に体温を奪われ死んでもおかしくない。そんなことで死んだとなれば、皆の笑いものになるだろう。

サルダンは再び腰をあげるとせめて雨をしのげる場所を探すために足を踏み出した。

降り続く土砂降りに、奪われる体温。サルダンは体をきつく抱き締め、青くなった唇と寒さから自然とガチガチと歯を噛み鳴らし始める。

「ちくしょう。休めるような穴もねぇのかよっ！」

そう漏らした時だった。視界の先にぼんやりと見えたのは、石で

造られた洞窟の入口だった。
「っち。さっさと見つかれってんだよ」
悪態を1つつきながらも、体を休める場所を見つけたと内心ホッと胸をなでおろしていた。
あの洞窟で雨をしのいで、落ち着いた頃に山を降り、仲間を見つけて殺してやろう。サルダンはそう考えていた。
泥まみれの足を踏み出しその洞窟に近づき、ようやく入り口に辿り着くとブルブルと体を打ち振るわせた。
「うう、さみぃ…」
そう言いながらサルダンは洞窟の奥へと足を進める。
「……っ！？」
「なっ…？！」
突如として入ってきたサルダンの姿に驚いたのは、他でもないアレアだった。サルダン自身もまさかここに人がいるとは思わなかっただけに、心底驚きの色を見せる。
「だ、誰…」
洞窟の中にこの時いたのはアレアだけだった。リガルナはその場にいない。
突然現れた見ず知らずの男の姿にアレアの瞳は恐怖に染まっている。その様子に驚いていたサルダンだったが、ふとアレアの衣服が俄に乱れているのを見てニヤリとほくそえむ。
心底体も冷え、苛立ちをどこにぶつけようか考えていた所だった。目の前には一人の少女が怯えてこちらを見ている…。そうなれば決まったも同然だった。
長い時間何も口にしていない苛立ちも手伝って、サルダンの目の色は尋常ではなかった。
「へぇ。こんな山の、こんな場所に女がいるなんてな…」
「……っ」
「こっちは色々腹が立ってしょうがねぇ。雨に体温を取られて寒くてたまらないんだ」

アレアは顔を強ばらせ、きつく手にしていたごわつく布を手繰り寄せる。そんなアレアの傍ににじり寄るサルダンは、ずぶ濡れになった衣服に手を掛けた。
「こんな上玉がこんなところにいるなんて思ってもみなかったから、丁度良かったぜ。俺を温めてくれよ」
「い、いや…」
首を横に振り、サルダンの申し入れを断ったアレアに対し、サルダンは大きく手を振り上げその頬を痛烈に打ち抜いた。
アレアはその衝撃に為す術も無く叩き倒されてしまう。そこを、サルダンは容赦なく伸し掛った。
「つべこべ言ってねぇで、俺の相手になれって言ってるんだよ！」
「いや、いやあぁあぁあぁっ！」
サルダンは乱暴にアレアの衣服を剥ぎ取り、白い肌に無理矢理唇を寄せた。胸を吸われ、首筋を吸われ、冷たい手で乱暴に握られる胸には痛みだけが残る。
アレアは涙をこぼし、背中這い登ってくる悪寒にきつく瞳を閉じる。
これは、叔父の家にいた時と同じ。こんな事がまた起きるとはどうして想像出来ただろう。
一方的に愛撫され、首筋にかかるサルダンの熱い息が吐き気を呼び起こした。
次の瞬間。アレアの心臓が一度大きく脈打つと槍がそこを突き抜けたかのような激しい息苦しさと痛みが駆け抜けて行く。
「うっ…！　あ…く…ぅぅ…っ！」
大きく乱れた素肌の胸に爪を立て、アレアは青ざめた顔でもがき始める。

第二章：安息

先ほどと様子が違ったアレアの姿にサルダンの手が止まり、目の前のアレアの姿を俄に驚いたような顔で見ていた。
アレアは体を丸め込み、うまく息がつげずに荒く短い呼吸を繰り返し胸を掴んでいる。
視界が霞み、意識が遠くなっていく。
そこへリガルナが外から戻ってくる。アレアの為にと取りに行っていたのは果実だった。
戻ってきたリガルナは、目の前の光景に愕然とした顔を浮かべた。アレアは青ざめた顔で横たわり、その横には見ず知らずの全身ずぶ濡れの男が一人。
サルダンは戻ってきたリガルナを見た瞬間、大きく目を見開いた。
「あ、赤き魔物っ！？」
「……っ！」
サルダンのその目は恐怖の色をちらつかせる。
リガルナはそんなサルダンに目もくれず瀕死状態のアレアの傍に駆け寄ると、アレアはリガルナの衣服を震える手で掴みながら顔をこすりつけてくる。
「…っ、くぅぅ…っ！」
「アレア…！」
名を呼ばれたアレアは遠のいていく意識と霞む視界でリガルナを見上げると、一瞬小さく微笑を見せた。
「リ…ルナ…さ…」

ごめんなさい…ありがとう…。

涙が零れ落ちる瞳が、リガルナに対しそう語っている。
アレアの肩に手を掛け、悲愴に満ちた顔でどうすることも出来な

いリガルナ。そんなリガルナの目の前で苦しさにもがき、苦悶の表情を浮かべていたアレアの衣服を握り締める手から力が抜け、それと同時にガクリと力なく頭が垂れた。
信じられなかった。そう長くないとお互いに感じていたが、まさかこんなにも早く…。
リガルナは顔を顰めギュッと目を閉じると、動かなくなったアレアの肩に額を押し付ける。
もうどんな言葉もかけられない。もっとも伝えておかなければいけなかった言葉も言えず、安息の時間も戻ってこない。
ほんの一瞬。ほんの一時だけ感じられたアレアとの結びつき。自分がアレアに惹かれ、それが人を愛すると言う事だと言うことに気付けた、本当に僅かな時間。これからもう少しの間だけでも、そんな時間が作れると思っていた。
まだ逝かないで欲しい。もう少し、共に同じ時を歩みたい。全てを見知っても尚自分を受け入れてくれた大切な人…。
アレアの死を受け入れられず、顔を伏せていたリガルナの様子を見ていたサルダンはこの場から逃げ出そうとしていた。だが、ふと自分が投げ置いた剣が視界に入るとそちらに視線を巡らせる。そしてふと思い立った。
今こんなに油断しているリガルナを今自分の手で殺せば、あのセトンヌの地位を奪い取り自分の将来は約束されたも同然だと。
サルダンは引き攣りながらもニヤリとほくそえみ、そろそろと剣に手を伸ばして拾い上げた。
スラリと鞘から剣を抜き取り、ゆっくりと背後に迫ったサルダン。しかしリガルナは動こうとしなかった。
サルダンは両手で剣の柄を握り、それを大きく振り上げる。
「死ね！」
手にした剣を全身の力を込めて振り下ろす。その瞬間。気付けば手首から先が消えていた。
「っ！？」

一瞬の事に、痛みも何もない。我が目を疑ったサルダンだったが手首からボタボタと流れ落ちる大量の血を見て恐怖におののいた。
「ひ、ひぃぃっ！」
ズサッとその場にヘタり込み、手のない腕を振り上げてわめき始める。
そんなサルダンを背に、リガルナはユラリ…と音もなくその場から立ち上がった。
顔は下を向き、抑揚のないその背中からはただならぬ殺気が隠すことなく溢れている。
「……」
リガルナはゆっくりとその顔を上げ、背後にいるサルダンに視線を投げかけた。その目は、アレアと出会う前の殺人鬼としてのリガルナの眼差しに戻っている。
酷く冷徹で、情け容赦の無い射抜くような鋭い眼光。その目には理性はなく、ただ目の前の者を消し去る事だけを考えていた。
サルダンはそんなリガルナに更に恐怖し、その場から逃げ出そうとするが腰が抜けて言う事を利かない。
リガルナはサルダンを睨みつけ、キュッと目を細めた。そしてスゥっと引き上げた手のひらをサルダンの顔に向けると冷たい笑みを零す。
ふと、その眼差しがあるものを捉えた。それは、サルダンの剣の鞘についていた小さな紋章。
その紋章に覚えのあったリガルナの表情がピクリと動く。
レグリアナ…。裏切り者の住む国、裏切られた国…。全てを奪うためにこうなる事を予測しての、これはあの女の差金か…？
やはり、人間など…。
「…死ぬのはお前だ」
くっと笑ったリガルナの顔を見た瞬間サルダンの頭部は吹き飛び、洞窟内は血しぶきが飛び散り血塗られた。
返り血を浴び、サルダンの首と手のない胴体だけがその場にグシ

ャリと崩れ落ちる様を見たリガルナは、くっくと肩を震わせ笑い出す。

もう何もない…。

もう、人間など…必要ない…。

悲しみに心を完全に閉ざしたリガルナは、ザリっと地面を踏みしめ洞窟から出て行く。奪われた物の大きさは量り知れず、リガルナは暴走を始めた。

第三章：暴走

血に染まったかのような、赤く不気味な満月。冷たい雨の混じった強い風が吹き、一層不気味さを漂わせていた。
「…リガルナ…」
胸騒ぎが止められず、真夜中にベッドを抜け出して窓から外を見つめていたマーナリアは、胸元を押さえたまま不安げにリガルナの名を小声で呟いた。
何か、良くないことが起きようとしている。今までのような生半可な事ではなく、もっと冷酷でもっと残酷な何か…。
ぎゅっと手を握り締めマーナリアは瞳を閉じて顔を伏せた。
どうか、どうかこの胸騒ぎが気のせいであるように…。そう願いを込めて。
そんなマーナリアの後ろから、小刻みに震えているその体を優しく抱きすくめる腕が伸びてくる。
「セトンヌ…」
背中から抱き寄せられ、月灯りの下に浮かび上がる白いマーナリアの首筋にセトンヌは唇を寄せた。
「眠れませんか…？」
「……えぇ。胸騒ぎがするんです…」
「奴の事で、ですか…？」
マーナリアは再び瞼を伏せ、小さく頷いた。
「何か、良くない事が起きる前触れではないかと…」
「近頃、赤き魔物は何の動きもない状態が続いていますからね…。いつ動き出してもおかしくはないでしょう」
「……セトンヌ…」
セトンヌを振り返ったマーナリアの唇は、それ以上の言葉を紡がせないよう深く塞がれた。
「…心配いりません。私が、必ず奴を仕留めてみせます…」

唇が離れた瞬間、そう答えるセトンヌの言葉にマーナリアの胸は痛んだ。
どうして同じ人間でありながら殺しあわなければならないのか…。
その時、トントンとドアがノックされどこか緊迫感のある声が掛けられた。
「お休みのところ失礼いたします。セトンヌ様、エレニア様がお呼びです」
「…分かった。すぐに向かう」
短く返事を返したセトンヌは、すぐさま近くにおいてあった軍服に袖を通し始める。その姿を不安げに見つめていたマーナリアの視線に、セトンヌはきちんと格好を整えると再びキスを送る。
「行って参ります」
「……えぇ…」
セトンヌは部屋を出るとすぐにエレニアの待つ会議室へと足を向けた。
扉開き、中に入るとやや青ざめた険しい表情のエレニアとグルータス、そして数人の兵士たちの視線がこちらに向けられた。
「エレニア様。お呼びでしょうか？」
「とんでもない事が起きたぞ。セトンヌ…」
「とんでもないこと…？」
「奴の暴走が始まった。この夜の間にかなりの速度で次から次へと街や村が消失しておる」
「！」
エレニアの言葉に、セトンヌの表情が固くなった。
「エレニア様！　トルタン大陸の街、村の半分が消失しています！今だその暴走は止まらず、現在も尚次々に消されています！」
リガルナが住処にしていたのは、レグリアナ大陸から東に海を渡ったトルタン大陸。そのトルタン大陸の半数の村や街が一気に消失したなど考えられない。だが、実際にそれは起きていた。
新たに入った情報に、エレニアはすっかり頭を抱え込んでしまっ

た。
　このままでは、この国に危害が及ぶのも現実味を帯びて時間の問題だ…。そう思った瞬間、エレニアは弾かれるように顔を上げた。
「セトンヌ。すぐにトルタン大陸へ向かうのだ。そしてランダモーネ王国に向かい、せめてランダモーネだけでも何としてでも守れ」
　ランダモーネ王国とは、このレグリアナ王国の第二都市と呼んでもいい兄弟国家だった。この国の王は他ならぬエレニアの実兄。
　唐突なその命令ではあったが、セトンヌにはすでに心の準備が出来ていたのだろう。真っ直ぐにエレニアを見つめ返し、その命令を受諾した。
「かしこまりました。直ちにトルタン大陸のランダモーネへと向かいます」
　セトンヌは颯爽とその場を立ち去るとすぐに兵を引き連れレグリアナを出発した。

第三章：暴走

「ひ、ひぃっ！」
恐怖に歪んだ顔で、腰の抜けた男が地面に尻をこすりつけるようにしながら後ずさりをする。
暗い夜に冷たく降り注ぐ、血が塗り込められたかのような月灯りが不気味さを更に倍増させていた。
「た、助けてくれ！　頼む！」
青ざめた表情のまま、目の前にいるリガルナを恐怖の眼差しで見上げ、無駄だと知りながらも助けを乞う。だが、リガルナは冷酷できつい眼差しを男に向けたままたった一言も発することなく追い詰めるかのようにジリジリと男に迫った。
「な、何でもする！　だから命だけは…！」
「…黙れ」
唸るように一言呟いたリガルナは、スッと手のひらを男の顔面に突きつける。
目をきゅっと細め、口元で俄にほくそ笑むと同時にリガルナの手のひらには重力が集まり次の瞬間にはそれが爆発した。
ドォンッ！　と爆音を立て、目の前の男の頭は胴体を残して木っ端微塵に散る。
「…ふん」
ドサリ、と地面に倒れこみしばらくビクビクと動いていた男の体は次第に動かなくなってしまった。
リガルナはその遺体に背を向けると風を呼んだ。音もなく、フワっとリガルナの足元が浮かび上がりスーっと空高く舞い上がる。
あちらこちらから火の手が上がり、街の至る所に死体の山が転がっている。その光景はまるで地獄絵図のよう。
リガルナはくっと意地悪くほくそ笑むと、その手に印を結び呪文を唱える。その瞬間ゴゥッ！　と唸りを上げ風が強く吹き荒れ竜巻

が巻き起こった。
火の粉と共に渦巻く巨大な竜巻は人々の遺体と、そして瓦礫を巻き上げ意志を持っているかのような動きを見せてうねりながら街の中を暴走した。
「…くっ…くくく…」
目の前でめちゃくちゃになっていく光景を見つめながら、リガルナはこみ上げる笑いを堪えきれずにいた。
ひとしきり街の中を破壊した竜巻は、リガルナがパチンと指を鳴らすと突如としてフッとその存在を消す。
街があったと言う痕跡だけを残し、家も何もない広い空き地と化した土地の中心に舞い降りてきたリガルナ、ただ静かに、満足そうにほくそえんでいた。
「人間など、ひ弱なものだ…」
ザリッと地面を踏みしめ立ち去ろうとしたリガルナの視界の端に、瓦礫と土に埋もれ、竜巻に巻き込まれなかった人間の手が地面から突き出ているのを見つけた。
リガルナは冷たくそれを睨みつけ、フンと鼻を鳴らし笑うと、フイッと背を向けてその場から立ち去っていった。

リガルナの暴走は止まらない。
見つけ次第、手当たり次第街や村、国までも消滅させていく。
セトンヌがエレニアの命を受けランダモーネに辿り着くまでの2週間の間にトルタン大陸に存在していた村も街も、皆無に等しいほど何もなくなっていた。
そして今、暗い夜の闇に紛れ満月を背に眼下に広がるランダモーネの城の上空にリガルナはいた。
「赤き魔物です！」
見張り塔の上にいた兵士が、上空にいてこちらを睨み下ろしているリガルナの存在に気付き慌てて警鐘を鳴らした。その警鐘の音に城は一斉に慌しくなり、皆の表情に緊張の色が走る。

「シーマク王、ここは一度避難された方が良いでしょう。あの赤き魔物相手では何があるかわかりません」
ランダモーネ王国国王であるシーマクは、すでに城にてリガルナを迎え撃つために待機していたセトンヌにそう促され、大きく頷いた。
「わかった。セトンヌ、頼んだぞ。ここの兵の指揮は全てそなたに任せる」
「御意」
数人の召使いと兵士に付き添われ、シーマクは部屋を後にした。
シーマクが部屋を出たことを確認すると、セトンヌはすぐに城の屋上に向かう。
長い間恨み続けた赤き魔物が目の前にいる。エレニアからの命ももちろんあるが、それ以上にやっとの事でリガルナを消すことが出来る事がセトンヌの気持ちを急き立てた。
屋上に上がると、大きな赤い満月の中心でこちらを見ているリガルナの姿がある。セトンヌはその姿を見た瞬間ニッとほくそ笑んだ。
「ようやく決着がつけられるな…リガルナ…」
セトンヌは脇に携えていた剣の柄を握り締め、月光にキラリと光る剣を引き抜いた。
それを見ていたリガルナの表情がピクリと動く。
遥か昔に一度だけ出会っただけの人間の姿がある。忘れることなど出来ないほどに強烈な憎悪を向けてきた、セトンヌの姿…。
その姿を見つけた瞬間、リガルナもまたニィッと不気味にほくそ笑んだ。
やはり偽善者ぶったあの女の差金か…。
目をキュッと細め、ほくそ笑んでいた顔を真顔に変えてセトンヌを睨み下ろす。
セトンヌとリガルナの視線がかち合う。
セトンヌは手にしていた剣の柄をきつく握り締めた。
「今こそ、家族の仇を取らせてもらうぞ…リガルナっ！」

手にしていた剣を大きく上空に振り上げ、戦闘配置についていた兵士たちに合図を送った。
「フン…。さて、どうかな…」
リガルナはすぐに印を結ぶと呪文を唱え始める。
地上にいる兵士たちは弓を突き上げ、ヒョウヒョウと音を立てながら攻撃を開始し、魔術師たちも一斉に術を発し始めた。
兵士の放った矢と魔術師達の発動した術が一斉にリガルナに襲いかかる。
「……」
リガルナはくっと笑うと、無数に襲いかかってくるそれらを軽やかに身を翻し全てを容易に避ける。
「手を休めるな、続けろっ！」
セトンヌの言葉がかかるよりも前に、次々と攻撃を繰り返す地上の兵士と魔術師たち。だが、どの攻撃も一向にリガルナに当たる様子がない。
チッと短くセトンヌが小さく舌打ちをするが早いか、いつのまにやら目前に現れたリガルナにギョッとした顔を浮かべる。
リガルナはセトンヌを鋭い眼光で睨みつけ、一瞬の隙をついて大きく足を振り上げセトンヌに素早く蹴りを食らわせる。
「なっ！」
セトンヌは咄嗟に剣を構え体をガードするが、リガルナの唸りを上げて飛んできた蹴りはセトンヌの右の上腕を激しく蹴り上げる。
バキィッ！　と激しい衝撃音が響き渡り、セトンヌは俄によろめくがすぐに態勢を整え手にしていた剣を横一文字に斬りつける。
リガルナはフッと消えたと表現した方が良いほどに素早くセトンヌの前から退くと、上空からセトンヌに向かい手の平を突きつけた。
「！」
ふいにセトンヌ達の足元に転がる小さな小石がカタカタと鳴り始める。
セトンヌも兵士や魔術師たちも一瞬そちらに気を取られた。そし

て次の瞬間、ドォーンッ！　と言う激しい爆音と共に地面から激しく突き上げてくる衝撃がランダモーネ全体を揺るがした。

第三章：暴走

到底立ってなどいられない程の激しい揺れは、徐々にその威力を増して行く。

セトンヌは咄嗟に地面に剣を突き立てその揺れの衝撃に備えるが、城の端からガラガラと派手な音を立てて崩れていくのを目の当たりにする。そして再びリガルナを睨み上げると、上空から冷たく見下ろすリガルナと視線がかち合った時、リガルナはニィッとほくそ笑んだ。

地上からでは、奴の攻撃に対抗できない。せめて地上に降ろすことが出来たら…。

そう考えたセトンヌは激しい揺れに足場が心もとない中、足を踏ん張り地面に突き刺した剣を引き抜くとそれを槍を持つかのように構え、力いっぱいリガルナ目がけて投げ上げた。

「……っ」

ヒュッと音を上げ空を切りながらセトンヌの剣がリガルナの頬を掠め通った。剣が再び地面に落ちていく所を、すかさずリガルナは掴み取る。

リガルナの手元に渡ったセトンヌの長剣。その長剣を手にしていたリガルナは冷ややかな視線を注ぎながら、セトンヌを見据える。

派手な音を立て端から崩れ落ちていく城の頂上で、憎々しげに睨み上げてくるセトンヌの眼差しがリガルナを苛立たせた。

安穏とした人並みの生活を送ることが出来ている、いや、それ以上の名声も栄誉もほとんどの恩恵を受けた人間に、自分の持つ苦しみなど分かるはずなど無い…。

傍に置いて置きたいと思うものは意図的に排除され、この手には何も残らない。何も…。

セトンヌを見下ろすリガルナの眼差しは冷徹だった。

人生で唯一、大切にしたいと思う儚い夢を与えてくれたアレア。

住む場所やリガルナの全てを否定し、全てを奪い去ったにも関わらずまだ根こそぎ奪って行く彼らに、今のリガルナの胸中は怒りと憎悪しかない。
彼女さえいてくれたら、もう何もいらないはずだった。全てを受け入れてくれた彼女だけが傍にいてくれたら…。
「貴様のような輩に、殺られるか！」
「……」
足場が音を立てて崩れ去るセトンヌのその言葉に、リガルナはカッと目を見開くと突如上空から急降下しセトンヌの胸ぐらを掴み上げて近くの塔の壁へと叩きつける。
「うっ！」
ガンッ！　と背中を強打し、激痛に顔を歪めたセトンヌだったが首元を絞めつけてくるリガルナの手をガッチリと掴み込んで彼を睨みつけた。
足場は、無い。いや、実際には驚異的な力で宙に掴み上げられていると言った方が正しいのだろう。
リガルナはそんなセトンヌをただ鋭い眼光で睨み返す。
昔と何ら変りない、憎悪に満ちたセトンヌの眼差しは思い出したくもない過去を思い出させる。

『次に会った時、必ずお前をこの手で殺してやる』

そう叫んでいた時の、怒りと恨みに満ちたセトンヌの目。あれから何度もその目に唸されたか分からない。
自分を嘲て、否定して、そして追いやったレグリアナ全体の仕打ちはリガルナに深い傷だけを刻む。
リガルナはギリッと手に握り締めていた剣の柄を強く握ると、それをセトンヌに突きつけた。
その目が…目障りだ…。
「…死ね」

リガルナは手にしていたセトンヌの剣を大きく振りかざし、それを勢い良く振り下ろす。セトンヌは咄嗟に瞳を閉じた。
その瞬間ドォーンッ！　と言う爆音が目の前で鳴り響き、セトンヌが目を見開くと同時にセトンヌの首元からリガルナの手が離れる。
「セトンヌ様っ！」
崩れ行く城の中を何とか切り抜けた兵士と魔術師達が、セトンヌの応援に駆けつけてくる。
セトンヌが足元に崩れたリガルナに目線だけを落とすと、ブスブスと音を立ててリガルナの背中から黒煙が上がっていた。
その姿を見たセトンヌの顔に笑みが戻る。
「…ざまはないな」
「……っ」
目の前のセトンヌに気を取られすぎた。
リガルナは背中に食らった魔法で深手を負い、思わずその場に足をついてしまった。
バタバタと走り寄ってくる数人の兵士たちの足音に、激痛が走り抜ける痛みに顔を顰めたまま舌打ちをする。
「捕らえろ。生きたまま捕獲し、国に連れて帰り皆の前で公開処刑だ」
セトンヌの命に数人の兵士がリガルナを取り押さえにかかろうとする。が、それよりも一瞬早く、リガルナの頭がスッと持ち上がった。その瞬間、ブワッ！　と突風にも似た衝撃波が沸き起こり、リガルナを取り囲んでいた兵士たちは一斉に後方へ吹き飛ばされる。
「何っ！」
周りの兵と同じようにセトンヌもまた後方へ吹き飛ばされる。そして近くに崩れ落ちていた城壁の瓦礫にガンッ！　と背中を叩きつけられ、目の前の視界が俄にブレて意識が一瞬飛ぶ。
ザッ…と地面を踏みしめる音がその直後に聞こえ、霞む視界でリガルナを見上げた。
「き、きさ…ま…」

「…お前のような人間に、俺の苦しみが分かるはずもないだろうな」
「……くっ」
リガルナはセトンヌの胸ぐらを掴み上げると、激痛に脂汗を浮かばせながらも睨みつけた。同じように睨み返してくるセトンヌに対し、リガルナは失笑する。
「消えろ」
「……っ！？」
バタタ…と二人の間に多量の血がこぼれ落ちる。二人の間には夥しい量の血の池が瞬く間に出来た。
リガルナは目を細め真っ直ぐにセトンヌを睨みつけ、そしてセトンヌは大きく目を見開いた状態で目の前のリガルナを見ていた。
体の中心を貫いたのは、セトンヌの剣ではなくリガルナの腕。鋭く突き立てたリガルナの腕がセトンヌの体を貫き、貫通していた。
「……ぐはっ！」
セトンヌは口から多量に血を吐き出し、震える手で自分の体を貫いているリガルナの腕を掴んだ。
リガルナはフン、と鼻を鳴らしほくそ笑むと鮮血をまき散らしながら勢い良く腕を引きぬく。それと同時にバシャッと血が吹き出し、体を支える力もないセトンヌの体は前のめりに崩れ落ちた。
「セ、セトンヌ様っ！」
セトンヌはその場に崩れ落ち、朦朧とする意識でリガルナを睨みつける。
リガルナは崩れ落ち、もはや自らの力で立てないセトンヌには目もくれず風を呼んで空へ舞い上がり、そして消えた。
リガルナには手を出すことが出来ないまま、目の前で一瞬にして起こった光景を愕然とした眼差しで見ていた兵士たちは、リガルナがいなくなった瞬間呪縛から解けたようにセトンヌの元に駆けつける。
「す、すぐにセトンヌ様を！」
周りに集まった兵士や魔術師達が、こぞってそう声を上げセトン

ヌの治療をする為に行動を開始する。
（マリア…）
セトンヌは薄れる意識の向こうで、マーナリアの名を呼んでいた。

第三章：暴走

チリーン…と、どこからともなく鈴の音が聞こえる。
「セトンヌ…？」
部屋にいたマーナリアが、ふと顔を上げ辺りを見回すが特別何もないように思える。だが、胸にせまるざわめきがやたらと不安を掻き立てた。
まさか、セトンヌの身に何かあったのでは…。
そう思うとおちおち部屋にいられず、マーナリアは部屋を出てエレニアのいる王の間へと向かった。
王の間にいるエレニアはグルータスと共に今後の事について話をしながら、セトンヌからの報告を待っていた。
「マリア…。どうしたのだ？」
そんな二人の元にやってきたマーナリアを不思議そうに見てきた二人に対し、マーナリアは何も言わずに視線を足元に落とした。
「マーナリア様。顔色が悪うございますぞ。お具合が悪いのでは…」
「い、いえ…」
ゆるゆるとマーナリアが首を横に振った時、兵士が一人王の間へとやってくる。
「エレニア様」
「おぉ。何か知らせは入ったか？」
「いえ、まだ連絡はありません。別件ですが、以前から追っていた強盗犯を捕らえました」
「そうか…。ひとまず牢に入れておけ。処罰は後で決める」
「了解致しました」
兵士は腰を折ると、颯爽とその場を立ち去っていった。
その兵士を見送ったマーナリアは、不安の募る胸に下唇を軽く噛んだ。
「お母様…。胸騒ぎがするのです」

「……どうしたのだ？」
「わかりません。でも、私、とても不安で…」
自分の手をきつく握り締めるマーナリアに対し、エレニアは席を立ち上がるとゆっくりとマーナリアへと歩み寄ってくる。そしてその肩を抱きしめると、元気付けるように声をかけた。
「心配なのだな？」
「……はい」
「マリア。そなたの夫になるべきセトンヌなら、大丈夫だ。この一件が片付いたら、私はそたなに王位を譲り、セトンヌとの祝儀を挙げさせるつもりだ。そなたは、セトンヌを信じて待っておれ」
「……」
マーナリアは視線を足元に下げたまま、何も言う事なくただ黙っていた。
「とにかく、部屋へ戻るが良い。連絡が入ったらそなたにも知らせよう」
エレニアに促され、マーナリアは再び自分の部屋へと戻ってきた。
不気味な程に赤い月の月明かりが、静かに部屋の中を照らしている。ランプの明かりも点けることなく、月明かりだけが降り注ぐ部屋へと戻ってきたマーナリアは扉を背にその場から動けず、そこから窓の外を見つめていた。
自分は一体どうしたらいいのだろう。ただ待っているだけでいいのだろうか…。何か他にやる事があるのではないのか…。
そう考えていると、ふいに視界の端に何かを捉えそちらを振り返った。
「！」
部屋の片隅。ぼんやりとした光りがそこにある。明かりを灯していないのだから、当然、ランプの明かりではない。その光は、マーナリアの身長よりも少し小さく、頼りない。
幽霊、と呼ぶに相応しいのであろうそれをマーナリアはただ驚いたように凝視していた。

すると、その光の中に一人の少女の姿が見えた。
肩までの髪に、やせ細った体。俯いていた視線をゆっくりと上げると、その視線は酷く悲しそうであった。
「……誰…？」
マーナリアはその少女に対し、不思議と恐怖を感じなかった。真っ直ぐにこちらを見つめてくる眼差しは、ただひたすら寂しげであり、どこか優しげだった。
マーナリアの問いかけに、その少女はすぐに応えようとはしなかったがやがてゆっくりと口を開いた。
『……助けたい…』
「…え？」
『…助けたい…』
「……どういう事…？」
『助けたいの…。彼を…』
「彼？」
『……リガルナ、さん…』
「！」
思いがけず、少女の口から出たリガルナの名にマーナリアは心底驚いたような顔を見せた。
なぜ、この少女はリガルナを知っているのだろう？
マーナリアは思わず少女の元に駆け寄るが、その瞬間にフッと目の前から消えていなくなる。
「ま、待って！」
そう声をかけても、ただむなしく自分の声が部屋に響き渡るだけだった。
『…トルタン大陸の…死山に…』
切れ切れの声で聞こえてきたのは、そう呟くような言葉だった。
少女は何かを求めている。そして少女の目的は、リガルナを助けたいと思う気持ちが強いと言うことだ。
少女の残したメッセージ。トルタン大陸の死山に何かがあるのだ

ろう。リガルナに繋がる何かが…。リガルナとあの少女を繋ぐ何かが…。

マーナリアはその後兵士を一人呼び寄せ、極秘にトルタン大陸の死山に向かうよう指示を下した。

第三章：暴走

セトンヌとの交戦で、思いがけず深手を負ったリガルナは再び死山に戻ってきていた。

ランダモーネは崩壊したが、抹消までは至らない。おそらく王も生き延び兵士や魔術師も何人かは生き残っていることだろう。自分にしては手緩いやり方で終わってしまった。

「……はぁ…はぁ…」

リガルナは背中に走り抜ける激痛に息を荒げ、苦しげに顔を顰める。

サルダンの亡骸は崖の下に捨てたが、血痕はそのままにしてある一番奥の部屋へと戻ってくると、崩れるようにその場にしゃがみこむ。

体を横たえる石に手を着き、項垂れたまま激痛に耐えていた。

リガルナがゆっくりと顔を上げると、その石の上には真っ直ぐに横たえられているアレアの姿がある。が、その体は冷たく薄い氷に包まれ、一見見は時が止まったかのように綺麗な状態で残っていた。

あれからリガルナはアレアの体を燃やすことを何度も躊躇っていた。何度自分の手元に火を呼び起こし冷たく眠るアレアにくべようと思ったか分からない。だが、結局は魂が消え、更には肉体が消える事に耐えきれず氷漬けにして手元に置いていた。

「…アレア…」

アレアの事を思えば、それは残酷であまりに悲しい事だろう。いつまでも現世に縛り付ける事になる。ただ未練がましいと言われてしまえばそうなのだろうが、リガルナはアレアが完全に自分の目で見えなくなることに酷く怯えている。

冷たい氷に包まれ、まるで眠っているかのように横たわるアレアの頬に手を伸ばし、その顔をじっと見つめた。

背中全体が焼け焦げた相当な深手。激痛は何度も意識を飛ばそう

としてくる。
「…お前が…恋しい…」
朦朧とし始める意識の中で、小さく呟いたその言葉がむなしく響き渡る。
激痛に滲む脂汗が頬を伝い落ちるのを感じながら、リガルナは意識を失った。

今ここで息絶えたなら、お前の所に逝けるのだろうか…。もしそうならそれで構わない…。現世に未練も何も無いのだから…。

そう思っていたリガルナの頬に、ふわっと暖かな風が吹き抜けた。その感触に目が覚め、閉じていた瞼を押し開く。
ゆっくりと顔を上げ辺りに視線を投げかけた時、リガルナの目が一点で動きを止めた。
リガルナの倒れていた頭元には、アレアが座り込み悲しそうにリガルナを見つめている。
「アレア…！」
『傷を…治さないんですか…？』
ふとそう問いかけられたリガルナは、見開いた瞳を力なく伏せ視線をそらした。
「俺の手は…人を殺すためにある。傷を治す力は、お前のためだけに使うものだ…」
そう言った言葉に、アレアはその口元に力なく笑みを浮かべるも寂しげに瞼を伏せてゆるゆると首を横に振る。
『……リガルナさん。生きて下さい…』
「……！」
『私、あなたの傍から離れませんから…。ずっと一緒にいますから…。だから生きる事を諦めないで下さい…』
つい今しがた、死を望んだ自分の気持ちを知ったアレアのその言葉にリガルナは驚いた表情を見せる。

「いくらお前がそれを望んだところで、どちらにしても俺に待っているのは死だけだ…」
『…悲しいことを言わないで下さい。私は、あなたに生きて欲しい…』
「……！」
ハッと意識を取り戻した。
まるで幻想に包まれていたかのような感覚に陥り、目が覚めたこの世界が現世なのかどうかさえ分からなくなる。だが、目の前に横たわる冷たいアレアの体を見た瞬間、ここが現世なのだと気がつく。
短い息を吐き、石段にもたれかかるようにして意識を失っていたリガルナは体を引き起こすと、今だ痛む傷を庇うようにしながら近くの壁にもたれかかるよう態勢を変えた。
生きていて欲しい。そう夢の中で呟いていたアレアの言葉が耳に残る。
ふぅ、と深い息を吐きながら閉じていた瞼を薄く開くと、リガルナは暗い洞窟の闇を見つめた。
生きていたところで、変わらない。俺の運命はもう決められている。子供の時に起きた、あの日の事件から自分の末路は決まっていた。
「…アレア…。お前は俺に、生きる事をどうして望むんだ…」
呟く問いかけに返事があるはずもなかった。

第三章：暴走

ボロボロに砕かれたランダモーネ城。国王、並びに兵士魔術師は過半数以上生き残っていた。
重篤な傷を負ったセトンヌを城の中でも被害の比較的少なかった部屋へ運び入れ、城の医師たちは総出を上げて治療を続けている。
「駄目だ。このままでは…」
止血を何度やっても止まらない出血。体が大きく貫通しているために塞ぎ用もない。ありったけのガーゼを使い込み、ベッドの上も下も血の海と化している。
意識のないセトンヌの体が小刻みに痙攣をし始めたのを見た医師たちの顔が益々青ざめていく。出血性ショック。
「王。セトンヌ殿はここにいては助かりません」
「転送装置を緊急解除だ。向こうに連絡を取っている時間はない。すぐに起動させ、すぐにセトンヌをレグリアナへ」
セトンヌの行方を見守っていたランダモーネ王はすぐさまそう指示を出すと、その場にいた数人の魔術師たちはその場から走り出し城の地下にある大きな転送装置の場所へと向かった。
この転送装置は、ランダモーネとレグリアナにのみ存在する巨大な機械だった。
大きな青い球体を中央に、その球体を取り巻くようにして存在している文様の書き込まれた大きなリングが数個。一目地球儀のようにも見えるが、複雑な造りのそれは地球儀のそれとは違う。
この転送装置は、数年前から使われていない。なぜなら、数年前に突如原因不明の暴走を始めた為だった。その原因は今だ解明されてはいない。
危険だと知りながらも一刻の猶予もない現状に、暴走しないことだけを祈りながら転送装置の機械を起動させる。
ブゥゥン…と、鈍く低い音を立てて起動したそれは、淡い青白い

光を放ちながら起動する。ゴゴゴ…と、球体の周りにあるリングが、各々ゆっくりとした動作で回転を始めた。
「成功してくれよ…」
そう願いを込めて、担架に乗せられたセトンヌが転送装置の中央へ運ばれてくると、等間隔に並んだ魔術師たちは両手を前に突き出して一斉に呪文の詠唱を始める。
それに併せるように、球体を取り巻くリングの回転が徐々に早まってくる。青白い光もまた徐々にその明るさを増して行き眩いほどに光り輝き始めた。
「転送っ！」
魔術師達が一斉に手のひらを額の前に重ねると、転送装置はバチバチと火花を散らしながら一際強い光を放った。
そして次の瞬間、通常の部屋の明るさに戻ったかと思うと転送装置はガラガラと音を立てて崩れ落ちる。
砂煙に視界を奪われた魔術師達だったが、その場にセトンヌがいないことを確認できると成功したと確証し安堵の色を見せた。

「エレニア様っ！　転送装置が…っ！」
突如起動し始めた転送装置に、いつも点検作業をしていたレグリアナの魔術師が慌しくエレニアの元に駆けつけてきた。
王の間にいたエレニアとグルータス、そしてマーナリアは驚いたように魔術師を見るも突如動き始めた転送装置の起動に嫌な予感を感じ、すぐさまその場所へと移動する。
「これは一体どう言う事だ？　連絡はなかったのか？」
目の前でゴゴゴと動いている転送装置の様子を見たエレニアは、視線を傍にいた魔術師に向けると、魔術師はうろたえたまま大きく頷いた。
「はい。こちらには何の連絡もありません」
「……何の連絡も寄越さずにこれが動き始めたと言う事は、もしや…」

吉報ではない。そう思った。
エレニアが苦々しい顔を浮かべている横で、マーナリアもまた不安に押し潰されそうな表情を浮かべたまま、胸元で両手を握り締めていた。
「来ますっ！」
転送術の補助を行っていた魔術師がそう声を上げると、それは大きく一度光を放ちそして瞬時に消え去った。
静かになった転送の間の中央に、セトンヌが倒れているのをすぐさま見つけたマーナリアは、その姿に青ざめ口元に手を当てた。
「セトンヌっ！！」
「すぐに医務室へ運べっ！　何としてでも騎士団長の命を救うのだっ！」
グルータスの指示に、その場にいた者たちが急ぎセトンヌを医務室へと運び込んだ。
マーナリアはその場に固まり、身動きがとれない。
酷い傷だった。もしかしたら助からないかも知れない。夥しいほどの血の量は、今も目の前に広がっている…。
それが誰の仕業であるかはもう分かりきっている事だった。
「……リガルナ…」
堪えきれず、マーナリアの頬にはボロボロと涙がこぼれ落ちていた。

第三章：暴走

どうしてこんな事に…。そんな思いがマーナリアの胸中を渦巻いている。だが、その疑問自体がもはやおかしい事だと言う事は気づいていた。

マーナリアはその場に座り込み、零れ落ちる涙を止めることが出来ずにいると、傍にいたエレニアがマーナリアの肩に手を下ろしてくる。

「何をしておるのだ。マリア。そなたはセトンヌの妻になるのだろう？　ここで泣いている暇があるなら、少しでもあやつの傍についておれ。そして神に祈るのだ」

エレニアにそう言われ腕を引き上げられると、マーナリアはエレニアと共に医務室へと向かう。

完全に入り口は閉ざされ、中では緊迫した状態が続いているのがよく分かった。

マーナリアはその部屋の前でただきつく手を握り締め、瞳を閉じ、セトンヌの無事だけを祈り続けた。

時間だけがどんどん過ぎていく。一体どれほどの時間、その場でそうしていたのか分からない。だが、緊張続きで心身共に疲れ果てぼんやりとしてしまうだけの時間はかかっていた。

ようやく開かれた医務室のドアにその場にいた全員が顔を上げ医師を振り返ると、医師は一度だけ深く頷いた。

「比較的大きな傷でしたが、魔術師達の協力もあって何とか一命は取り留めました。ですが、意識が戻るかどうかは…」

「……セトンヌ…」

マーナリアはその言葉に一度は安堵を覚えるも、すぐに口をつぐんでしまった。

医務室の奥から運ばれてきたセトンヌの顔色は悪い。あれだけの夥しい量の血が止まっている事だけが唯一の安心感を与えてくれる。

セトンヌはそのまま自室のベッドに運ばれ、それから幾日も意識を取り戻さないままマーナリアと専門医の献身的な看病だけが続けられる。
ある日、いつものように眠っているセトンヌの額の汗を柔らかなタオルで吹きながら看病をしていたマーナリアの所へ、以前極秘にトルタン大陸へ向かわせた兵士がある情報を持って帰ってきた。
マーナリアはセトンヌから少し離れた場所に兵士を呼び、そこで兵士の持ち帰った情報を聞いた。
「…女の子が？」
兵士の持ち帰った情報を聞いたマーナリアが驚いたようにそう聞き返す。
兵士が向かった死山。リガルナがねぐらとして使っていたあの山の洞窟を探し当てた兵士が中の様子を調べると、中には一人の少女が氷漬けになって眠っているのを見つけたのだという。
「はい。それから、そこでこのようなものが…」
そう言いながら兵士が布で包んである物を取り出すと、それを見たマーナリアの表情が愕然とした物に変わる。
血痕を帯びているそれは、この国の兵士が身につけている長剣。その長剣の柄にはレグリアナの紋章が刻まれ、この国に仕える兵士は必ず持っているものだったのだ。
それを手に食い入るように見つめていたマーナリアの表情は青ざめ、そして動揺している。
その時ふと、以前エレニア達の話している会話を思い出した。この国の兵士であるサルダンがトルタン大陸で起きている暴動を治めに遠征に向かわせたと。
サルダンの人柄をマーナリアも知っている。従順に上の言うことを聞くような人柄ではなく、彼はこの城の中でも何かと問題視されてきていたからだ。
ふと、長剣の鞘の隅の方に乱雑に掘り込んである文字を見つけた。良く見るとそこには「S・A・L・D・A・N」の文字が入ってい

る。
　その文字を見つけマーナリアは確信した。サルダンは、間違いなくリガルナと接触していたのだと。
「サルダンがこの現状の全ての引き金になったようですね…」
　サルダンを遠征に出した時期とリガルナが暴走を始めた時期はほぼ一致している。おそらくは何らかのきっかけでサルダンはリガルナと接触し、そしてサルダンは抹殺されたに違いない。しかし、何がきっかけでリガルナは暴走を始めたのか…？
　そこで思いついたのが、以前この部屋で会ったあの少女、アレアの事だった。
　マーナリアの目の前に現れたその少女が、氷漬けにされて眠っていると言うそのアレアなのだと、マーナリアは思った。そうとしか考えられない。彼女はリガルナの事を知っていたのだから。
　リガルナの行動が落ち着きを見せ、しばらく何事も起きなかったあの時期にリガルナは少女と出逢い生活を共にしていたのかもしれない。それが、思いもよらないサルダンの登場に全てが狂わされたとしたら…。
　マーナリアはギュッと胸を掴まれたような気持ちになった。
「氷漬けにされていたと言う、その少女は…」
「はい。無傷のまま、眠るようにしてその場に…」
「……」
　マーナリアは思いつめたように視線を足元に下げる。
　無傷…。やはり、リガルナは彼女に対して好意を持っていたことに間違いはなさそうだった。
　サルダンが本当に原因だったとするなら、自分たちは二度、彼を貶めたのと同じ意味を持つ。もともと信頼性などない自分たちの事を、リガルナが恨まないはずはないのだ。
　マーナリアの頬には、知らず知らず涙が伝い落ちていた。
　なんと言うことだろう。一度ならず二度までも彼を追いやってしまっただなんて…。

「マーナリア様…」
悲痛な表情を浮かべ、黙りこんで涙するマーナリアを兵士は心配そうに声をかけてきた。
マーナリアはリガルナを再び窮地へ追いやった罪悪感に苛まれ、悔しさに涙が止まらない。
人は誰しも、リガルナの事を恨み、恐怖し、厄介者だと思っている。だが、マーナリアにはそう思う事がどうしても出来なかった。彼を追いやった原因は自分にもあると、ただそう思い罪悪感だけに満たされるばかりだ。
もうここまで拗れ、歪み、嘘と誤解で作られたものがここまで現実になった以上どんな弁解をしようとも彼の耳にその言葉が届くことはないだろう。
マーナリアはぎゅっと両手を握りしめると、覚悟を決めたように顔を上げ兵士を真っ直ぐに見つめる。
「その少女を、ここへ連れてきて下さい。決して傷つけたりしないよう慎重にお願いします」
「は？　は、はい。かしこまりました」
「それから何度も言うようですが、この事は母にも、絶対に誰にも見つからないよう極秘に行動してください」
「御意」
兵士がそう言い頭を下げて部屋を立ち去ると、マーナリアは視線を膝の上に置かれた自分の手をじっと見つめていた。
どんな弁解も通用せず、どんな言葉も届かないと言うならば、もう行動で示すしか無い。
マーナリアは兵士を再びトルタンへ向かわせると、セトンヌの傍に戻ってくる。そして先ほどと同じようにタオルでセトンヌの顔を拭き取りながら心の中で詫びていた。
（セトンヌ…ごめんなさい。あなたの望む事とは違う事を私しようとしてる…。でも、私、そうしなければこの先もずっと後悔することになるわ…）

マーナリアは寂しげに瞼を落とし、目の前で眠るセトンヌを見つめていた。

第三章：暴走

ザーッと言う音と共に、切り立った崖の上からは勢い良く滝が流れている。その滝から少し離れた場所で、体を包帯で覆っていたリガルナが川に入ったまま動かない。

リガルナはこの数日、あの洞窟には戻っていなかった。

治癒の力を使う気はない。そうなると、洞窟の回りに薬草はほとんど生えておらず、傷をそのままにしておくのも問題がある。

その為にリガルナは薬草の多く生えそろう森の更に奥で身を潜め、体を休ませていた。

死山と謳われて草木も水も枯れ果てていると思われるこの山にも、更に奥へと進めば清い水と豊富な薬草が生えそろう場所がある。

リガルナはその薬草を煎じて薬を作り傷に塗りこんでいく。そんな作業を繰り返している内に焼け爛れた皮膚は完全ではないにしろ何とか癒えた。

スルスルと包帯を取り除くと、まだ生々しいほどの傷跡の残したやけどの跡が大きく体に刻まれている。

川の水面に映るその自分の傷を見つめていると、ふと額に巻きつけたアレアのリボンの下にある幼い頃についた傷を思い出す。

傷は引きつり、変色した皮膚。その生々しい傷跡は時折痛んだ。

「……」

水面に映る自分の姿を見たのは、もうどれぐらい振りだろう。久し振りにみる自分のその成に、リガルナは目を細め怪訝そうな表情を浮かべて視線を逸らした。

パシャ…と水辺から上がると、リガルナは傍に置いてあった衣服に着替えると何の気なしに空を見上げる。

分厚い雲に覆われて、今日は星空を眺めることが出来ない。しかし、リガルナにはその方が良かった。

星空を見ると、思い出すのはアレアの事だった。

『空は、満天の星空ですか…？』
そう訪ねてきた、心臓発作の起こる直前の言葉が耳からついて離れない。
ホウホウと鳴くふくろうの声を耳にしながら、リガルナは一点の闇を見据えているその目には、ただ寂しさの色だけが残る。
出来る事なら、傍に行きたい。アレアのいないこの場所では自分は何の意味もないただの殺し屋だ。
そう思いながらも、リガルナはもう一つやっておかなければならないことを思い出す。
この大陸にはもうほとんど人間は残っていない。何よりも、自分が一番恨みに思うあの国への復讐がまだ終わっていない…。
「それが終わるまで、俺はお前の傍に行くことが出来ない…」
リガルナはスゥッと目を閉じると風を呼んだ。地面に着いていた足がフワリと宙に舞い上がり、音もなく空高く登る。
眼下に広がる森と、その先に見えるトルタン大陸に残っている唯一の港町が目に写った。
リガルナは背後にそびえる死山に眼を向けると、キュッと目を細める。
向かうなら、空を飛ぶよりも陸から攻めたほうがいい。その方がいくらか不意打ちをかけることができるはず。
リガルナはそう考え、一度洞窟へと戻った。
洞窟の中には、相変わらずアレアが眠るようにして横たわり、いままでと何ら変わりはない。
そんなアレアの傍にリガルナは一度跪くと、一言呟いた。
「……全て終わらせに行ってくる」
全て。その全ての中に、自分の末路が含まれていることはリガルナにしか分からない。
リガルナはその場に立ち上がると、今一度アレアを見つめそして踵を返し洞窟を後にした。

第三章：暴走

「船が出るぞー！」

多くの人間を乗せた船がトルタン大陸に残された最後の港町、ローディンから出航した。

リガルナの攻撃の手から運良く免れた者、トルタン大陸にいては身の危険を感じ安心出来ない者、様々な人間を乗せた船はゆっくりと波止場を離れ海へと旅立つ。

多くの人がひしめき合いう中で、一人頭からフードを被り船の甲板の隅に座り込んでいる男がいた。

人目を忍び、顔を見られないようにじっと座り込んでいるその男は他でもない、リガルナだった。

陸路と海路を使う手段を選んだリガルナは、敢えて他の人間たちと同じように船のチケットを手に入れ船でレグリアナへ向かうことにした。

出航したのは夜半過ぎ。辺りは真っ暗で星空と月の頼りない明かりが海を照らしている。出航の際、船の上にいた多くの人間たちは皆個室へと入り、甲板にはリガルナと、船尾に一人セーラー姿の船乗りの男が立っているだけだった。

部屋に入る気はしない。今更この身を温めてくれる暖かな布団など煩わしい以外の何ものでもなかった。

フードは目深に被ったまま、船の縁に体を預けぼんやりと穏やかに揺れる船に身を任せた。

「おい、兄ちゃん。こんなところにいたら、風邪引くぜ？　部屋に戻らねぇのか？」

ふと気づくと、船尾にいたはずの船乗りの男がリガルナに声をかけてくる。

リガルナは視線を上げることなく、それでもその男の方から視線を外しながら呟いた。

「…いいんだ。放っておいてくれ」
「ふーん。まぁいいけどよ。なぁ、あんたもあの赤き魔物から逃れるためにこの船に乗ったんだろ？」
「……」
「どこの生まれなんだ？　俺はレグリアナ大陸の最北端にある小さな田舎町の出身なんだけどよ、こういっちゃ何だが、あの魔物の暴走がトルタン大陸で起きて良かったと思ってるんだ。ま、なんつうか、こんな事言うとこの大陸の人間に悪いし、大きな声じゃ言えねぇんだけどよ。でも、良くあの魔物の襲撃に生き延びることができたよな。あんたツイてるよな」
「……」
余程暇なのか、話好きと見えるこの男に、リガルナは苛立を覚えた。
煩わしい…。そう思うと同時にざわっと体がざわめくのが分かる。
悲鳴を上げる余裕など与えず、瞬殺することも出来たがリガルナはきつく拳を握り締めそれを耐えた。
今、事を荒立てるワケにはいかない。
「……気分が悪い。一人にさせてくれ」
何とかそうとだけ伝えると、無愛想なリガルナに対し男は肩をひょいとすぼめた。
この男じゃ話し相手にはならない。そう思ったのか「お大事に」と一言呟くとリガルナから離れて再び船尾に戻っていった。
浅く息を吐きながら苛立を逃し、リガルナはちらりと空を仰いだ。
（アレア…）
向こう2週間の船旅。リガルナにしてみれば気の遠くなるような長さだが、少しでもレグリアナに入国し易くするためには必要な事だった。

第三章：暴走

リガルナが船に乗り込み、トルタン大陸を離れて一週間目。セトンヌが傷に臥せって早くもひと月が経とうとする。
またも急激に騒ぎが静まったこの空白の時間を、レグリアナは恐れていた。
エレニアはひとまず兄が助かったことに関しては胸を撫で下ろしはしたものの、すぐに別の恐怖と立ち向かわなければならないことに苛立を隠しきれ無い。
「奴は何をしでかそうとしておる！　またしてもこの静寂。どうなっておるのだ！　何でも良い！　情報はないのか！」
手にした扇がへし折られてしまいそうなほど苛立っているエレニアの怒号は、このところ頻繁に起き皆が一様に怯えの色を濃くしている。
「エレニア様。落ち着いてくだされ。このような状況だからこそ冷静にならなくては、ご判断を誤りまするぞ」
「グルータス！　そなたも何をしておる！　セトンヌが倒れてこちら、騎士団を仕切るものがおらぬようになって皆バラバラ状態になっておる！　そなたも昔軍を統べた者であるなら、セトンヌに代わってきちんと指揮せいっ！」
「は、はは。申し訳ございません」
「全く、どうなっておるのだ！　こんな状況ではおちおち休んでもおられぬ！」
苛立を隠しきれ無いエレニアは一人怒号を飛ばしながらその場を立ち去っていく。その後を急ぎ召使たちが追いかけていった。
謁見の間に残ったグルータス、そして見張りの兵士たちはエレニアが立ち去っていった事に緊張の糸がぷつりと切れ大きな溜息を零す。
「困ったものだ…。エレニア様のお気持ちが分からない訳ではない

が、こうも情報がないようではこちらとしてもどう対処して良いのかさっぱりですぞ…」
薄くなり始めている頭を撫で付けながら、グルータスはため息混じりそう呟いた。
「グルータス様」
どうしたものかと困り果てているグルータスの元に、兵士が一人駆けこんできた。
その兵士の様子に、グルータスの表情が俄に期待した色を見せたが、その報告を聞くやすぐ憮然とした表情に変わってしまう。
それは、ここ数年指名手配されていた男と思われる人物を見つけたと言う報告だ。
「あぁ、そんなものはこちらに報告せずとも構わん。確信が持てたのであれば早々に捕らえ牢にでも放り込んでおけ。処理は追ってすればよい。とにかく今はそんなことに気を取られておる場合ではないのだ」
ヒラヒラと厄介払いでもするかのように手のひらをひらめかせて兵士を追いやり、グルータスは一人腕を組んで困り果てていた。
蔑ろに扱っているこの指名手配になっている男が、これからの全ての判断を鈍らせる物を握っているなど、現時点で誰も露程も思わなかった。

第三章：暴走

夜。

静まり返った城下に、チカチカと店先に出ているランプが瞬く少々古ぼけた酒場がある。

酒場はあまり人の入りが良いとは言えず、また、中にいる人間の人相もそう良いと言えるものではない。

そんな酒場の、無愛想な顔で黙々とグラスを磨いているバーテンダーのいるカウンターの隅で、男が一人酒を浴びるように飲んでいた。

「おい、もう一本くれや」

ダンッ！　とカウンターにテキーラの入っていた空のボトルを叩き割る勢いで置くと、ギョロリとした目でバーテンダーを睨みつける。

「だったら先に金をよこすんだな」

その男の形相に驚く様子もなく、バーテンダーはそう言い返すと男は露骨な舌打ちをする。

「っち。いい度胸してやがるぜ。おら、持ってけばいいだろ！」

ジャラーッ！　と叩きつけるようにしてカウンターに置いた金は派手な音を立てて転がり、床の上にもばらまけた。

それらをチラッと見たバーテンダーはまたしても冷たく野太い声で口を開く。

「おいおい、グレンデルさんよ。そんなんで足りるとでも思ってるのか？」

テキーラ一本どころか、一杯すら飲めないほどの細かい金に、こんな金では酒を出さないと言ったバーテンダーに対し、グレンデルと呼ばれた男はガターン！　と乱暴に椅子から立ち上がると怒りに任せてカウンターを蹴りつけた。

「うっせぇ！　分かったよ。今から調達してくるから、用意して待

ってろ！」
酒に酔っ払い、赤ら顔の虚ろな眼差しでグレンデルは店を荒々しく出ると静かな街をギョロギョロと眺め回す。
表通りは目立って仕方がない。狙うなら裏通りの家だ。
グレンデルは口の端を引き上げ不気味にほくそ笑むと、ポケットに両手を入れて千鳥足で街の裏通りを目指して歩き始めた。
時折目の前を横切ろうとする猫を、鬱陶しそうに蹴り上げる。
「ギニャッ！」
と、奇妙な声を上げて街の暗がりに蹴り飛ばされた猫を眺めては、短く笑い飛ばしていた。
ふらふらっと細い裏路地に入り、忍び込めそうな家を物色しにかかった。が、なかなかどこもしっかりと戸締りをしていて入り込めそうな家がない。
夜道を歩きながら、グレンデルは大袈裟なほど大きな舌打ちをする。
近頃は、赤き魔物の話が広がっているせいもあってどこも戸締まりに抜け目がない。
「っけ。赤き魔物の手にかかりゃ、戸締りしてる家だろうが何だろうが関係ねぇってんだ」
悪態をつきながらもフラフラ歩くグレンデルは、その日飲める酒さえあれば他に何も必要ないと思っていた。
廃れた自分の人生を嘆くこともなく、ただ自分の思うままにやりたいことをやって生きているグレンデルは、人から金を奪い、下手をすれば人を殺めて廻っている事から、ここ数年ほど前よりレグリアナ内で厄介者の指名手配犯として狙われている。
グレンデルは虚ろな眼差しをギョロつかせ、ふと、ある通りを横にそれた時だった。
今ではもう何も無いただの空き地になっている場所を見つけ、ふと思い出すことがあった。
「あー、確かここは美人のネェちゃんが住んでた場所だったっけか

なぁ。確か…レック家だったかな」
　そんな事を言いながら何かを思い出したのか、その空き地の前で足を止め一人下卑た笑いを浮かべる。
「なかなか気の強いネェちゃんだったな。俺の言う事を聞かねぇからイラついて家ごと燃やしてやったんだ。懐かしいな」
　などと呟きながらグレンデルはその空き地の前を通りすぎていった。
「この家の長男は今じゃ王宮の騎士団長様だってんだから、世の中分かんねぇもんだぜ」
「待てっ！　グレンデル！」
　ぶつぶつと呟きながら次の角を右にそれようとした時、背後からグレンデルの後を付いてきていたレグリアナの兵士が突如掴みかかってくる。
「なっ！？」
　グレンデルは咄嗟の事に大きな目を更に大きく見開き、咄嗟にその場から逃げ出そうと走りだすが酒が回りすぎていて足がもつれ、自分の足に躓いてその場に派手に転んでしまう。
　そこをレグリアナ兵はすかさず身動きがとれない様に上から押さえつけてグレンデルを捕獲した。
「やっと捕まえたぞ。グレンデル！　これまでの所業を後悔するんだな！」
「くそっ！　離せ！」
　体をゆすり激しく抵抗するも、グレンデルはあえなくお縄になった。
　きつく後ろ手に結ばれ、体も同時にきつく締め上げられた状態で無理やりその場に立ち上がらされる。
「さっさと歩け！」
　レグリアナ兵にどつかれるようになりながら、グレンデルはその場から歩き出した。
　その後、グレンデルは犯罪クラスの高い人間の入る牢獄に入れら

れ、その翌日から毎日のように尋問が繰り返されることになった。

第三章：暴走

その頃、相変わらずリガルナの居場所も、現在どこにいるのかもまるで情報の入ってこない毎日の中で、エレニアの怒りはピークに達し、宛て所のない怒りを無差別に当り散らし始めていた。

回りに控えている兵士たちも、これにはいよいよ恐怖の色を濃くするも、仕事を放棄するわけにも行かずその場でじっと耐えている状況が続いていた。

「奴が、奴が来るぞ！　私を殺しに来る！」

気が触れたようにそう叫びながら周りの物を投げ散らかし、召使や兵士たちが取り押さえなければその行動はどんどんエスカレートして行ってしまう。

エレニアがこれまでこの国にある悪をあらゆる手段を使ってでも根こそぎ排除し続けようとしていたのには、エレニアの心の弱さにも原因があった。

これまで気丈に振舞っていた以前のエレニアとはまるで比べ物にならない今の姿は、その弱さが剥き出しになった状態だと言ってもいい。

暴れまわるエレニアをようやく取り押さえ、部屋へと連れていかれる姿を見送るグルータスの表情は暗かった。

「まさかエレニア様がこのようになられるとは…。この状況では、奴が来ても来なくてもこの国は駄目になる。…マーナリア様に王位を譲る時が近いかもしれんな」

神妙な顔つきで、ため息混じりに呟くグルータスの姿はどこか寂しくも不安に包まれた状態だった。

そんなエレニアの様子を、日々マーナリアは気にかけていた。

「お母様は、迫り来る恐怖から自我を失ってしまわれた…。毎日奇声を発して…」

部屋でセトンヌの看病を続けながら、独り言のように呟いていた

マーナリア。
今だ目覚めないセトンヌと、狂い始めた母の板挟みになったマーナリア自身もどうしてよいのか分からず不安に包まれている。
「マーナリア様…」
ふと、ドアがノックされドアの向こう側から声を潜めて名が呼ばれる。それが誰なのかすぐに察するとマーナリアはセトンヌの傍を離れ、そっとドアを開く。
「死山にいた、あの少女を連れてまいりました」
「…そう。ありがとう。それで、彼女は今どこにいるの？」
「はい。今は地下にある小部屋へ安置しております」
「……分かりました。この度はご苦労様でした。私のワガママを聞いてくれてありがとう」
「いえ…。ところで、あの少女をどうなさるおつもりですか？」
以前から気になっていた。そう言わんばかりに兵士が訊ねてくると、マーナリアは小さく笑いかける。
「いいえ。大したことではありません。少し、彼女と話がしたくて…」
「話、ですか？　しかし彼女はもう…」
「えぇ。分かっています。とにかく、あとは私の方で処理をしますから、これで下がって良いですよ」
「はい。了解しました」
パタン…。とできるだけ音を立てないようにドアを閉めたマーナリアは、しばし扉に額をつけその場に佇んでいた。そしてゆっくり背後を振り返り、眠っているセトンヌに視線を投げかける。
「セトンヌ…。リガルナを救おうとしている私の事も、あなたは恨むでしょうか…」
返事など帰ってくるはずもない静かな問いかけをしてみる。
表情を俄に曇らせたマーナリアは、その後部屋をそっと抜け出し、アレアの元へと向かった。

第三章：暴走

ランプを片手に、マーナリアの歩く靴音だけが響き渡る地下通路。
アレアが安置されていると言う小部屋は、マーナリアが幼い時にお仕置き部屋として使われていた部屋であり、今では簡素なベッドと小さな明り取り窓、そして古びた棚が一つ、そして背もたれのない木椅子が一脚置いてあるだけの部屋となっている。
持ってきた鍵を使いドアを開けると、小さな軋みを上げてドアが開き、ベッドの上で横たわっているアレアの姿が目に映る。
明り取り窓から差し込む明かりだけがこの部屋を照らし、眠るアレアの肌を仄白く写している。
マーナリアがそっとアレアの傍に歩み寄り、ランプの明かりの元に映してみる。
どこにも傷がなく、殴られたような傷もない。本当に綺麗なそのままの姿で見事に氷漬けになっている彼女を見て、マーナリアは切なさを覚えた。
あのリガルナが心をいくらかでも開き、彼女と共にあったことに安堵を覚えるも、それ以上にこんなにも大切にしているアレアとの別れが彼を暴走させたのだと思うとやりきれない。ましてそれが自分の国の兵士による物だと分かっているからこそだ。
マーナリアはランプを棚の上に起き、木椅子の上の埃を払ってそこにゆっくりと腰をおろす。そしてそっと眠るアレアの体の上に手をかざし瞳を閉じた。
ゆっくりと左右に手を動かし、再び胸の上まで戻ってくるとマーナリアはそっと瞼を開いた。
「……やはりあなたなのですね。以前、私のところに来たのは…」
静かな口調でそう呟くと、アレアの体がポッと仄白く光り、それはユラリと大きく揺らめくとアレアと同じ姿を象ってその姿を表す。
マーナリアは怯えることなくアレアを見つめると、アレアもまた

どこか寂しげに表情を曇らせたままマーナリアを見つめていた。
「……あなたと、少しお話がしたくてここへ招いたのです。突然でごめんなさい」
そう言うマーナリアの言葉に、アレアはゆるゆると首を横に振った。
「あなたの名前を教えてくれますか？」
『……アレア・グリーチェ…』
「そう。アレア。あなたの体には、まだ強い残留思念が残っています。何かやり残した事があるのね？」
マーナリアの静かな言葉に、アレアはゆっくりと首を縦に振った。その様子を見届けたマーナリアもまた納得したように一度頷くと質問を続ける。
「あなたはあのリガルナと、どう言う関係でしたか？」
『…あの人は、絶望の淵にいた私を救ってくれました…。あの人は、私以上に絶望の中にいたのに…』
ポツポツと語るアレアの残留思念。マーナリアはその言葉を一つ一つしっかりと聞き止める。
「あなたを、この姿に変えてしまったのは私の国の者ですね？」
その問いかけに、アレアは一瞬動きを止めるがゆっくりと首を立てに振った。
『……でも、私、恨んでません。リガルナさんとの時間が予定より短くなってしまった事は、残念でしたけど…。でも、私、こうなったことを恨んでません…』
「……そう…」
『それよりも、私はあの人を救いたいんです。もう、これ以上傷ついて欲しくない…』
意味深な言葉に、マーナリアは不思議そうな表情を浮かべる。そんなマーナリアをアレアは真っ直ぐ見つめ返してきた。
「……あなたは、知っているの？　これからどうなるのか…」
マーナリアの問いかけに、アレアはゆっくりと首を縦に振った。

そしてこれから起きようとしている出来事を話し始める。
『リガルナさんは、今、船でここへ向かっています』
「船？」
『…この国に、復讐を晴らす為に来ようとしているんです』
「……」
アレアの言葉に、マーナリアは息を飲んだ。
復讐。リガルナはやはりそう思っていた。この国に、そして自分に対しても…。
仕方のないことだと、その一言で片付けてしまえる問題ではない。何か対策を考えなければ、この国は跡形もなくなるだろう。
母が狂い、セトンヌも目を覚まさないこの状況の中で手に入れたこの情報は、マーナリアを酷く動揺させた。
押し黙ったマーナリアに、アレアは静かに口を開いた。
『あの人と…話がしたい…』
「え？」
『リガルナさんと、話がしたい…。ちゃんと、さよならを言いたい…』
寂しげにそう言ったアレアは、風に掻き消えるようにふっと姿を消した。
その場に残されたマーナリアは、しばらくの間その場に留まっていたが目の前で横たわり静かに眠るアレアの顔を見つめると、小さく頷いた。
「……あなたのその願い、私がきっと叶えてあげます。それが…私が彼にできる精一杯の罪滅しですから…」
マーナリアはゆっくりと席を立ち上がると、その部屋を後にした。

第三章：暴走

「マーナリア様。少しお話が…」
部屋に戻ってきたところをグルータスに呼び止められたマーナリアは、部屋には入らずそのまま目の前の庭園までグルータスの後についてやってきた。
庭園の中央付近まで歩いてくると、背を向けたまま一言も発することのなかったグルータスがゆっくりとマーナリアを振り返る。その顔はやや怖いイメージを与える。
「……今後の事なのですが…」
そう切り出したグルータスに、マーナリアは静かに頷いた。
「お母様の事ですね？」
「…はい。エレニア様があの状況では、この国の指導者が誰もいないのも同然です。このままではあの赤き魔物がもしもこの国へ来ることがあった場合、何も出来ずに滅んでしまうだけです」
「…グルータス。その事ですが…」
マーナリアはアレアの事は伏せながらも至って真剣な表情で先程聞いた情報をグルータスに伝えると、グルータスは目を見開き驚きの表情を隠せない。
「な、なんと…それは真ですか…？　あの赤き魔物がこちらに向かっているなどと…」
「えぇ。神がそう仰っている以上、恐らく間違いはないはずです」
あくまで、神のお告げだとそう言い含めるように話したマーナリアの言葉に、グルータスはただ愕然とする他ない。
片手で顔を押さえ、この現実にどう立ち向かうべきかを思い悩む。
「なんと言うことだ。こんな時に限ってそんな…」
「グルータス。今は一刻の猶予もありません。お母様に代わって、今は私がこの国の指導者となります」
「マーナリア様…」

「今私がやらなくては困るでしょう？」
小さく笑いながらそう云うマーナリアに、グルータスはしばし戸惑ったような顔をして見せていたが、この選択肢を選ぶしか無い。
グルータスは大きく一度頷く。
「マーナリア様…。どうぞ、お願い申し上げます」
「えぇ。指導者としては不十分な私です。あなたのサポートと意見はどうしても私には必要なものですから、指導者である私を支えてください」
「はい。必ずやお役に立ってみせます」
その場に膝を折り、頭を垂れるグルータスに対しマーナリアは真剣な表情のまま見下ろしていた。
この事態をどう乗り切るか。この瞬間、それは自分の手に全てを委ねられたのだ。
「では、グルータス。すぐに階級など関係なく全ての魔術師と兵を広間に集めてください。それから騎士団長であるセトンヌに代わって、騎士団を取り仕切るのはしばらくの間あなたに任せます」
「御意」
グルータスは新たな指導者として立ったマーナリアをその場に残すと、足早にその場を立ち去っていった。

第三章：暴走

マーナリアは浅く息を吐き、これからどうなるのか分からず不安ばかりが残る中で指導者として立つことに対し、緊張の色を濃くしていた。その証拠に握り締められた手が微かに震えている

ここまで来た以上、やり通すしか無い。そう腹を決めるとマーナリアは一度部屋へ戻った。

ゆっくりと扉を開き中に入るとサァっと風が通り過ぎる。それに対し顔を上げたマーナリアは不思議そうに辺りを見回した。

窓を開けたまま出ただろうか？　それとも、召使が空気の入れ替えに部屋に入ったのか…。

部屋の中に入り扉を締めたマーナリアは、真っ直ぐにベッドに向かうと驚いたようにその場に固まってしまう。

ここで眠っていたはずのセトンヌの姿が見えない。

「…セトンヌ？」

マーナリアが辺りを見回すとバルコニーに人影を見つけそっとそちらに近づいた。

バルコニーに立っていたのは、紛れもないセトンヌその人だった。

「セトンヌ！」

マーナリアが声をかけると、セトンヌはこちらをゆっくりと振り返り小さく微笑んでいた。

マーナリアはそんなセトンヌの傍に歩いてくると、セトンヌは彼女をそっと抱き寄せた。その手に力はない。

「マリア…」

「良かった。目が覚めたのですね…」

「はい…ご心配をおかけして、申し訳ございませんでした」

そっと抱き返すマーナリアは、セトンヌの胸元で首を左右に振った。

「いいえ。あなたが死なずに戻ってきてくれただけで、私は十分で

す。一時はどうなるかと思いました。あなたの傷はあまりに深く、深刻でしたから…」
「すみません…。それよりも、私が倒れている間奴の動きはどうなっていますか？」
目覚めてすぐにリガルナの事に直結するのは、それだけセトンヌがリガルナを恨んでおり、国を守るための正義感からくるものだった。
マーナリアは一瞬言葉を飲み込むが、セトンヌから体を離して彼を見上げ、ややあってから口を開いた。
「…彼は今、ここに向かっています」
「！」
「この国と、私に対しての恨みを晴らすべく、ここに来るのです」
セトンヌは驚いたように目を見開いていたが、次の瞬間には軍服の上着を置いてあったテーブルから奪いあげると部屋の外へ向かおうとする。だが、ドアノブを握りしめた瞬間、体中に走る激痛に顔を顰め思わずその場に膝をついてしまう。
「セトンヌ！」
マーナリアはそんなセトンヌの元に駆け寄り、支え上げた。
「そんな体で無理をしてはいけません」
「そんな事を、言っている場合ではないでしょう。奴が来ると分かっているのに、大人しく休んでなどいられるハズもないでしょう！」
「セトンヌ、お願いです。無理をしないで下さい。今あなたは少しでも傷を治す事を考えて、あとは私に任せてください」
「マリアに…？」
マーナリアの言葉に驚いたように振り返ったセトンヌには、信じられないものだった。
自分が倒れている間に、一体何があったのだろうか。そう感じずにはいられなかった。
「私、これから皆に今後の話をしに行かなくてはいけません。セトンヌ、どうかお願いですから今はまだ休んでいてくださいね」

「……分かりました。マリア、あなたの仰せのとおりに…」
抱き寄せるセトンヌの手には力が篭っていた。

第三章：暴走

「皆、よく聞いて下さい。病に臥したエレニア王妃に代わり、今よりこの国の指導者は私です」

物々しい雰囲気で広間に集められたレグリアナ王国の兵士と魔術師達を前に、マーナリアは毅然とした態度で立っていた。そんなマーナリアの傍にはグルータスが立っている。

凛とした声が静かな広間の中に響き渡り、マーナリアは目の前の兵士たち一人ひとりを見るように視線を投げかけながら話を続けた。

「レグリアナはこれより、完全防御態勢に入ります。よって、国の内外の行き来は出来なくなることを、明日中に全国民へ通達と宮殿への早急の避難勧告をお願いします。そして魔術師達は皆、向こう3日までにこの国全体に結界を張ってください。無茶な命令であることは十分承知の上です。ただ、私たちには時間がありません」

マーナリアの指示に、誰もが異を唱える者はなく命令通りに動き始めた。

目の前で皆与えられた命により動く様を見つめながら、マーナリアは緊張と不安に体が強ばっている。それを隣に立っていたグルータスは気づいた。

「マーナリア様」

「大丈夫。これはお母様に代わって私がどうしてもやらなければならないことです。国を守ることの重大さは心得ていますから」

「……」

その後、レグリアナはマーナリアの命令通り数日に渡り魔術師達が全勢力を挙げて国全体に大規模な結界が張られた。

目には見えない透明な結界。その結界だどれだけの強度を誇り、どれだけ相手を阻んでくれるのか、それは分からない。

国全体が結界に覆われる中で、マーナリアは一つ覚悟を決めていた。

アレアの意志を伝えるまでは何があろうと生きていなければならない。そして彼女の意志を伝えるために、自分の巫女としての力の全てを使い果たすつもりだった。
本来なら子へと受け継がれるはずのその力。今回その力を使い果たすことで子への継承は出来なくなる。それが、国全体をバラバラにしてしまう原因になるかもしれない。
だが、マーナリアの心は決まっているも同然だった。
「アレア。あなたの意志、私が必ず伝えてあげます…」
細やかな装飾の施された薄いガラスの棺桶に入れられたアレアの姿を見つめながら、マーナリアはそう呟いていた。

第三章：暴走

レグリアナが防御体制に入ったことも、自分が向かっている事を相手が察知している事など、露程も気づかないリガルナがレグリアナ大陸に辿り着いたのは、それから5日後の夜だった。

今宵は白い満月の夜。

港町を離れ、リガルナはゆっくりとした歩調でレグリアナへの道を歩いていた。

久し振りに踏む大地。もう２０年以上もこの土を踏んでいない。だが、リガルナには懐かしさよりもただ苦い過去の想い出を思い出させる他何も無い。

暗い森を歩き、広大に広がる草原を突き進んでいる内に、夜は更に更け月は空の頂上へと昇りつめる。

リガルナは足を止め、何気なくその夜空を見上げると同時に、ふいにフワーッと下から明るい光が照らし始めた。それに気付き視線を下げると、満月の夜。満月が夜空の頂上へと昇りつめてから数時間しか咲かない、その名も“フルムーン”と呼ばれる花が開花していた。

いつもは固く花弁を閉ざし、満月の光を受けて花開くフルムーン。中央が丸く黄色い光を放ち花弁は柔らかな薄いピンク色をしている。

一度咲いたフルムーンは徐々に光を失い、花弁を落とし萎れて終わる儚い花としても知れていた。その種子は、枯れると共に地面に落ち新たに次の満月までの間そこで育つ。

その花を見つめ、リガルナの目がキュッと細くなる。

「……」

リガルナはしばしその場に佇んでいたが、再びゆっくりと足を持ち上げ一路、レグリアナに向かって歩き始めた。

何も無い、広大な土地の向こうに見えるレグリアナ宮殿の一角がこの位置からも確認できる。

様々な栄光を手に入れた、輝かしいまでの聖なる国家。誰もが憧れる聖地として知れ渡っているこの国の素性はそうではなかった。他と、何も変わりない、ただの国家だ。
そのレグリアナ宮殿の一角を睨みつけるようにしながらリガルナはきつく拳を握りしめた。
ザッ、と踏みしめた先のフルムーンは、ハラリと花弁を撒き散らしながら淡く光を失いながら枯れていく。
一歩、また一歩と地面を踏みしめて歩いたリガルナは、それからいくらもしない内にレグリアナの南門の前に立っていた。
門番も、誰もいない南門。あまりにも無防備すぎるほどに大きく開け放たれている門を前に、リガルナは訝しげな表情を浮かべる。
おかしい。門が開いていると言うのに、門番の兵士がいないこともそうだがこの静寂振り。わざとそうしているかのような風貌にこちらがここに来ることを既に察知している…？
リガルナがすっと手を差し出すと、バチバチバチッ！　と激しい火花を散らしながら一瞬明るく光りが放たれ、差し出した手には分厚いゴムに押し返されるような感触が伝わってくる。
一瞬手を引いたリガルナの動きに合わせるようにパリパリッと火花を散らし、光りが収まる。
リガルナはその火花に手に傷を負い、指には赤い血が流れ落ちる。
「フン…。気づいていたか」
リガルナは指の血をおもむろに舐め、不敵な笑みを浮かべる。
一度瞼を閉じ、ゆっくりと開くともう一度手を差し出す。
バチバチと激しい火花を巻き上げ、足元は眩しいほどに光り輝き、あたり一面が朝のような明るさを帯びる。
バタバタと巻き上げる爆風と腕と指を容赦なく傷つけてくる火花に臆することなく、リガルナは片手を前につき出したままそのまま動かない。
ピピっと顔に傷が走り抜け、長い髪が風に大きくなびく。
リガルナはレグリアナに張られている結界を、片腕だけで壊すつ

もりでいた。
　真っ直ぐに突出された手が圧迫感を伝えてくる結界をゆっくりと、確実に押し始めリガルナは一歩一歩、地面を踏みしめながら前進し始める。
「……っ」
　ぐぐぐ…っと腕に力を込め、広げていた手をゆっくりと握り込むと更にそれを強く前へと捻り込んだ。
　激しくショートするかのように派手な火花を上げ、それまで眼に見えていなかった結界がリガルナが拳を捻り込む事で歪が生まれ眼に見えるようになる。
　相変わらず、跳ね返そうとする力は強く、リガルナ自身足をしっかり地面に付けていなければ容易に弾き返されそうなほどだ。
　眩い光は更に光の強さを増し、強引に割入ろうとするリガルナを照らし出した。

第三章：暴走

「…来ましたな」
「……」
その様子を、宮殿から見つめているのは、マーナリアとグルータスだった。
強力な結界を張ったと言うのに、たった一人、一つの腕だけで跳ね除けようとしているリガルナの姿に、マーナリアの表情はどこか曇っている。
「マーナリア様。兵士並びに騎士団への命令は」
「まだです」
「しかし、このままでは結界が砕けてしまいますぞ」
「……良いのです。できるだけ彼をこちらに引きつけなさい」
マーナリアはぐっと拳を握り締め、リガルナを見つめていた。
リガルナはいよいよ結界を歪な形に曲げると、逆の手に生み出した風の魔法を発動する。
「はぁあぁぁっ！！」
その瞬間、ズドォーンッ！　と大地を揺るがすが如く凄まじい爆発が巻き起こり、レグリアナに張られていた結界はまるでガラスを割ったかのようにパリパリと音を立て粉々に砕け散った。
後に残された追い風にバタバタと煽られ、静寂の中にリガルナは宮殿を睨み上げて悠然とその場に立っていた。
「……っ」
マーナリアはかち合うはずのないそのリガルナの視線にゾクリと寒気を覚え、窓辺から一歩後ろに下がる。
本気でこの国を潰しに来た。生半可な対応では確実に殺される。そう予感させるような寒気。
「マーナリア様！」
「…ぜ、全軍、配置につきなさい」

「はっ！」
グルータスが急ぎその場から立ち去ろうとした瞬間、マーナリアは弾かれるようにグルータスを振り返った。
「グルータス！」
「……！」
「皆にも伝達している通り、何があろうと彼を殺してはいけません。必ず、生きて捕縛するのです」
「御意」
グルータスはそう言うと踵を返し、足早にその場を立ち去った。
マーナリアは祈る思いで再び窓辺に立つとゆっくりと歩を進めて歩いてくるリガルナの姿を見守った。
必ず、彼は生きていなければならない。彼に、伝えなくてはならない事がある。
これが、これから多くの犠牲を払うことになったとしても、それだけは伝えなくてはならないことなのだ。
「私の言葉は、もう二度とあなたには届かないでしょう。でも、あなたにはあなたを想う人の言葉を届けなくてはいけない…。それが私があなたにしてあげられる唯一のことです…」
きゅっと窓辺に置いた手を握り締め、マーナリアは緊張の面持ちでリガルナを見下ろしていた。

第三章：暴走

乾いた風が吹き抜ける、人の気配がまるで感じられないこの城下町。

リガルナは辺りに注意を払いながら一歩、結界の解けた祖国の土を踏みしめ入国する。

ザリ…と、地面を踏みにじる音と風の音だけが、やけに虚しく耳に入る。

南大通りをゆっくりと歩いていたリガルナが、ふと中央付近まで来たときに足を止めた。

今ではもう新しい民家の建っているよく知る場所。そこに視線が止まり、しばし見つめていた。かつて、自分が暮らしていたはずの、小さなしがないオルゴール店だった家…。

「……っ」

リガルナはズキン、と痛み出した頭に顔を顰めた。

忘れていたはずの、鈍く重い頭痛。

リガルナはその家から視線を逸らし、ズキズキと痛み出した頭を押さえつけた。

今更、何だというんだ…。

それを振り払うかのように再び足を踏み出して、そしてまた足が止まる。

「待っていたぞ。リガルナ…」

リガルナの視線の先に立っていたのは、何千、何万と言う兵と魔術師達を背後に引き連れたセトンヌの姿だった。

リガルナは彼の姿を視界に捕らえた瞬間、フッと口の端を引き上げほくそえむ。

「何だ、お前、生きていたのか。あれだけの深手を負っておいて…。随分と往生際の悪い」

「貴様を討ち取るまで、俺は死ねない」

「執念深い男だな」
「それだけの事をお前はしたんだ。よそよそしい応えはよしてもらおうか」
「フン…くだらん」
鼻先でせせら笑うリガルナに、セトンヌの表情は険しさを増した。だが、ぐっと拳を握り締め努めて冷静さを保つ。
「ここへ戻ってきたと言う事は、覚悟は出来ているんだな？」
「覚悟？　あぁ、お前に殺されるという、あれか」
小馬鹿にしたような物言いでそう言ったリガルナは失笑し、セトンヌを睨みつける。
「さぁな…」
「……っ」
「そう言うお前こそ、覚悟あってここに立っているんだよな？　あれだけの傷を負わせたんだ。完治はまだ、してないんだろ。騎士団長さん」
リガルナの笑みと余裕のあるその言葉に、セトンヌはいよいよカッとなってしまう。
思わず声を荒らげ腰に携えた剣を引き抜きそうになるが、その一瞬早く、傍に立っていた兵士の一人がセトンヌを止めた。
「セトンヌ様、いけません。相手の言葉に乗せられては思う壺です」
「……っち」
セトンヌをギリギリで静止した兵士が、リガルナとセトンヌの間に立ち剣を引き抜く。
「これ以上の会話は無用だ。大人しく降伏すればケガを負わすこともなく事を荒立てずに終わる。降伏はないか？」
「……」
そう言う兵士を、リガルナはまじまじと眺める。
冷や汗を流しながらも、勇ましくこちらに剣の切っ先を突きつけている兵士の姿は、他から見ればなんと逞しいことだろう。だが、リガルナはその兵士を見るや、くっと噛み締めたような笑い声を立

てる。
「な、何だ！」
「…教育がなってないな」
「何…！？」
「せっかく勇ましく前に出てきたと言うのに、剣がお前に呼応するかのように鳴いているぞ」
見れば、恐怖から兵士の握り締める剣は小刻みに震えカタカタと音を立てている。
この兵士からすれば、それを堪えていたのだが、察知されてしまった事に思わずカッとなってしまった。
「う、うるさいっ！　この魔物めっ！」
「待てっ！」
声を荒げ、セトンヌが背後から止めるのも聞かず、兵士は剣を構えたままリガルナに走り寄り、剣を大きく振りあげて斬りかかる。
リガルナはそこから寸分も動くことなく、上空から振り下ろされる剣を見据えニヤリとほくそえんだが早いか、パンッ、と弾けるように兵士の頭部が吹き飛んだ。
「なっ…！」
一瞬の事で何が起きたのか分からなかったが、リガルナが手のひらを兵士に突きつけた瞬間頭部が破裂し、頭無き骸と化した兵士はその場にグシャリと崩れ落ちる。
あまりに一瞬過ぎて、セトンヌは驚愕したように目を見開きその場に固まってしまった。

第三章：暴走

リガルナは兵士の返り血を浴び、それを拭うこともせず真っ直ぐにセトンヌを見据える。
「先走った行動…。やはり教育がなってない…」
「貴様…っ」
セトンヌは剣を鞘から抜き取り、凄まじい形相でリガルナを睨みつける。
リガルナはそんなセトンヌを涼し気な表情で見据え、口元には笑みすら浮かべていた。
「人の命を何だと思っている！　断じて許せんっ！」
「……」
セトンヌはすっと手にした剣を振りあげ声を荒げた。
「かかれっ！　奴を捕らえろっ！」
その掛け声に、背後にいた兵士たちは一斉に声を上げ皆剣を引き抜くと一斉に切りかかってきた。
まるで怒涛のような雑踏が、一気にリガルナ目がけて走りこんでくる。しかし、リガルナはやはりその場に直立不動だった。
大勢の兵士の剣が一斉にリガルナ目がけて突き立てられ、もしくは振り下ろされる。が、一瞬時が止まったかのように見えたその瞬間、リガルナを中心に莫大な衝撃波が巻き起こる。
ドォンッ！　と爆発するように巻き起こったその衝撃波に、斬りかかってきた兵士の半数以上が弾き返され、辺りに建っていた民家は脆くもガラガラと音を立てて崩壊する。
バタバタと煽られるような激しい風が吹き、落ち着いた頃には残されていた兵士たちが一様に蜘蛛の子を散らすが如くその場から退散しようとしている者の姿も見られた。
セトンヌは魔術師が咄嗟に作った防御シールドのおかげでケガもなく、吹き飛ぶこともなくその場に押し留まった。

パラパラ…、と瓦礫の上に石が落ちる音が耳に飛び込んでくる。
しかし、果敢にもまだ立ち向かってこようとする兵士たちをリガルナは一瞥すると、斬りかかってきた兵士の攻撃よりも早く、その体を自らの腕で貫いた。
悲鳴を上げる暇もなく急所を貫かれた兵士は、リガルナが腕を引き抜くと同時にその場に崩れ落ち動かなくなった。
「うわあああああああああっ！」
背後から声を上げ、切りかかってくる兵士を振り返るが早いか、リガルナはその兵士の頭部をガッチリと掴み込み空いている方の手に魔法を呼び起こしそれを解き放つ。
ヒュンヒュンと音を上げ、鎌鼬のような鋭さを秘めた炎の刃がリガルナが押さえ込んでいる兵士の体を容赦なく切り刻み、一瞬の間に真っ赤に染め上がる。
リガルナはそれをまるで物を捨てるかのように投げ捨てた。
勇ましく刃を向けて駆けつけてきた他の兵士たちは、為す術も無く瞬殺されてしまった仲間を前に完全に怯え、それ以上襲いかかってこようとはしなくなった。
リガルナはそんな彼らを一瞥し、フン、と鼻で笑う。
「……他愛ない」
「……」
涼しい顔をしたままのリガルナに対し、驚愕の表情を隠しきれ無いセトンヌは見渡す場所が全て何も無い荒野と化してしまった城下に、ただ言葉を失った。
リガルナは足元に転がった頭のない遺体を、無造作に蹴り転がすとゴロンと力なく仰向けに倒れる。
「さて…。遊びはこれまでにして、本気で殺り合うか…」
挑発するかのようなリガルナの言葉に、セトンヌはカッと目を見開く。そしてすぐさま手にしていた剣を握り直すとぐっと地面を踏みしめリガルナに斬りかかった。
「はぁあああぁぁあぁぁぁっ！！」

ブンッ！　と唸りを上げて振り下ろされた剣を、リガルナはパッと差し出した手のひらに小さなシールドを作り出す。
ギィンッ！　と固いものに強く弾き返される衝撃に、セトンヌの体は一瞬よろめく。
リガルナはその瞬間を見逃すことはせず、一瞬出来たその隙を狙って勢い良く逆手で拳を突きつけた。
「ぐっ！」
触れるか触れないかと言うリガルナの拳だったが、強い衝撃がセトンヌを襲い後方へ弾き飛ばす。
セトンヌは体を支える余裕もなく後方へ弾き飛ばされる。ザーッと砂塵を巻き上げ、激しく地面に背中を叩きつけられるようにして倒れたセトンヌは、癒えきっていない傷が疼いた。
「ぐぁっ！　ぐぅううぅ…」
自分の体を掻き抱くように丸め込み、脂汗の滲むほどの激痛に耐える。
リガルナはゆっくりとした歩調で歩み寄り、酷く冷酷な眼差しで倒れているセトンヌを睨み下ろした。
「他愛ないな…。あれだけの大口を叩いたんだ。……俺を殺してみろよ」
「くっ…」
「それとも、諦めて死んでみるか？」
セトンヌはリガルナを睨み上げた。リガルナもまた同様にセトンヌを睨み下ろし、左手に魔法を発動させている。
双方しばしの睨み合いが続いたかと思うと、一瞬早くリガルナは発動させた魔法をセトンヌに向けて解き放つ。
ドォン！　と激しい爆音を上げヒュンヒュンと唸りをあげながらセトンヌに襲いかかる風の刃。ドドドド！　と猛烈な勢いで襲いかかり辺りには砂塵が舞い上がった。
「！」
ふとリガルナは背後に気配を覚え即座に振り返る。

魔法が発動される直前、セトンヌはその場から飛び退きリガルナの後方へ素早く回りこんだのだ。
「ふざけるなっ！」
セトンヌは振り返ってきたリガルナの頭部を剣の柄で思い切り殴りつける。
ガッ！　と確かな手応えと共に攻撃を与えたセトンヌは、荒い呼吸を繰り返し、その場に立つ。
「うっ…」
リガルナは左のこめかみ部分を強打され、ほんの一瞬視界がブレる。
打たれた部分を押さえながらよろよろっと後方へ数歩退く。その押さえた場所からはツーっと一筋の血が流れ落ちた。
セトンヌはそんなリガルナを睨みつけながらニッとほくそえむ。
「…これまでの所業を悔いて死ね」
「……っ」
セトンヌは手にしていた剣を握り直し、リガルナに襲いかかった。
地面を蹴り、大きく振りかぶった腕をリガルナの頭部目がけて思い切り振り下ろす。
バシッ！！　と音が鳴り、強い衝撃を腕に覚えたセトンヌはリガルナを仕留めたと思っていた。だが、目の前を凄まじい速さで円を描きながら後方へ飛んでいく自分の剣を見た瞬間、何が起きたのか自分でも分からなくなってしまう。
リガルナ目がけて振り下ろされた剣は、リガルナが地面に両手をついてセトンヌの手首を思い切り蹴り上げた衝撃で手を離れていたのだ。
「…そう簡単に、俺が殺れると思ったら大間違いだ」
低く、唸るようなリガルナの声を聞いたセトンヌは、苛立ちから背筋にゾワッとしたものを感じる。

第三章：暴走

リガルナは身動きが取れなくなっているセトンヌの足元から、ひょいっと背後に回って身軽に体を引き起こす。
手元にあった剣を奪われたセトンヌはすぐさま後ろを振り返り、ブンッ！　と唸りを上げてリガルナに蹴りを喰らわせる。が、リガルナはそれを一瞬早く顔の前に腕を構える事で受け止め、セトンヌの体をドン！　と叩くように押し返す。
「くっ…！」
セトンヌは後方へ数歩よろめきながら、視線を逸らさないようリガルナを睨みつけた。
リガルナの攻撃の手は止まらない。後方へ退いたセトンヌに追い打ちをかけるよう繰り出した拳が唸りを上げて襲いかかる。
セトンヌはそれをギリギリのところで避けると、負けじとそれに応戦をしていく。
ガガガガッ！　と激しい打ち合いが繰り広げられる。一瞬の息つく暇もない激しい打合い。
やや押され気味なのは、やはり深手を負っているセトンヌの方だ。だが、セトンヌも負けてはいない。次々と繰り出してくる蹴りや拳の隙を突き、腰に備え付けてあったもう一つの短剣を素早く抜き取るとヒュッ！　と素早く横一文字に薙ぎ払う。
「！」
リガルナはその攻撃を寸でのところで察知し、後方へ体を仰け反ることでその攻撃をかわすもピッ、と顔に傷が走り鮮血の雫が宙に舞う。
リガルナはザッ、と地面を踏みしめ、ぐっと腰を落とし両拳を腰のあたりで握りしめると、唸りを上げて右腕を振りかぶる。
反撃をした上での更なる反撃を食らい、セトンヌは面食らったような顔を浮かべてよろめいた。

リガルナは一気にセトンヌとの間を詰め、ニヤリとほくそ笑みながらセトンヌの耳元で一言漏らす。
「死ね」
「！」
そんな呟きが聞こえた瞬間、リガルナの左手が再びセトンヌの傷を抉るかのように勢い良く伸ばされた。
ブシュ…！　と生々しい音を立て、その一瞬後にバタタ…と多量の血が地面の上を赤く染め上げていく。
「…ぐっ…！」
低く唸り、顔を顰めてよろめきながら地面に片膝を着いたのは、リガルナだった。
「グ、グルータス殿…！」
セトンヌが、リガルナの腹部を槍で一突きしていたグルータスに驚いたような表情を浮かべている。
リガルナが攻撃を繰り出すよりも早く、颯爽とセトンヌの傍に躍り出たグルータスの持つ刃物までのリーチの長い槍がセトンヌを救い、リガルナに傷を負わせた。
「セトンヌ殿、無事ですか」
ビシャッ、と音を立て、槍がリガルナの腹部から勢い良く抜き取られる。
一か八かの隙を狙ったグルータスの攻撃を前に、そんなことなどまるで予想もしなかったリガルナは、セトンヌとグルータスの前で崩れ落ちた。
「も、申し訳ない…」
「いえ。今あなたに死なれては困るのです。セトンヌ殿は時期国王でもあるのですから」
二人の会話が、意識の少し遠いところで聞こえてくる。
腹部に走る鈍痛に、リガルナはきつく刺された場所を握り締め、生暖かい自分の血で染め上がった手が微かに震える。
復讐はまだ、終わっていない…。

リガルナは目の前に見えるレグリアナ宮殿を酷く凶暴な眼差しで睨みつけるが、やがて意識を失った。

第四章：困惑

湿ったカビの臭いを引き連れて、冷たい風が吹いてくる。
「……っ」
ピクリ、と身動きすると共にジャラ…と言う重たい音と感触が肌を伝ってきた。
閉じていた瞼をゆっくりと開き、2、3度瞬きを繰り返すとボヤケていた視界が晴れてくる。
目の前には、黒ずんだ石造りの床が見える。その視線をゆっくりと上げていくと、鉄格子が見えた。
「う、動いたぞ…」
どこかからかそんな声が聞こえ、リガルナはそちらに顔を向けた。
鉄格子の向こう側に、こちらを怯えたように見ている見張り役の兵士が二人いるのが見える。
「ほ、本当に大丈夫なんだろうな。あれ…」
「だ、大丈夫だろ。何たってマーナリア様が直々にお作りになった物だ。大丈夫に決まってるじゃないか」
そう、何かを確かめるように呟いていた二人だったが、言葉とは裏腹に完全に怯えている。
リガルナはマーナリアの名を聞くや、カッと目を見開き兵士二人を襲うために手を伸ばそうとする。が、ガシャン！　と派手な音を立てるばかりで手が動かない。いや、手だけではなく、足の自由までもが奪われている。
リガルナが視線を手足に巡らせると、牢屋の壁に張り付けの状態で鎖に繋がれている事が分かった。ならば、魔法で…。
そう思ったリガルナが魔法を呼び起こそうとする。が、牢屋の中の空気が僅かに動くだけでどういう訳か魔法がまるっきり発動できない。
「くそ…っ！　貴様ら、何をした！！」

声を荒らげ、そう叫んだリガルナに対し、魔法も発動できず身動きすら取れない事を目の当たりにした兵士たちは、先程までの態度を一変し不貞不貞しさを見せる。
「何だぁ？　偉そうに。静かしてろ」
「ははは。何もできないんじゃ、ただの犬っころと一緒だな。吠えるだけしか出来ないんじゃな」
馬鹿にしたように笑い飛ばし、リガルナを完全に嘲た顔で見ていた。
その顔を見た瞬間ゾワリ…と、体に衝撃が走り抜ける。だが、今の自分にはどうすることもできない。
ギリッ…と、歯を噛み鳴らし、ヘラヘラと笑っている兵士たちを鋭い形相で睨みつけた。
なぜ、魔法が発動できないのだろう。何か仕掛けをしたのか…。
リガルナはそう思い見える範囲内で何か変わったところはないか確かめてみる。そしてふと、自分が今ここに来るまでの事を思い出す。
グルータスと言う男に腹部を刺され、気を失ったはず。ところが、痛みもなく傷も見当たらない。
一体何が…。そう思った矢先、カツン、カツン、と靴音を立てて誰かが上から降りてくる。すると、そこにいた兵士たちは一斉に姿勢を正し、降りてきたその人物に対して敬礼をしている。
「変わりないか」
「はい。意識を取り戻したようですが、例の魔器のおかげで何も出来ないようです」
暗がりからすっと現れたのは、先程まで戦っていたセトンヌその人だった。
セトンヌはリガルナの牢屋の前まで歩いてくると、身動きどころか何もすることが出来ないその姿を見て鼻で笑う。
「フン。ザマはないな…リガルナ」
「……」

リガルナは酷く凶暴な眼差しでセトンヌを鋭く睨みつけている。
セトンヌは鉄格子に手をかけると、リガルナの視線に目を逸らすことなく睨み返し、ややあってから口を開いた。
「お前がここに繋がれる事を、どれだけ夢見たことか…」
「……」
「いや…、違うな。私の真の望みはお前の死だ。お前が私の前から、この世界から消えてなくなる事が私の本当の夢だ」
セトンヌは鉄格子を握る手にぐっと力が篭る。
「マーナリア様の命令が無ければ、何もできないお前をこの場ですぐにでも殺してやりたいところだ。だが、生け捕りにすることをマーナリア様は望まれている。お前が、ここで生きていられるのはマーナリア様のおかげなんだ」
言葉尻は酷く苛立ち、感情を押えきれないかのような激情を咬み殺す強さを秘めている。
リガルナはそんなセトンヌを睨みつけるばかりで、何も話そうとはしない。
セトンヌは鉄格子から手を離すと、吐き捨てるように呟く。
「明日からお前は尋問だ。黙秘権はないと思え」
「……」
「魔法でどうにか出来ると思ったら大間違いだぞ。お前の服の襟元に付けられたその逆十字架…。それがお前の全ての魔力を封じているんだからな」
気を失っている間に付けられたと言う、一見ブローチのようにも見える銀製の十字架。その十字架が逆さ向きに襟元に付けられていた。

第四章：困惑

こんなところで終わってたまるものか…。
リガルナの視線はギラついた鋭さを持ったままセトンヌを睨み続けていた。
セトンヌはフン、と鼻を鳴らし兵士たちと同様にリガルナを嘲るような笑みを浮かべて踵を返す。
「大丈夫だとは思うが、万が一何かあればすぐに連絡をしてくるように」
「御意」
傍にいた兵士にそう言い置くとセトンヌはリガルナを振り返ることなくその場を後にした。
セトンヌが立ち去り、それまでの間噛み付くような勢いを見せていたリガルナだったが、身動きも取れず、魔法も使えない今失墜したように静かになった。
どのみち、死ぬ覚悟は出来ている。生きていることに何の未練もない。だが、それでも、やるべきことはやっておかなければ…。
瞳を閉じれば、目の前で苦しんでいたアレアの姿が目に浮かぶ。
自分が苦しむ分にはいい。自分だけが苦しいならそれで構わない。なのに、大事だったアレアが苦しみ死んでしまったことがいつまで経とうとも耐えられなかった。
この復讐が、彼女を救うことになるとは…思っていない。
「…アレア…」
薄く開いた瞼はどこを見るともなく見つめ、口から出たアレアの名は小さな呟きだった。

翌日。
早朝からリガルナに対する尋問が始まった。
リガルナを捕らえている牢獄の外には、セトンヌの他にマーナリ

アも同席している。
「さて、色々話してもらうぞ。リガルナ…」
「……」
薄暗い牢獄の中に、リガルナの赤く長い髪がゆらりと揺れ、ゆっくりと持ち上がった顔にはどこか気怠そうにもこちらを憎々しげに睨む姿がある。
マーナリアはその眼差しにゾクリと寒気を感じた。
久し振りに見るリガルナの姿。マーナリアの知るリガルナとは随分と一変してしまっているのは仕方が無いことだと分かっていても、どこかショックを隠しきれ無い。
「解錠を」
「は、はい。お気をつけて…」
セトンヌの指示で牢獄の鍵が開けられ、セトンヌはゆっくりと中に入り込む。万が一の事を考え、剣の柄に手を置いている。
「では、まず手始めに…聞かせてもらおう。なぜ、多くの人を手にかけた？」
「……」
「答えろ。お前に黙秘権はない」
「…そんなもの、自分の胸に聞いてみろ」
「何…っ！」
低く、唸るような声で答えを返したリガルナに、セトンヌはカッとなる。
ブン！　と唸りを上げセトンヌの拳がリガルナの頬に飛んだ。ガッ、と打ち付けたくぐもった音が鳴り、リガルナの顔は大きく横に向く。
「……っ！」
「セトンヌ…！」
リガルナの口の端から血が流れ落ちるほどの強烈なパンチに、焦りの色を見せたマーナリアは思わずセトンヌを止めようと声を上げてしまう。だが、セトンヌはその言葉に耳を貸さず、目の前のリガ

ルナの胸ぐらを掴み上げる。
「そんな答えで納得すると思うか」
リガルナは背けていた顔を持ち上げ、口の中に滲む血を吐き捨てるとジロリとセトンヌを睨みつける。
「これが俺の言葉だ」
「ふざけるなっ！」
ぐっと喉元を締め付けるように胸ぐらを掴む手に力を込めると、リガルナは眉間に皺を寄せながらもセトンヌを睨んだ。
「…ふざけてるのは、どっちだ…」
「何だと…」
「お前たちは、弱者を追い込むのが余程好きなようだな…」
「貴様のどこが弱者だ」
「…俺の話じゃない。そこのあんたはもう知ってるんだろ」
「！」
そう声をかけられたのはマーナリアだった。

第四章：困惑

冷たい眼差しに見据えられ、マーナリアは心臓が冷えたような気持ちに包まれる。

セトンヌがマーナリアを振り返ると、マーナリアは強張った顔つきでやや下を向く。

「…私の国の兵が、あなたの大切にしていたものを…」

「殺した」

マーナリアの言葉に続けて容赦なくそう口を挟んだのは他でもない、リガルナだった。

マーナリアはぐっと手を握りしめると、リガルナを真っ直ぐに見つめ返しそっと口を開く。

「その事は、本当に申し訳なく思っています。彼は、この国でも目に余る行動の多い問題視されていた人物でした。まさか、彼があなたと接触するとは思いもしませんでした」

「…よく言う…。意図的だった。そう言った方が余程シンプルで分り易い」

「意図的ではありません！　偶然です」

「あんたの言葉は、信用できない」

「……っ！」

じっと睨みつけてくるリガルナの眼差しとその言葉に、マーナリアはそれ以上何も言えなくなってしまった。

信用できない。そう言ったリガルナの言葉は、過去のあの出来事の事を言っている。

真実を述べているはずのマーナリアの言葉が他者の手によってねじ曲げられてしまい、それが、リガルナにとって深い心の傷を負ったのは言うまでもない。

誰よりも真っ先に味方についていたはずのマーナリアもまた、被害者だと言っても過言ではないのかもしれない。

ただ、今となってはどうなるわけでもない事であるのは変わりはしなかった。
「お前が大切にしていたものだと…」
二人の会話を聞いていたセトンヌは、ぐっと拳をぐっと握り締める。その拳が微かに震えているのが分かった。
「だから多くの人間を手にかけたと言うのか！」
「……っ」
両手で首を締めるかのように、リガルナの胸ぐらを掴み上げ壁に押し付けたセトンヌは凄まじい形相で睨みつける。
「…だったら、聞かせてもらおうか…。なぜ、俺の家族を手にかけた」
「……知らないな…」
「！」
苦し紛れにそう呟いたリガルナの言葉に、セトンヌはいよいよ怒りを押えきれなくなった。
乱暴にリガルナの胸ぐらから手を放し、腰に備え付けた剣を素早く引き抜くとその切っ先をリガルナの首元に突きつけた。
「知らばっくれるつもりか」
「……知らばっくれるだと？」
「あの日、家に火を放ち俺の家族ごと殺した。そうだろう」
「……違うな」
セトンヌはぐっとリガルナの喉に剣を押し付ける。うっかりその剣をそのまま動かそうものなら容易にその首は切り落とされてしまうだろう。
リガルナはそれでも冷静にセトンヌを睨みつけたまま微動だにしない。
「貴様…！」
「いけません！　セトンヌ。彼を殺してはダメです！」
怒りに任せ、セトンヌはリガルナの首をそのまま跳ねてしまいそうな勢いに慌ててマーナリアがそれを止めた。

セトンヌはその言葉にピクリと反応を示し、マーナリアを振り返る。
「マリア。こいつは多くの人間を手にかけた犯罪者です。その男を殺すなとは一体どういう…」
「…彼には、処罰を下すに相応しい場所を用意してあります。だから、それまで彼を手にかけてはなりません」
「マリア…」
「……」
セトンヌはしぶしぶ剣を鞘に収めると、ジロリとリガルナを睨みつけた。
「…つくづく運のいい奴だ」
「……」
リガルナは何も言わず、ただ吐き捨てるようにそう言って牢獄を後にしたセトンヌとマーナリアの背中を睨みつけた。

それから数日に渡り、リガルナは他の罪人と例外なく毎日のように尋問と殴る蹴る等の暴行を食らわされる事になる。
それがいかに一方的であっても、今のリガルナには手を出すことは出来ないままだった。
そして更に数日後、思いがけない展開が待っている事に、この時のセトンヌもマーナリアも誰も予期していなかった。

第四章：困惑

「なぁ、聞いたぜ。あの赤き魔物を捕らえたんだってな？」
ある日の晩。
重罪を重ねた者の入る牢獄の一角で、マーナリア立会いのもとセトンヌによって尋問を受けていたグレンデルが唸るような声で、しかしその顔はニヤニヤと笑いながらそう言った。
セトンヌはそんなグレンデルを睨むように一度見つめると、すぐに手元の書類に目を落とし、グレンデルの話を無視しようとする。
「お前の過去の犯罪歴はこんな物じゃないだろう。洗いざらい吐き出せ」
「なぁ、聞いてるのか？　あの魔物を捕まえたのかって俺が聞いてるんだぜ？」
ヘラヘラと笑っているグレンデルに対し、セトンヌは苛立ったようにもう一度睨みつけた。
「罪人からの質問は受け付けない。黙秘権もない。私の質問にだけ答えろ」
強い口調でそう言ったセトンヌに、グレンデルは「けっ、お高く止まりやがって…」と悪態をつく。
「婦女暴行、殺人、強盗、監禁…こんなものじゃないだろう。話せ」
「あー、毎日毎日しつこいね、おたくらも。特に…お前」
悪態を吐きながら牢屋の中から「お前」とセトンヌを指差す。そのグレンデルの行動にセトンヌは苛立を隠しきれない。
「俺はお前を知ってるぜ？　セトンヌ・レック…。２０年くらい前にあの火事のあった家の長男だろ」
その言葉にセトンヌは目を見張り、苛立ちが手伝って何かを言おうとした口が思わず閉ざされてしまう。
このグレンデルの言葉に驚いたのはセトンヌだけではない。傍に立っていたマーナリアも同様に目を見張っていた。

「なぜ…私があの家の息子だと知っている…」
「知ってるぜ、全部なぁ。俺は何だってやってる。盗聴、ストーカー、不法侵入…。犯罪と呼ぶべきものはピンからキリまでなんだってな」
「……」
「お前の姉ちゃんは確か、エリーナとか言ったか？　綺麗な姉ちゃんだった」
他に知るはずもない姉の名が上がり、セトンヌは手にしていた書類を握る手に自然と力が入った。それを見ていたマーナリアは堪らず口を開く。
この男は、もしかしたらあの日の事を知っているのではないか…。
「…あなたは、あの日のことを何かを知っているのですか」
マーナリアの問いかけにグレンデルはギョロリとした目を剥いてそちらを振り返る。鉄格子にすがりつくようにして飛びつき、その口元には下品な笑みを浮かべ、不必要なほど舌なめずりを繰り返す。
「何だって知ってるって言っただろ。俺はこいつの姉ちゃんが好きで好きで堪らなかったんだ。だからこっそり後をつけて家を割り出し、押しかけた…」
「な…何…」
セトンヌは困惑したような表情を浮かべたまま、明るみになろうとしている現実を飲み込めずにいる。
何か大きな間違いをしていると、まざまざとそれを突きつけられるようで言葉が出てこない。
そんなセトンヌに対し、グレンデルは一度体を揺らしながら高笑いをすると、笑みを浮かべたままセトンヌを見据えた。
「いいぜ…言ってやる。俺はあの日、お前の姉ちゃんを襲って、家に火を放って、殺してやった！」
決定的な言葉がグレンデルの口から飛び出した。
愕然とした表情のまま冷や汗を流し、その場から動けなくなったセトンヌと、真実を知ったマーナリアは驚愕の眼差しのまま身動き

がとれない。
　そんな二人を前に、グレンデルは下品な笑みを浮かべ牢獄中に響き渡るほどの大きな声で笑い出した。
「ひゃーっはっはっはっは！　お前のねぇちゃん、なかなか良かったぜぇ…？　ただ、あんまり抵抗するから散々遊んでやったあと火をつけちまった！」
　気狂いのように騒ぎ出したグレンデルに、セトンヌの握る拳がワナワナと震えだした。
「……まれ…」
「火をつけて、その場から逃げ出したらガキにぶつかった。月明かりでぼんやりしか見えなかったが、そいつ、おまえらが捕まえたあの魔物だったんだ。俺にしたら都合良かったぜ？　放火殺人の罪はあいつが被ってくれる事になったんだからなぁっ！！」
「…黙れ…」
「良い気味だ。俺がやったのにも関わらず、それで踊らされてるおまえらの姿ときたら、傑作だぜ」
「黙れっ！！」
　ガシャンッ！！　と鉄格子が大きな音を立てたかと思うと、セトンヌは腰に携えていた剣を素早く引き抜きグレンデルに悲鳴を上げさせる余裕も与えず、その喉を一突きにした。
　グレンデルは白目を向き、首元から濁濁と血を垂れ流しながら即死状態だった。
　突然の真実を聞かされ、マーナリアもセトンヌも言葉が出てこない。
　肩で荒々しく息を吐き、ズブッとグレンデルの首から剣を引き抜いたセトンヌはそれを鞘に収めることもなく、地面を見つめたままその場に立ち尽くしていた。
「…セトンヌ…」
　マーナリアが心配そうに声をかけると、セトンヌはマーナリアを振り返ることもなくその場を足早に立ち去っていった。

言葉を失ってしまうのも分からないでもない。
姉がグレンデルに強姦されていた事も、時間を経て知った衝撃はでかい。さらに果ては家ごと、家族まで奪い去ったのもグレンデルだったと言うことも…。
突然、怒りをぶつける先を失ってしまったかのように、セトンヌはやりばのない苛立と動揺にどうして良いか分からなくなっていた。
そんなセトンヌが向かった先は、自室でもなくリガルナの所だった。

第四章：困惑

石造りの螺旋階段を下り、突然訪れたセトンヌに対して驚きの表情を隠しきれ無い兵士のことなどまるで見向きもせず、セトンヌはガシャン！　と派手な音を立てて鉄格子を掴みリガルナを睨みつけた。

「起きろ。リガルナ…」

「……」

リガルナは閉じていた瞼をゆっくりと押し上げると、鬱陶しそうにセトンヌを睨みつける。その顔には連日に渡る暴行からアザや傷が出来ていた。

「…貴様…あの日…」

「……何度も言った。あんたもくどいな…」

「違うっ！　答えろっ！　真実を、真実を答えるんだっ！」

噛みつかん勢いでそう声を荒げたセトンヌに対し、リガルナは半分諦めかけたような冷めた表情で睨み返してくる。

何度同じことを言わせるんだ…。その目はそう言っていた。

突如突きつけられた真実に、セトンヌは混乱して何をどうして良いのか分からなくなっている。

長い間リガルナだけを恨み続け、それが既にセトンヌにしてみれば生きるための理由になっていたと言っても過言ではなかった。

生きてリガルナを討つ。その思いだけでここまできた。それが、恨む相手がお門違いだったなど、すぐに飲み込めるはずもない。

リガルナは呆れたように浅く息を吐くと、かったるそうにセトンヌから視線を逸らし、何度言ってきたか分からない話をもう一度口にした。

「俺はあの日、親から見放された腹いせに家を抜けだして夜の街をふらついていた。大通りの道をそれて裏路地に入り込んだ時、誰かにぶつかって倒れて、起き上がった時にはすぐそばの路地奥から火

の手の上がっている家を見つけた。人の声が聞こえたから家に飛び込んで救出しようとしたが断固として拒まれ、家が傾き始めたから急いで家を飛び出した…」
　まるで何かの本を読んでいるかのような淡々とした口調でそう話すリガルナの言葉に、セトンヌは鉄格子を握り締めていた手が大きく震え始めた。
　リガルナはそんなセトンヌになど気にもとめず話を続けようとしたが、ガシャン！　と鉄格子を揺らしたセトンヌに口を閉ざす。
「…あんたも相当暇だな」
「……」
「毎日毎日同じ事ばかり喋らせて、くだらない。俺の持つ真実はそれだけだ」
「……だ…」
「そもそも、お前ら人間は俺の話など最初から聞くつもりもなかったんだろ？　見世物小屋のようにこんな場所に閉じ込めて、俺が衰弱して死ぬのを待ってるのが本当なんだろ？」
「なぜだっ！！」
「……？」
　セトンヌは傍にいた兵士から牢屋の鍵を奪い取ると、ガチャガチャと荒々しく解錠し牢屋の中に入り込んでくる。そしてリガルナの胸ぐらを掴み上げ至近距離で睨みつけた。
「なぜ貴様じゃない…っ！」
「……っ」
　そう声を荒げ、胸元を締め上げてくるセトンヌにリガルナは息苦しさに目をすぼめ、目の前のセトンヌを睨みつけた。
「なぜ貴様が、俺の家族や家を殺した犯人じゃないっ！！　なぜ、貴様じゃなかったんだっ！」
「セトンヌ！」
　セトンヌを追いかけてきたマーナリアは、リガルナの胸ぐらを掴み上げているセトンヌに声をかけた。だが、セトンヌはマーナリア

を振り返ろうとせず、リガルナを攻め立てる。
荒れているセトンヌを見たリガルナは、何となく事態を把握すると口の端に小さく薄ら笑いを浮かべた。
「……そうか。残念だったな。俺じゃなくて」
「…貴様っ！」
セトンヌは堪らずリガルナの胸ぐらから手を離すと、脇に備えていた剣に手を掛けそれを勢い良く引き抜くとリガルナに向かって突き立てた。
「セトンヌっ！！」
マーナリアが悲鳴にも似た声でそう叫ぶが早いか、ガンっ！　と音を立てて剣は突き刺さっていた。

第四章：困惑

「……殺るなら、ちゃんと殺れよ」
挑発にも似た静かにそう呟いたリガルナ。
セトンヌの突き立てた剣は、リガルナの右首をすり抜け深々と壁に突き刺さっている。剣を突きつけられた事でリガルナの長い髪が半分音もなく地面の上に落ち、その頬には一筋の赤い線が走り抜け薄く血が伝い落ちた。
マーナリアは口元に両手を宛てがい、驚愕した状態のままその場に凍りついていた。
剣の柄を握りしめたまま、項垂れていたセトンヌは肩で荒い息を吐きながら言葉もなくその場に立ち尽くしている。
ほどなくしてジャッ！　と剣を引き抜くと、セトンヌはリガルナに一瞥もくれず背を向けた。そしてやや顔を傾けると力なく呟く。
「……お前の処分は、もう既に決まっている…」
「……あぁ、知ってるさ。好きにすればいい」
「…あとは、いつ実行するかだ…」
セトンヌはそう言い残すとその場から立ち去っていった。
マーナリアはそのセトンヌの背中を困惑したように見送り、完全に姿が見えなくなるとリガルナを振り返る。
「…待って」
兵士が再び牢屋に施錠しようとしていたのを、マーナリアは咄嗟に止めた。
「マーナリア様」
「私も、彼と少し話があるの。鍵をこちらへ渡しなさい」
「し、しかし…」
「大丈夫です。あなたは席を外しなさい」
「は、は、はい」
マーナリアに言われるがまま、兵士は鍵をマーナリアに手渡すと

階段を登ってその場から退席する。
　その姿を見送ったマーナリアが、自分に向けられている視線に気付きリガルナを振り返った。
「…あんたまで、俺に何かあるのか？　疲れてるんだ。俺のことはもう放っといてくれ」
　気怠そうにそう言うリガルナに、マーナリアは扉をあけて牢屋の中に入ってくる。そしてリガルナと一定の距離を置いた状態で真っ直ぐ向かい合う。
「リガルナ…」
「……」
　リガルナを真っ直ぐ見つめ返すマーナリアに対し、リガルナは視線を合わせようとはしない。気怠そうに瞼を伏せ、黙りこむ。
　自分の前では言葉を発することも拒否されている。あの日の出来事はそれだけリガルナの心に深く埋められないほどの大きな傷を作ってしまったのだろう。
　しかしマーナリアは気後れしそうになりながらも、リガルナに話しかけた。
「あなたに、とても大切な話があるの」
「……」
「何も言わなくてもいい。私の言葉はあなたに届かない事はもう分かっている…」
「……」
「あなたの処罰は、もう既にここに入った時点で決まっています」
「……くどい」
　唸るようにそうとだけ呟いたリガルナに対し、マーナリアは力なく一度小さく頷くと言葉を続けた。
「そうね…」
「……」
「…リガルナ…。あなたのしてきたことは決して許されるべきことではありません。でも、私たちがあなたにしたことも、許されるこ

とではないわ」
「……」
「先程、あの日起きた事件の事を、あなたの身の潔白を明らかにする証言があったの。…真犯人はもうすでにこの世にはいません」
何も話してこようとはしないリガルナに対し、マーナリアは胸元に握り締められた手に力がこもった。

第四章：困惑

「それでも、潔白だったあなたはもうすでに多くの罪を背負いここにいる」
「……」
「…あなたの処分は、公開死刑です。これから刑の執行日を審議することになるのですが、おそらくはこの2、3日の内に執行されるはずです」
リガルナは一向に微動だにする気配はない。むしろその刑を甘んじて受け入れているのだろう。
マーナリアは一つの質問を投げかけてみることにした。その返答次第では今後の身のふりをどうするか、リガルナを試すための質問だった。
「…リガルナ」
「……」
「やり残したことはありませんか？　思い残すことはありませんか？」
「……」
「あなたの心残りは…ありませんか…？」
「……」
マーナリアの質問に、答えは返ってこない。マーナリアはそれでも、しばらくその場に立ちリガルナの返答があることを望んで立っていた。
二人の間に不気味なほど静かな時間が流れ、重苦しく感じるほどの空気が立ち込めている。
一体どれだけの時間が過ぎたのか分からないくらい長い沈黙を守り続けているリガルナに、マーナリアは諦めの色を見せ始めた頃になってようやくリガルナはゆっくりと口を開いた。
「……アレア…」

「……」
「……君に、もう一度だけ逢いたい…」
「……リガルナ」
小さすぎるほどのその呟きだったが、それでも辺りは物音一つしないほど静寂だった為にしっかりとマーナリアの耳に届く。
リガルナのその言葉があまりにストレートで、マーナリアの胸を切なく締め付ける。
返答があったことの喜びと、アレアを想う純粋なリガルナの気持ちに、マーナリアは自然と頬に涙が伝い落ちる。
マーナリアは涙を拭いながら、小さく頷いた。
「…分かったわ…リガルナ…」
必ず会わせてあげよう。マーナリアは強くそう心の中で誓った。
信用されていない事は分かりきっている。これ以上の言葉を言ってもリガルナはマーナリアの言葉を信じたりはしないだろう。ならば、行動でそれを示すのみ。
マーナリアは望んでいた通りの答えを聞けたことに満足し、その場を離れた。

第四章：困惑

部屋に戻ったマーナリアは、先にもどっているはずのセトンヌの姿を探した。だが、彼の姿はどこにも見当たらない。

「部屋に戻ってない…。どこに行ったの？」

マーナリアは不安定な状態のセトンヌを心配し、もう一度部屋を出て近場をぐるりと見てまわることにした。

目の前でサラサラと音を立てて水の流れ落ちる噴水の音と、サワサワと吹く緩やかな風に木の葉の擦れる音が辺りに響きわたっている。

夜はだいぶ深けている。宮殿の中に動き回っている者は見回りの兵士くらいなものだろう。

部屋の前の廊下を通り過ぎ、上へと続く階段をマーナリアを見つめた。

この上の階は、セトンヌが特に気に入っていた場所。レグリアナ王国の外れにあるセントラムズ教会へ通うことが出来ない分、気軽に祈りを捧げられるようにと建てられている礼拝堂がある。

マーナリアは階段を登りその礼拝堂へとやってくると、その入口は閉じられることなく半開き状態だった。

「……」

そっと扉に手をかけ、中を覗き込むと月明かりを明り取り窓から取り込んで光の差している女神像の前に佇んでいるセトンヌの姿があった。

「……セトンヌ」

呟くほどの声でも、誰もいない礼拝堂の中には十分聞こえるほどのマーナリアの声にセトンヌはピクリと反応し、そしてゆっくりと振り返った。

「…マリア…」

「ここにいたんですね。部屋にいなかったので心配しました」

「……すみません」
言葉数がいつもよりも少なく、その顔に以前のような笑みも元気もない。
マーナリアはそんなセトンヌの傍に歩み寄ると、そっとその背中に手を置いた。それをきっかけに、セトンヌは黙していた口を開く。
「奴が、私の家族を奪ったのではないと言う事は、本当に事実なんでしょうか」
「……そう…ですね」
「なら、私は今まで何をしてきたのでしょう…」
「…セトンヌ？」
心配そうに見上げるマーナリアの視線を振り返りもせず、セトンヌはギリギリ…と両手にきつく拳を握り締める。その眼差しは困惑と戸惑いに対する苛立からか、鋭く光っていた。
「私は、あいつを討つことで全てを終わらせるつもりでいた…！」
「……」
「なのに、今になってその現実が間違っていたなど、誰が理解できると！？」
ダン！　とセトンヌはその場に両膝を着き、悔しげに両拳を振りあげて地面を思い切り叩きつけた。
「信じてきた事が今更違っていただなんて！　私は、私のしてきた事は何だったんだっ！」
「セトンヌ…」
「奴は、あの日のことを潔白だとしても多くの罪を重ねてきた。それは許されることではない。私はあいつを恨む理由などあまたあるはずだ！　なのに、なぜ、こんな…」
きつく瞼を閉じ、握りしめている拳が小刻みに震え、セトンヌは心の中に生じた葛藤に苦悶している様子がよく分かる。
マーナリアはその場にしゃがみこみ、そんなセトンヌの背に手を置いて心配そうにのぞきこんだ。
分かっている。セトンヌがこんなにも苦しんでいるのには、彼の

優しさがあってこそだと言う事は。そして恨む相手を間違えていた事でリガルナを追い詰めた事の罪悪感がある事も…。
ただ、突然突きつけられた真実に方向転換が出来ないだけ。だから苦しんでいる…。
「憎しみに、憎しみをぶつけても何も生まれません。ただそこには更なる憎しみが生まれるだけ」
「……っ」
「あなたはそれに気づけたのです。だから苦しくて、戸惑っている…」
「……」
「難しい事だと思います。でも、ありのままを受け入れることもまた、一つの道です」
マーナリアの言葉は礼拝堂の中に響き渡る。その声は穏やかで取り乱していたセトンヌの心にもそっと降り注いだ。
「間違いは誰にでもあります。精一杯の間違いはしても良いのです。だって、それが人間ですもの…」
「……」
「あなたは本当に優しい人ですね。自分の過ちに気付きそして悩んでいる。それは人として素晴らしいことだと思います…」
セトンヌは言葉なく、静かにその場に佇んでいた。
マーナリアはそんなセトンヌを静かに見つめていたが、その場にゆっくりと立ち上がると最後に一言口を開く。
「……ここは冷えますから、後で必ず戻ってきてくださいね」
そう言うと踵を返しセトンヌをその場に置いたままマーナリアは立ち去った。
一人で考える時間が必要だ。その為に自分は傍にいてはならない。セトンヌの気持ちを汲んで、マーナリアはその場から立ち去ったのだ。

第四章：困惑

「赤き魔物の公開死刑は、すぐにでも執り行なうべきです」
「そもそも、こんな審議する必要などあるのですか？　もう奴の死刑は確定して、皆が奴の死を望んでいる。例え後ろに伸びたとしても、奴は遅かれ早かれ死ぬ運命にある」
数日後。
多くの審判員を前に、リガルナに対する公開処刑日の審議が執り行なわれていた。
しかし、この場にいる多くの裁判官のほとんどが、明日にでも処刑を行うべきだと口を揃えて言っている中で少数の人間が反論意見を述べていた。
「しかし、この事の発端を引き起こした原因は我々にあるのではないでしょうか。彼をあの姿に変えさせた原因を作った男はすでに処刑されておりますし…」
「ではそなたはトルタン大陸に住んでいた多くの市民たちの死を見て見ぬふりをせよと申すのか」
審議会場は怒号のような声が四方から上がっている。
半数以上がリガルナの処刑日をすぐにでもと言っている以上、その意見がまかり通るのが当然ではある。だが、反論意見もただでは引かない為、事は堂々巡りとなっていた。
一向に話が進まない中で、固く口を閉ざしていたマーナリアが口を開いた。
「みなさん。静粛に」
マーナリアの一声に、それまで飛び交っていた意見がピタリと止むと一気に会場内は静まり返った。
「彼の死刑は決まっています。これはもはや覆ることはないでしょう。この場での審議、そして全国民の望みどおり、刑は明日執行致します」

マーナリアの決定的なその発言に、反論していた意見の者は黙りこみ賛成派は一様に深く頷き満足そうにしている。
マーナリアは隣に立っているセトンヌをちらりと覗きみると、セトンヌはいつものような毅然とした態度ではなく視線は下を向き覇気が感じられない。
「この審議はこれで終了とします。明日は夕刻、日の入り前に処刑場へ参列してください」
その一言に、その場にいた全員が退席して行く。徐々に人が捌け誰もその場にいなくなった頃、その場に留まり続けていたセトンヌが口を開いた。
「マリア…」
名を呼ばれたマーナリアがそちらを振り返ると、セトンヌはマーナリアに視線を送ることなく審議会場の一点をじっと見つめている。
「あなたはこの判決に、唯一反対していたのではないですか…？」
その言葉に、マーナリアは一度視線を下げ再びセトンヌを見つめると浅く頷いた。
「えぇ。そうです。今も、その気持は変わっていません」
マーナリアの言葉に矛盾があり、セトンヌはバッとマーナリアを見つめ返した。
その表情はどこか苛立にも困惑にも似た表情を浮かべている。
「では、なぜ執行するなどと…」
「その執行に、私は賭けているからです」
「賭け…？」
「…ねぇ、セトンヌ。あなたは今、どんな気持ちでいますか？」
「……私は」
椅子に腰掛けていたマーナリアはゆっくりと立ち上がると、セトンヌと同じように会場をぐるりと見回した。

第四章：困惑

そしてややあってから口を開く。
「彼が、あなたの家族を奪ったのではないと言うこの事実を、どう思っているの？」
「……分かりません」
「……」
苦渋のように漏らした言葉が、会場内に響き渡った。
セトンヌは自分の掌を見つめ、その手を睨みつけるように見つめる。
「ずっと、奴を討ち取る事だけを胸に今まで生きてきました。今更、違うのだと言われてもその真実を受け入れる心の準備など欠片もない…。私には、奴を恨み続ける事しか出来ない」
「……セトンヌ」
「ですが…、それでも、私の中に戸惑いが生じているのは間違いありません。彼を追いやったのは他でもない、我々だったのだと言う事も…」
静かに話すその言葉に、マーナリアは視線を一度手すりにかけている手に落とし、小さく頷く。そしてセトンヌを振り返ると、セトンヌは苦しそうに見つめていた手のひらをきつく握りしめた。
「私は今どうすれば良いのか分かりません。生きてきた目標を失い、ただ戸惑うばかりで…」
「……いいのです。セトンヌ」
「……？」
「迷いなさい。迷って、迷って…その先に出た結果は、きっとあなたに新たな道を作ってくれるはずです。それがどのような結果でも…」
「…マリア…」
マーナリアは小さく微笑むと、きつく握り締められているセトン

ヌの手をそっと握り返した。
「私が今のあなたにアドバイス出来ることとすれば、それは…許してあげることです」
「許す…？」
思いがけないその言葉に、ぴくりとセトンヌの表情が動いた。
マーナリアは静かに微笑んだままそんなセトンヌを見上げている。
真っ直ぐに、迷いないその眼差しは困惑し戸惑っているセトンヌに注がれていた。
「彼を許してあげることが、きっとあなたにも良い結果を生むはずです」
「……しかし」
「…そうね。すぐには難しいことでしょう。でも、どんなに時間がかかっても構わない。何年かかっても何十年かかってもいい。彼を許すことが出来たとき、あなたは救われるはずだわ」
「……」
「多くの罪を重ねた彼を、どう許せばよいのか分からないでしょう。でも、彼のありのままを見つめ、受け入れられる事が出来ればおのずと許せるはずです」
マーナリアの言葉は、セトンヌの胸に素直に落ちた。
それ以上の言葉が出てこず、押し黙ってしまったセトンヌに対し、マーナリアはそっとセトンヌを抱きしめた。
「…セトンヌ…。ごめんなさいね…」
「……マリア？」
「私は、重罪を重ねた彼を許し、私の持つ力の全てを明日使い果たすつもりです。いずれは生まれるであろうわが子に受け継がれるはずの力、その力の全てを私は明日彼の為に使うわ」
「……」
「…これが、私が彼に出来る唯一の罪滅し。これまで追い詰めてきた彼への償いです。何の力も持たない私が、この国に存続できるかどうか分かりません。あなたは、それでも構わないでしょうか。そ

んな私でも…」
セトンヌはそんなマーナリアをしっかりと抱き寄せた。
女王としての、巫女としての力など最初から目的としていなかった。彼女さえいれば他に何もいらないのだと。
「…もちろんです。マリア…。私にはあなた以外何もいらない」
「……ありがとう…」

第四章：困惑

その頃、牢獄で一人縛り付けられたままのリガルナは薄く瞳を開いたまま、どこを見ているともなく一点を見つめたままぼんやりとしていた。

この牢獄で、唯一外からの光と風を吹き込む小さな鉄格子付きの小窓からは、真っ白な満月の淡い光が暗い牢屋の中に降り注いでいる。

処刑は明日執行される。その宣告は、先程兵士から聞かされた。

この時を待っていた。この世の全てから解放され、自分という存在が消えてなくなる為のその瞬間が、いよいよ目前にまで迫っている…。

リガルナは己の死を受け入れ、それをただ望んでいた。

「……」

死を望んでいる。だが、その反面でそれを止めるものもあった。それは、紛れもないアレアの言葉。

『あなたには生きて欲しいんです…』

いつだったか、夢の中でそう囁くように言っていたアレアの言葉が頭から離れない。

なぜ、生きて欲しいと望んでいるのだろう。生きているだけで周りの人間達からは嘲られ、煙たがられ、誹謗中傷を受け、冷たい眼差しと怯えきった瞳を向けられる…。

それが、堪らなく耐え難かった。今ではもう何もしていないのにとは言えないが、それでもその仕打ちだけは酷く心を傷つける。

だから自分は人々の嫌う自分になることで全てを忘れようとしていた。人を殺めることで、その傷を消そうとしていた。

人が一人消えるたびに、自分を傷つけるものがいなくなる。だか

ら傷も消えて行くはずだと…。
しかし、実際は違っていた。人を一人手にかけるたびに、また別の場所に新たな傷が付き、その溝はどんどん深まっていた。
今なら、人を殺めた直前直後の頭痛が何だったのか分かる。それは、自分の中に無理やり目を背け追いやってきた“善良”の心が、自分のする行動に対する拒否反応で頭痛がしていたのだと言うことが。
リガルナはふっと瞼を閉じる。
「……今更…」
そう呟き、再び瞼を開く。
「…今更、もうどうにもならないさ」
自分に語りかけるようにそう呟いた言葉が虚しく響き渡り、そしてそれは酷く悲しい。
サァ…と吹きこむ冷たい風に、リガルナは顔を持ち上げ小窓の方へ視線を投げかけた。白い月が静かにそこに佇み、リガルナを見下ろしている。
風を感じ、草木の匂いを嗅ぎ、抜けるような青空も、そしてこの満月も星空も、もう二度と拝むことは出来なくなる。
それでいい。そうする事で何もかも落ち着いていくのだから。
再び緩く髪を揺らす風が流れこんでくると、リガルナはふっと瞼を閉じた。

―――　生きて欲しいのは、あなたを愛してるから…。

「！」
ふと、どこかからか聞こえてきた言葉に目を見開き月を食い入るように見つめる。
気のせいだろうか。幻聴だったのだろうか…。

――――　きっと生きて…。生きて欲しい…。私のために…。

「…アレア！」

ガシャン、と鎖を鳴らし驚いたような眼差しで小窓の方へ動こうとしたリガルナに、突然動き出そうとした事に驚いたような顔を浮かべた兵士が声を上げる。

「うるせぇぞ！　静かにしてろ」

「……」

リガルナは兵士の言葉など一切耳には届いていなかった。ただ、小窓から覗く満月を見つめ続ける。

今の言葉は紛れもないアレアの言葉。

幻聴でもいい。何でも構わない。ただ、その言葉にリガルナの心は震え切なさを覚えさせる。

山からアレアの遺体がこのレグリアナに安置されている事を知らないリガルナにしてみれば、あのまま山に残してきたアレアの事が気がかりになる。

こうなる前に、もう一度その姿を見たかった。そして、きちんと別れを告げなければならなかった。

「……っ」

逢いたい…。そう思わずにはいられなかった。

どうすることも出来ないこの現状に、リガルナは諦めたようにその場に力なく項垂れた。

せめて…ほんの一言、さよならだけでも…。

リガルナはきつく瞼を閉じ、迫り来る悲しみを一人堪えていた。

第四章：困惑

部屋に戻り、先に眠っていたマーナリアを見つめたままベッドサイドに腰を下ろしていたセトンヌは、眠れずにいた。

ギシ…とベッドから腰を上げてバルコニーへと向かい、白々とした月光を降り注ぐ月を見上げる。

許すとは、どういう事なのだろう…。これまでの残忍な行動を取ってきたリガルナを、どう許せば良いのだろう。そもそも、許しても良いのだろうか？　罪人は罪人。許す許さないの話ではないのではないか…。

マーナリアのアドバイスに、セトンヌは思い悩んでいた。そして自分が明日、リガルナを処刑する執行人である事で、真実を聞かされ戸惑いを隠しきれ無い内にどんな顔で会えば良いのか分からない。

お門違いで責め続けてきたリガルナへの罪悪感。どれだけ長い間彼を追い詰めてきただろう。

セトンヌは溜息を一つ吐くと、月から視線を手元へと落とした。

例え、自分がリガルナを許せる時が来たとしても、彼は周りを許しはしないだろう。それだけの仕打ちを受け続けてきたのだから…。

「……私は、どうしたらいいのか分からない」

セトンヌは自分の手を見つめ、そしてそれをギュッと固く握り締める。

「このままあいつをこの手で処刑したとしたら、私は…後悔するかもしれない…」

そう呟いて、一度かぶりを振った。後悔なら、もうとっくにしている…。そう言った方が正しい。

今更そんなことを言ったところで取り返しの付く問題ではない事は十分に分かっている。過ちを正すには遅すぎた。そして何より無知過ぎた…。

恨んだままでいられれば良かった。あんな場所で、思いがけずに

真実など聞かされていなければ良かったのに…。
ダン、とバルコニーの手摺を殴るようにしながら掴むと同時に、ふと思い出すことがあった。
「……マリア…」
セトンヌはその場から背後を振り返り、暗い部屋で先に休んでいるマーナリアに視線を向けた。
微かにそよぐ風に、薄絹のカーテンがゆらめきその視線を遮っている。
マーナリアは、明日の処刑に賭けている。そう言っていた。だが、一体何を賭けているというのだろう。
刑が執行されれば、リガルナはこの世に存在しなくなると言うのに…。
「君は何を賭けているんだ…」
その呟きはマーナリアに届くことはない。
セトンヌはこの日、最後まで眠りにつくことが出来ず一夜を過ごしていた。

最終章：離別

雨が降っていた。
朝から暗く、重たい雲が空を覆い隠しシトシトと音のない静かな雨を降らせている。
窓から、外を眺めていたマーナリアは無心に空を眺めていた。
宮殿内も、そして城下も、皆俄な安堵の色を見せひた隠しに隠そうとしていても隠しきれ無い喜びの色を滲ませている。
そんな彼らとは裏腹に、この雨のようにマーナリアの心は沈んでいる。そしてそれはセトンヌも同じだった。
「マリア…」
「……いよいよですね」
「……」
短い会話があり、そして再び沈黙を守る。
しかしややあってセトンヌがその沈黙を破った。
「マリア。一つ教えて下さい」
「……？」
「今日、あなたが賭けていると言っていた、あれは…」
そう問われ、マーナリアは窓の外を見ていた視線をゆっくりとセトンヌに向けた。
セトンヌはその眼差しを真っ直ぐに見つめ返し、マーナリアもまたそのセトンヌをじっと見つめている。
「……そうね。リガルナに対する復讐心の緩んだあなたには、言ってもいいでしょう」
しばらくしてから、マーナリアは静かにそう答えると椅子から立ち上がった。
そしてドアの傍まで歩いてくると、セトンヌを振り返る。
「…付いてきてください」
「……」

セトンヌは言われるままにマーナリアの後をついて歩いた。
周りに悟られないよう注意を払いながら地下へと続く階段を降りていくマーナリアに、セトンヌは疑問を隠しきれ無い。
地下は明り取り窓もない暗く冷たい場所。
マーナリアは蝋台から持ってきていたランプに明かり移し、通路の奥へと進んでいく。そして、ある部屋の前まで来た時、足を止めセトンヌを振り返った。
「まだ、この事は誰にも口外しないで下さい」
マーナリアにそう口止めをされ、セトンヌが頷くとマーナリアはゆっくりとノブを捻ってドアを開いた。
中に入ると、マーナリアの手にしたランプの明かりに浮かび上がる、細やかな装飾の施されたガラス製の棺に大切に入れられているアレアの姿があった。その姿に、セトンヌは思わず目を見張る。
「……彼女は…」
「彼女は、リガルナの良き理解者であり、彼と心を通わせていた唯一の人です。ある日彼女は私に助けを求めてきました。だから私が兵士に頼んでここに連れてきてもらったの」
「リガルナと…。では、あの日、奴が言っていた言葉は…」
「えぇ。そう。全て彼女の事。弱き者を追い詰める…。彼女はサルダンと接触し、そして彼は彼女を殺してしまった…」
「……」
「それはみな、私が差し向けた意図的な作戦だと、リガルナは思っているようだけれど…」
マーナリアはやや寂しげにそう呟くと、セトンヌは言葉を失う。

最終章：離別

目の前で眠るようにあるアレアの亡骸には、傷ひとつなく綺麗なままの姿。しかも、腐食を恐れ氷漬けにまでされている。
それほどまでにリガルナがアレアを大切に想い、いかに守りたかったかが分かる。
「彼女が、今回の鍵だと…？」
「えぇ。彼女には強い残留思念が残されています。私は、彼女のメッセージを彼に伝えなければなりません。そう約束をしたの」
「約束…」
セトンヌがそう繰り返すと、マーナリアは僅かに視線を下げ小さく首を横に振った。
「いいえ…違うわ。約束もしたけれど、これは、私自身が彼に対する罪滅しの一つなの…」
「マリア…」
「あの日、私の思っている事とは違う方向へ向き始めた現実の誤解を解くことは私には出来なかった。そのせいで彼をここまで追い詰め、罪の無い人々を死に追いやった。全てはあの日の、彼の心を裏切った私の、せめてもの罪滅しなの…」
「……」
マーナリアは寂しげにそう呟き、アレアを見つめていた視線をセトンヌに向けた。その目は潤んだように揺れている。
「セトンヌ。あの日の事、あなたはハッキリと覚えているでしょう？」
「……」
リガルナが宮殿内にいて、兵士に取り押さえられていたあの時。
マーナリアが必死になってリガルナを庇い、それでも庇いきれずに追放したあの日の出来事は、セトンヌも良く覚えている。
あの時は何の疑いもなく、リガルナが自分の家族を奪ったのだと

信じていたからこそ、マーナリアが庇う意味が理解できずにいた。
しかし、今なら分かるような気がする。
エレニアは、自分の弱さから何かと問題のあるものは様々な理由をこじつけ、いかに残酷だと言われるような手段を使ってでも排除する冷徹な部分も持ち合わせていた。
そうだと思い込んだなら、もうそれしか見えない。マーナリアの言葉でさえもその耳に届かないほどだった。
「…神は、真実だけを述べます。決して曲がった真実を語ったりはしません」
「……それでは、エレニア様は…」
「……私は、それでもお母様を恨むことはありません。お母様はご自身と、この国を守ると思えばこその判断だったのは分かっているから…」
「……」
「…彼女の言葉は、きっと彼も、それに今日集まる全ての人の心に届くはずだと私は信じています。それが、私の賭けです」
マーナリアの言葉に、セトンヌはマーナリアがリガルナを処刑する判断は欠片もない事を悟った。
むしろ、死ではなく生を与えるのだと。
「……しかし、今日集まる人間たちに届いたとしても、それ以外の人間には…」
セトンヌの言葉に、マーナリアは小さく微笑んだ。
「言霊の力は他の何よりも強いのだと言うことを、もうあなたは知っているでしょう？　もし、私の賭けが成功したのだとしたら、今日集まる多くの人間たちがそれを周りに言うはずだもの。彼は、人を愛する事のできるただ不器用なだけの人間だと…」
「…しかし…彼をそう簡単に受け入れるでしょうか？」
「…そうね。彼を受け入れようとする者とそうでない者と分かれるでしょう。むしろ、そうでない者の方が圧倒的に多いはず。今はそれでも仕方がありません。ただ、その後、彼がどうするかで次第に

受け入れてくる人間も増えてくるはずだわ。私は、そのきっかけを与えるに過ぎないだけですもの。その後の事は、彼が自分で決めることだわ」
「……やはり、あなたはリガルナに生を望んでいるのですね」
「えぇ。彼にとって、何が一番の極刑であるか。それは生きると言うことです。彼は生きることでこれまでの罪を償わなければなりません。これまで以上に苦しい事も辛いことも沢山あるはずです。でも、それを乗り越えて行かなければならないわ。それは、死ぬことよりも辛く、重い罰だとは思いませんか？」
マーナリアの言葉に、セトンヌはただ何も言えず静かに目の前に眠るアレアを見つめていた。
アレアが語ると言う言葉。それがどんな言葉なのかわからないが、その言葉がリガルナだけでなく自分たちを含め多くの人間の心に響くだけの力があるのかどうかが気になって仕方がない。
「生きていく内に見えてくる自分自身と向き合うことはとても恐ろしいものです。でも、それを乗り越えて行くことで、その先には彼にとって手放せない最高の財産が残り、生きることが喜びになる瞬間があるはずだわ。例えそれが今できなくても、その末の末まで…」
マーナリアはしばしアレアを見つめていたが、やがてセトンヌを振り返る。
「…セトンヌ。そろそろ時間です。行きましょう」
「…はい」
マーナリアはそっと扉を締め、セトンヌと共にその場を立ち去った。

最終章：離別

曇り空は変わらず、ただ雨は止んでいた。
何千人と入ることの出来る巨大な処刑場には、リガルナの死を望む者たちが彼の死に様を一目見ようと押しかけている。
会場内に入れなかった者は会場外に群がり、その時を祈るようにして待っていた。
薄暗い天候に、屋外に設置された処刑場は暗い影を落としている。
半円を描くように席の設けられた会場には空席などなく多くの市民たちが詰めかけている。その席の対称にはマーナリアや裁判官が座る席が設けられ、その周りには多くの兵士や魔術師たちが列に並んで物々しい雰囲気をかもしだしている。
マーナリアが席に着くと、その会場内は賑わっている。
「いよいよあの赤き魔物もお終いか」
「この瞬間が見れるなんて嬉しいよ。奴が死んだ瞬間から世界は平和になるんだから」
「これでやっと安心して暮らすことが出来ると思うと、気持ちが晴れるね」
思い思いの言葉があちらこちらから飛び交っている。
その言葉を耳にしたマーナリアは思わず視線を下げてしまった。
「マリア…」
隣に立っていたセトンヌがそう声をかけると、マーナリアはすぐに顔を上げ小さく笑みを返す。
「大丈夫です。これが皆の普通の反応ですから」
そう言った時、やや遅れてやってきたグルータスも顔に満面の笑みを浮かべ大きな体を揺すりながら歩き、セトンヌとは逆の、マーナリアの隣に立つ。
「いやはや、ここまでなんと長かったことでしょうな。やっと安心して眠れますわい」

「……グルータス」
「エレニア様もさぞお喜びになるでしょうな」
ガハハ、と声を上げて笑うグルータスに、マーナリアは小さく溜息を吐いた。
そんなマーナリアの様子に気づく様子もなく、グルータスは朗らから笑みを浮かべたまま辺りを見回し、果ては傍にいた兵士や魔術師達と気さくに談笑さえしている。
分かっていても、あまりにも多いその反応に正直、マーナリアは悔しさに泣きそうになってしまう。
相手を良く知ろうともせず、噂だけに流されそれを信じて疑わない人々。だが、それが真っ当な反応であることは確かなことだった。悪い噂や話ほどよく広まり、浸透していくものだ。
マーナリアはきつく膝の上に置かれていた手を握り締め、人々のその思いを変えられる事を強く望んだ。
すぐでなくてもいい。少しずつでも構わないから、どうか、彼を受け入れてくれますように…。そう祈る思いでその場に座っていた。
明るいような、重いような、複雑な空気の立ち込める中でリガルナの刑の執行が始められようとしていた。
会場席の設けられている中央部分は大きく開け、中央には正方形の石台が一つあるばかり。その石台の上はどんなに洗っても取れない黒ずんだシミが無数にも残っており、それは過去にこの場で公開処刑された人間たちの血の跡だった。
太く、大きな鉄格子がガラガラと鈍い音を立てて開くと、その暗がりから兵士によって後ろ手に結ばれたリガルナの姿が現れる。
その姿が公の場にさらけ出されると同時に、周りの観衆たちはリガルナに向かって一斉に罵声を浴びせかけた。
「人殺し！」
「悪魔！」
「魔物なんざさっさとくたばれっ！」
飛び交う容赦のない言葉の数々に、リガルナは反応を示さなかっ

た。いや、実際にはその閉じられた唇の奥でギリギリと歯を食いしばっていた。
「おら、さっさと歩け！」
一瞬歩調の緩んだリガルナに対し、彼を連れて出てきた兵士が乱暴に体をどつくと、フラフラっと数歩前に踏み出した。

最終章：離別

ここ数日食事も取らず水分も満足に得て居ないため体が思った以上に弱りかけている。

リガルナはふらつく足取りで石台の中央まで来ると崩れるようにその場に両膝を着いた状態で落ち着いた。

「あれだけ強大な力を秘めていたあの魔物も、動きや魔力を抑えられては普通となんら変わりありませんな」

グルータスは口の端を引き上げ、さも馬鹿にしたかのようにそう呟く。

マーナリアはそんなリガルナの姿を見ていられず、思わず目を閉じうつむいてしまった。

リガルナが出てきた扉の奥からは、続けて長剣を片手に握りしめたセトンヌが現れ、リガルナのかたわらまでゆっくりとした歩調で歩み寄る。

リガルナは両膝を地面に着き、顔は俯いたまま微動だにしない。そんなリガルナを見つめ、セトンヌは手にしていた長剣をきつく握りしめた。そしてマーナリアに視線を送ると、その視線に気がついたマーナリアは小さく頷いた。

アレアの遺体がここに届くまでの間、今まで彼を恨み、この処刑を執行する演技をして欲しい。そう言っていたのはマーナリアだった。

セトンヌはマーナリアから視線を再びリガルナに移すと、リガルナは相変わらず微動だにすることなく静かにその時を待っているかのようだった。

「……リガルナ…」

セトンヌの呼びかけに、リガルナは答えない。

その間も観衆からの罵声は留まることを知らず、ますますエスカレートするばかりだった。

セトンヌはギュッと剣を握りしめると、それを大きく上空に持ち上げる。するとそれに合わせ、観衆たちからは一層一際大きな声で「殺せ」と声を合わせた言葉で湧き上がった。
そしてセトンヌがその剣を振り下ろそうとした瞬間、マーナリアの声が辺りに響き渡る。
「お待ちなさい」
その言葉に、セトンヌはホッとした表情を浮かべ手にしていた剣を下ろし、傍にいた兵士や観衆たちは一瞬口を閉ざすもどこからともなくザワザワと疑問視するようなざわめきが沸き起こった。
リガルナは突然止められた事にピクリと反応を示すと、ゆっくりとその顔を上げる。
その視線の先にはいつの間にか下に下りて来ていたマーナリアの姿が映る。その瞬間ギロリと鋭い睨みを利かせる。
マーナリアは一瞬その視線に怖気付きそうになるも、気を撮り直すようにその目を見据えゆっくりと歩み寄ってきた。
「…リガルナ」
「……何だ。もう俺に用はないだろ」
「いいえ。あるのよ」
マーナリアは静かにそう言うと、すっと観衆たちを見渡した。
「皆さん。この者が旅立つ前に、一つ見ていただきたいものがあります。これは、どうしてもあなた方に見て頂きたいものでもあり、また、旅立つ彼への最後の言葉としてお聞きください」
そう言ったマーナリアの凛とした声は、会場内に響き渡り、観衆たちは一瞬言葉を飲み込むもチラホラと小さなざわめきも上がる。

最終章：離別

リガルナはその言葉に目を細め、ジロリとマーナリアを睨みつける。
「…何の真似だ」
「リガルナ。旅立つ前に、その耳を傾けなさい」
そう言ったマーナリアの後ろから、兵士が４人がかりで支えられガラスの棺に入れられたアレアが運び込まれてくる。そのアレアの姿を捕らえた瞬間、リガルナは驚愕に目を見開きマーナリアに対して噛み付く勢いで声を上げる。
「なぜアレアがここにいるっ！　お前…っ」
押さえこまれる兵士の手すら抵抗するような勢いでマーナリアに掴みかかろうとするリガルナに、マーナリアは冷静な眼差しを向けた。
「静かになさい。リガルナ。彼女の亡骸がここにあるのは、彼女が私に助けを求めてきたからです」
「何…っ！」
マーナリアはアレアの棺を自分の前に持ってくるよう視線で指示すると、兵士たちは棺をマーナリアとリガルナの間に静かに下ろした。
「アレアッ！」
「動くなっ！」
山に置いてきたはずのアレア。一目見て、せめて最後の別れを望んでいたリガルナは、そのアレアの棺に向かって動こうとするも後ろから数人かかりで押さえつけられ身動きが取れない。
マーナリアはそのリガルナを冷静な視線で見つめていたが、やがてその目尻をふっと緩ませた。
「…リガルナ。私の話を今だけは聞いて欲しいの」
「ふざけるなっ！　お前の話など聞く耳など無いっ！」

「あなたと彼女に関わることよ。これを聞かなければ、あなたは一生悔いるでしょうね」
「何だとっ！」
マーナリアはふっと息を吐くと、静かに口を開いた。
「…リガルナ。あなたは、彼女を大切にしていたのですね。そしてそれは今も同じ」
「お前には関係ないっ！」
「そうね…。少し前までは確かにそうだった。でも、彼女が私に助けを求めた以上、私にも関係があることよ」
「ふざけるなっ！」
聞く耳を持とうとしないリガルナに、セトンヌは手にしていた剣の柄をぐっとリガルナの喉元に押し当て圧迫し黙らせる。
「静かに聞け。リガルナ」
「……っ」
マーナリアはそれを見て、静かに頷くと話を続ける。
「リガルナ…。聞いて。彼女は、死して尚強い残留思念をその体に残している。それは、あなたに伝えたいことがあるからよ」
「……っ」
「あなたがあのまま死山に彼女を置いておいても、彼女の言葉の多くはあなたには届かない。それを知ったから、あなたにその言葉を伝える術を持っている私のところへ、彼女は助けを求めに来たのです」
その言葉に、リガルナは酷く凶暴な眼差しを向けていたその視線を俄に緩ませた。
少しは信用してくれている。そう察知したマーナリアは内心ホッと胸をなで下ろす。
「死出の旅に向かう前に、まずは彼女の言葉を聞きなさい。……いいですね？」
マーナリアは努めて静かにそう言うと、リガルナの体からふっと力が抜け抵抗する様子を見せなくなった。

それを見たセトンヌは、リガルナの喉元に押し当てていた剣の柄を取り払う。

最終章：離別

マーナリアは大小様々な鈴が取り付けられた杖を手に、大きくアレアの上に手をかざし始める。口の中で小さく唱えている詠唱の言葉はこの国の巫女だけが知り得る特別な言葉。

瞳を閉じ詠唱を続けているマーナリアの言葉に呼応するかのように、アレアの棺の回りが光輝きはじめる。

暗かったはずの屋外が、突如昼間の光を取り戻したかのように眩しく光り輝き始めると横たわっているアレアの体からユラリ…とオーラのような物がゆらめき立った。

マーナリアの力を借りて、それはやがて棺を越えリガルナの前に溢れでてくると徐々に形を帯び始める。そして次の瞬間にはまるでアレアが生き返ったかのような錯覚を覚えるほどハッキリとした姿でそこに立っていた。

その姿に、リガルナは言葉もなく驚愕した表情で見つめていた。

瞳を閉じていたアレアの瞼がゆっくりと押し開けられると、アレアの暖かなオレンジ色の瞳が真っ直ぐにリガルナを見つめ返してくる。

『……リガルナさん…』

「……アレ…ア…」

見つめてくるアレアの瞳はどこか寂しく、そして再びこうして会えたことへの喜びに染まっていた。

アレアはふっと瞳を緩め、優しげに微笑むとすぅっと音もなくリガルナと視線を合わせるように彼の前に両膝を着き跪いた。

『…逢いたかった…』

「……アレア…」

愛しい人間を前にアレアは喜びにその表情をほころばせながら、そっと両腕を伸ばしリガルナの頬を包むように触れてくる。

どんなにハッキリとその姿を象っていたとしても、やはり残留思

念であることに変わりないのだと分かったのは、触れているはずの手の感触が伝わってこないからだ。
『リガルナさん…。あなたと一緒にいられる時間が短かった事、私、謝りたかったんです…』
「……そんな事、どうだっていい」
そう答えるリガルナにアレアはゆっくりと首を振った。
『こんな結果にならなくても、あなたと一緒の時間には限りがあった。だから、私、あなたともっと早く知りあえていれば良かったのにって、ずっと想ってたんです』
「……アレア」
『リガルナさん…。もう、全てを許してあげて下さい…』
その言葉に、リガルナは更に驚いたように目を見開いた。
アレアはそんなリガルナの視線から目をそらすことなく、優しげな微笑を浮かべたまま静かに言葉を続けた。
『私、あの日からあなたが私の為にしてくれたこと、全部分かってた。皆には悪いけど、全部、嬉しかったの…』
「……」
『私、そんなあなたも、今までのあなたも、そして今も、全部、全部大好き。全部、愛してる…』
「……アレア…」
『もうこれ以上ないほどに沢山の愛情をあなたから貰って、私、凄く幸せでした』

最終章：離別

その言葉に、リガルナはゆっくりと、しかし力強く首を横に振った。

「違う。貰ってばかりなのは俺の方だった。俺は…俺はまだ、お前に何もしてやれていない…」

リガルナの言葉に、今度はアレアが首を横に振る番だった。

『いいえ。そんなことないです。あなたは傍にいてくれた。捨てようとした命を救ってくれた。そして何より、私が抱いた想いと同じ想いを抱いていてくれた…。私を、好きでいてくれた…。これ以上ないほど、十分過ぎるほど私は沢山、本当に沢山貰いました』

アレアの目には涙が浮かんでいる。今にもこぼれ落ちそうなその涙に目を潤ませながらも、アレアは笑みを崩さない。

触れているはずの手の感触が感じられない。温かいと感じさせているのはリガルナの記憶だけ。

それが、酷くリガルナの心を傷めさせた。

あぁ、やはり現実に彼女は存在しなくなっていたと…。分かっていてもそうじゃないと信じたかった心が、この時脆くも崩れていく音を自分の中で聞いた。

『もうこれ以上自分が苦しむ道を選ばないでください。これ以上自分が傷つく道を選ばないで下さい。私が唯一望むのは、あなたはあなたの為に生きて欲しいんです』

リガルナはそれ以上言葉を発することが出来なかった。ただ、せめて、アレアの語る一語一句全てをとり逃さないように、必死になる。

そんなリガルナの心中を感じ取ったアレアは、小さく頷くとゆっくりと口を開き言葉を続けた。

言葉はちゃんと届いている。自分の言葉は、全てリガルナの中に吸収されている。それを知ったアレアは、内心安心していた。

『いつか言っていた、すべての人に消えて欲しいと望まれているなんて、そんな事ない。お願いだから、そんな事言わないで…。世界は広いんです。私には分からなかったことをあなたは見ることが出来るでしょう？　私の代わりに、私のために、どうか世界を見て。そうすればきっといつか…。いつか、あなたの事を理解してくれる人が現れるはずだもの。私が、あなたに出会ったように…』

アレアはふっと瞼を伏せると、その頬に涙が伝い落ちた。そして何度か躊躇うように口が開かれては閉じ、そっと瞼を開いてリガルナを真っ直ぐ見つめると、再びふわりと笑顔を見せた。

『リガルナさん…。ありがとう…』

「アレア」

切なげに名を呼ばれ、その呼び声にアレアは微笑んでいた笑みをみるみる内に崩して、堰を切ったかのように切なさに大量の涙をボロボロと流し始める。

何度も息をつまらせ、胸元で強く握りしめられた手が小刻みに震えだしている。

アレアは堪えきれない涙を、それでも堪えようとしているのか、一度頭を垂れ、歯を食いしばっている。

名を呼びたい。もっと、自分の気持を伝えたい…。別れたくない…。

最終章：離別

『リガルナさん…』
「アレア、逝くな…」
やっとの事で名を呟き、リガルナからかけられた言葉にアレアはいよいよ堪えきれず瞳を閉じて涙に震える声で口を開く。
『リガルナさん…大好き…』
「アレア！」
『大好き…大好き…。ずっと、ずっとあなただけが好き…。あなたの傍で生きていたかった。あなたの為に生きていたかった。あなたの為に尽くしたかった…』
リガルナは言葉を発することができず、その場で首を横に振るばかりだ。
肉体が滅び、今また魂までもが消え去ってしまう。大切にしたいと思えた、心から愛した人を、失いたくない。
伸ばしかけた手を途中で止め、躊躇いがちにもう一度リガルナの頬に伸ばす。だが、やはり触れられない事に、アレアは更に切なさを覚え止めどない涙が溢れる。
『あなたにもっと、触れていたかった…。あなたの温かさを感じたかった…』
「アレア…！」
『ずっと、あなたと一緒に生きていたかった…』
「アレア！　俺も、俺も同じだ。お前を失いたくない！」
リガルナがそう発した言葉にアレアは堪らず両手で顔を覆い隠し、肩を震わせて涙を零した。
二人を見ていた観衆達、そして兵士や魔術師達、その場にいる全員が言葉を失っていた。いや、言葉を発することを躊躇っていた。
あれだけ凶暴性を秘めて暴れまわっていたリガルナが、ただ一人の女性を想い大切にしていたことに意外性を見出していた。あの魔

物にも、そんな心があったのかと。
そしてアレアも、リガルナに対し何の偏見もなく全てを受け入れた寛大さに感服していたと言ってもいい。
ただ、不思議と湧き上がったのは、この二人を引き離したくないと、そう思う気持ちがチラホラとあちらこちらから沸き上がってくる。
だが時は、無情にも二人を引き離し始める。
まるで、そこに生きているかのように見えていたアレアの指先が透明度を増し、別れの時が近づく事を知らせていた。
アレアは自分の指先から少しずつ消えて無くなる事に、ハッとし、そして目の前のリガルナを見つめる。
リガルナは悲壮な表情のまま、こちらをじっと見つめ続けている。

最終章：離別

アレアはそんなリガルナをその目と胸に焼き付けるようにじっと見つめながら、涙を零しながらも努めて小さく笑みを浮かべる。
『リガルナさん…また、逢いましょう…。今度は私があなたを見つけてみせるから…』
そう言い残しアレアはスゥッと風に溶けるように消え去った。
残されたリガルナの大きく見開かれた目には涙が光り、どうすることも出来ずその場に固まっていた。
何も言えなかった。胸が、これ以上無いほどに悲しさに締め付けられ、言葉が出てこなかった。
俺もお前を愛していると、ただその一言が、言えなかった…。
静かに見守っていた観衆、そしてマーナリアは切なさに涙を流し閉じていた瞼をゆっくりと開くと、リガルナを見つめた。
眩しいほどの輝きを放つ光は静かに失い、すぐに辺りはいつもの暗さを取り戻した。
唯一の灯だとも言える松明の揺れる音だけが静かな会場内に微かに聞こえてくる。
リガルナは言葉なく、ガクリと頭を垂れるとこみ上げてくる涙を堪えているかのような嗚咽が微かに漏れる。
ポタポタ…と落ちるリガルナの涙は、静かに石台を湿らせていた。
異常なほどに静まり返った会場内で、マーナリアは涙を拭うと静かに口を開いた。
「…リガルナ。あなたの犯した罪は膨大です。決して許されるべき事ではありません。あなたにはそれ相応の罰を与えます」
ことの経緯をすべて見守ってきた言葉を無くした大勢の観衆を前に、マーナリアは一間置いて再び口を開いた。
「リガルナ。あなたの持つ力のすべて、そして記憶…。それらを私に差し出しなさい。そして、生きるのです」

「！」
その言葉に、俄なざわめきが起きた。
「生きることが、あなたに課せられた何よりも厳しく重大な罰です。アレアの望みを、あなた自身の持つ本来の力を持って成し遂げなさい。あなたは今後また、一から出直す事が許されます。ここではない遠い地で、あなたはあなたの人生をやり直すのです」
マーナリアの言葉に、リガルナは言葉なくただ泣き崩れていた。だがそれが、リガルナにとって了承の意味だと解釈したマーナリアは、手にした杖を一度地面にトン、と打ち付ける。
その衝撃に、杖に付けられた装飾品がシャラン…と鳴り響き、マーナリアとリガルナを中心に大きな魔法陣が生み出され、パァァ…と白と青の混ざった光りが立ち上りマーナリアとリガルナを包みこむ。
目の前で身動き一つしないリガルナを見つめていたマーナリアの頬にもまた、一つの涙がこぼれ落ちる。
「…リガルナ。私は、あなたをずっと信じてきたわ…」
「……」
「本当は臆病なあなたを、私は知っていた。どうしてここまであなたを信じようと思っていたのか私にも分からないの。でももしかしたら私、あなたの事好きだったのかも知れない…。でも、もう今更理解してもらおうとは思わない。それでも最後に言わせて欲しいの。あの日の事は、本当に誤解だったと…」
あの日の事。それは、リガルナがレグリアナを追われる直前の事を指しているのだと理解したリガルナは、ゆっくりと顔を上げる。
涙が幾筋も伝い落ち、そこにいるのはあの当時のままの彼だとマーナリアは思った。
「…どんなにか辛く、悲しかった事でしょう。しかし、これから先まだ更なる困難は待ち受けているのです。あなたはそれを一つ一つ乗り越えて行かなければなりません。そして生きるのです。それが、あなたにできる彼女の想いに応える事に繋がるのですから」

「……マリア」
最後に名を呼ばれ、マーナリアはピクリと僅かに反応を示した。
もう随分前だというのに、恨んでいたとしても自分の名を覚えていてくれたことに、微かな喜びを感じる。
マーナリアはそんなリガルナに対してふわりと包みこむような笑みを浮かべた。
「リガルナ…さようなら…」
マーナリアは手にしていた杖をリガルナの額に突きつけると、辺りを囲んでいた光は一際大きくうねり空高く舞い上がる。
キラキラと光り輝くその魔法陣が落ち着きを見せゆっくりと消えた頃には、マーナリア達の前にリガルナの姿はなかった。

最終章：離別

高い空に、薄く掃き流したかのような雲が流れ心なしか冷たい風がふく。

空気は乾燥し、森の木々も木の葉をわずかに枯らしカサカサと乾いた音を立てて風に舞う。

以前のような賑やかさは消えたものの、その姿は相変わらず威厳を残し風格をそのままに繁栄し続けているレグリアナ。

その宮殿の一室にある窓辺に、一人の女性が立って外を見つめていた。

「あの人は今、どうしているのかしらね…」

綺麗な身なりをした一人の上品な老婆が、懐かしむかのように窓辺に佇んで空を見上げポツリと呟いた。

その老婆を見ていた初老の召使の女性が困ったように笑みを浮かべている。

「マーナリア様。またその話ですか？」

「あら、したら駄目かしら？」

「そういう訳じゃありませんけれど、いつもいつも暇があればそんな事ばかり言って。先立たれてしまったセトンヌ様がこれを聞いたら、きっとヤキモチを焼かれますわ」

そう言いながらクスクスと笑う召使に対し、マーナリアもまた小さく微笑んだ。

「そうねぇ…。でも、彼にとってもあの人の事は気がかりだったみたいだから、ヤキモチなんて焼くかしら」

「そりゃあ焼きますよ。口や表情に出さないだけで、心の中では焼いてたに決まってます」

きっぱりと言い切った召使に対し、今度はマーナリアがクスクスと笑う番だった。

小さく笑っては、時折むせたように咳をする。するとすぐに召使

が駆けつけその背中を撫でた。
「ほらほら。起きていると体に毒ですよ。ベッドに戻ってください」
「ありがとう。ごめんなさいね…。今日は天気がいいから大丈夫だと思ったのだけど…」
体をベッドに横たえ、布団を掛けてもらいながらそう言うと女性はにっこり微笑んだ。
「今日は天気も気候も確かによろしいですけれど、ご無理は禁物ですわ。それに、今日はリル様もいらっしゃるのですからゆっくり休んでください」
「そうね。そうするわ」
マーナリアはふわりと微笑み、そしてそっと瞳を閉じた。
リルとは、マーナリアの一人娘で現在の女王としてこの国に君臨している。現在では夫もいて、子供も間もなく授かろうとしている所だった。
マーナリアが眠ったのを確認した女性は、そっと窓の薄絹のカーテンを引き部屋を後にする。
女性がいなくなってから、マーナリアは薄く瞼を開いた。
「……あれからどれくらい経ったかしらね…。私もこんなに年老いて…」
そう言いながら自分の手の甲を見つめる。
シワだらけの手を見ていると、寂しいような穏やかなような複雑な気持ちになってくる。
「……リガルナ。あなたの噂をちっとも聞かないから、元気でやっているのかどうなのか、分からないけれど…。でも、毎日がこうして穏やかで平和で、そして何も便りがない事はきっと良い方向に向かっているのでしょうね」
やんわりと笑みを浮かべ、マーナリアは薄く開いていた瞼を閉じた。
「…あなたにあれから幸せな時があったことを、私はただ望むだけだわ…」

そう言いながら、スゥ…と眠りについた。

最終章：離別

「なぜかな…。何だか、懐かしい気がする…」
高台の上にそびえ立つ、真っ白な壁のセントラムズ教会。その教会から見渡せる広大な土地にはレグリアナ王国が今も昔と変わらずにその圧倒的な存在を残し、繁栄し続けている。
茶色の短い髪が風に揺れ、背には大きな荷物を背負い眩しそうにレグリアナを見つめているこの男の名は、リオラスと言う。
彼は、旅から旅を続ける放浪の旅人だった。
リオラスは目の前にあるレグリアナ王国を、目を細めて眺めながらその場に佇んでいた。そんな彼の元に、この教会の神父が声をかけてくる。
「リオラス殿。どうなされましたかな？」
そんな神父を振り返りながら、リオラスは二コリと微笑んだ。
「いえ。この国に立ち寄ったのは初めてなのに、なぜか懐かしい気がして…」
その言葉に、年老いた神父はニコニコと目を細めて笑い、何度も頷いてみせる。
「そうでしたか。きっと、あなたの中の知らないあなたが覚えておるのでしょうな」
意味深なその言葉に、リオラスは少し戸惑ったような笑みを零した。
「…さぁ、どうなんでしょう。僕には分かりません。でも、こうして旅をする事も僕が生まれるよりもずっと以前からそうしなければならなかったような気がするんです」
神父は肩を揺らし、優しげに笑みを浮かべて短く笑う。
「昔のことは誰しもそうそう覚えているものではありませんぞ。それが、我々の知るよりもずっと昔の事は尚更のこと」
「神父様。神父様はまるで僕のことを知っているような口ぶりです

ね」
　リオラスがそう言うと、神父はただニコニコと笑うだけだった。
「さぁ、どうですかな？」
　意味深に呟く神父に、リオラスはただ困った笑みを浮かべ、そして再びレグリアナ王国に視線を巡らせた。
「僕、決めました。腰を落ち着けるならこの国がいい。豊かそうだし、平和の象徴だと謳われるほどの大国ですしね」
「ほう。この国に住まれると申されるのかな？」
「はい。もちろん、僕は旅をしなければなりませんからずっとここにいるわけには行かないですけれど、それでも旅から疲れて帰ってきた時はこの国に出迎えてもらいたい」
　サァー…と吹く風が心地良く、リオラスと神父の間を流れていく。
　リオラスは再び神父に視線を戻すと、やんわりと微笑んだ。
「それに、僕のもう一つの夢は、オルゴール店を営むことなんです」
「ほほう。それは良いですな」
「えぇ。店を構えていれば、食べることには困らないでしょう？」
　ニコニコと笑いながら話すリオラスの言葉に、神父は優しい眼差しで微笑み返した。
「神父様ー！」
　セントラムズ教会からひょっこりと顔を覗かせた一人の若いシスターが、声を張り上げて神父を呼んだ。
「お部屋のご用意が整いましたー！」
「おお、そうか。リオラス殿、では中に入りましょう。今日はここで休まれて、明日早くあの国に出向くと良い。近そうに見えてかなりの距離がありますからな」
「はい。ありがとうございます」
　神父に誘われ、リオラスは教会に向かって歩き出す。

最終章：離別

教会の入口まで来ると、ドアを開けて待っていたシスターがため息混じりに神父に愚痴を零した。
「神父様、どなたがお越しになっても良いようにお客様のお部屋を開けておいてくださいとあれほど言っておりましたのに、あんなに散らかして…」
「おお、すまんすまん。どうにも自室のベッドは固くてなぁ…」
「まぁ、神父様がそんなこと言ってはいけませんわ！　神のお怒りを買いますわよ」
プリプリと怒っているシスターに対し、神父はただニコニコ笑いながら部屋へと戻っていく。
その場に残されたリオラスは、二人のやりとりに一瞬呆然とするも思わず笑い出す。それに気づいたシスターが怒った表情をそのままにパッと振り返った瞬間、リオラスはどうして良いか分からず思わずバツの悪そうな表情を浮かべた。
「あ…。すいません…」
咄嗟にそう謝ると、シスターはニッコリと満面の笑みを浮かべた。
「いいえ、お見苦しいところをお見せして申し訳ありませんわ。さ、どうぞ。お部屋へご案内致しますね」
シスターに導かれ、客室へと通されたリオラスは綺麗に慣らされたベッドの上に大きな荷物を置き、溜息を一つ吐く。
その背後で、シスターは持ってきたランプをそばのテーブルに置きながら声をかけてくる。
「リオラスさん。お手洗いはこの部屋を出て左手の奥にあります。お夕飯は夜のミサの後ですから大体7時くらいです。それから夜はこちらのランプをご使用下さいね」
てきぱきと手馴れた様子でそう案内するシスターに、リオラスはニッコリと笑みを浮かべて頷いた。

「あぁ、ありがとうございます。でも、すいません。今日訪ねてきたばかりで急に泊めてもらって…。少し休ませてもらえればそれで良かったんですけど」
遠慮がちにそう呟いたリオラスに対し、シスターは首を横に振った。
「いいえ、とんでもありません。困っている人々に手をお貸しするのが私たちにできる唯一の事ですから。それに、陽が傾いているのに出歩くのは危険ですもの。あまり気になさらずにゆっくりしていって下さい」
「ありがとうございます」
ニコリ、と微笑んだシスターはふっと目の前のリオラスを見上げた。
リオラスは不思議そうな顔をしてシスターを見つめ返すと、シスターはくすっと笑い踵を返した。
「な、何か…？」
「いいえ。何でも。それよりもリオラスさん。つかぬことを覗いますけれど、どうして旅を続けていらっしゃるんですか？」
唐突なその質問に、リオラスは若干面食らったような顔を浮かべるが、すぐに困ったような笑みを浮かべて後頭を掻き始める。
「なぜと言われても…。ただ、何となく旅をしなければならない気がしていて…。それに世界を見てまわるのは大変なことですけど、なかなかこれで面白いんですよ。いろんな文化があって色んな人がいて…。正直面食らうことの方が多いのですけど、でも、例え言葉が通じなくても心で触れ合えるのは凄く素晴らしいですから」
困ったような顔とは裏腹に、その口ぶりは楽しくてしょうがないと言わんばかりだった。
その言葉に、シスターもまたにっこりと微笑みながら頷いた。
「そうですね。足を踏み出さなければ分からないことは沢山ありますし、人との触れ合いは自分を育てますから良いことだと思いますわ」

「そ、そうですか？　…そうですね。僕もそう思います。それに、僕は僕の為に旅をしているんじゃないです」
「？」
「僕の持つ唯一の才能であるオルゴール作り。これを作って、僕は僕と知り合えた人全員にあげているんです。少しでも人の為に何かできたらと思って…」
　そのリオラスの言葉に、シスターは一瞬驚いたような顔を浮かべるもふんわりとした朗らかな笑みを浮かべ、胸元に下げられた十字架を握りしめてそっと瞳を閉じた。
「あなたの行いは素晴らしい事ですわ。人の為に祈り、人の為に何か些細なことでもすると言う事はとても大事なことです。あなたはきっと神に守られているのですわね」
「そんな、たいそれたことじゃありませんよ…。僕はただ、こうして知り合えた事に対するお礼のつもりなんですし…」
「いいえ。立派な事ですわ」
　シスターは心なしか嬉しそうに微笑みかけると、リオラスもまたつられて微笑み返した。
　どこか懐かしい感じがするのは、レグリアナだけじゃない。今、目の前にいるこのシスターにも、リオラスはそれを感じていた。
　シスターは「それでは…」と一言言い置き、後ろ手にドアノブを握りしめた。
「また後ほどお会いしましょうね」
「あ、はい。僕も落ち着いたら礼拝堂の方へ伺いますから…」
「えぇ、お待ちしてますわ。…リガルナさん」
「…え？」
　戸惑ったような表情を見せるリオラスに、シスターはクスクスと笑いながら扉を閉めて部屋を後にした。

終

最終章：離別（後書き）

ここまでお付き合い下さいまして、誠にありがとうございました。
少しでもお気に召して頂けたら幸いと思います。
本館サイト「Ｔｅｒｕ　Ｍｉｎａ」でも同じ物を公開しておりますが、本館では現在第二章部分の内容でボイスドラマを作成中です。
もし宜しければお立ち寄り下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5366o/

Reverse cross

2010年11月26日10時25分発行